

# 第1章 郷土の足跡

本章では、本市内各地域の歴史の概要について紹介したい。

地区は、基本的に連合町内会単位として、その中で町ごとに歴史を紹介した。しかし、地区によっては、町別よりも地区全体で述べる方が、地域への理解に資するものがあると思われるため、その地区については、町別ではなく、地区全体として述べていることを了解いただきたい。

## 第1節 幌別地区

### 1 札内・来馬地区（札内町・来馬町）

#### 地 理

札内・来馬地区は、胆振幌別川と登別川に挟まれた山岳部に位置する。

札内町は、大きく3つの地区に分かれており、それぞれに町内会を組織している。幌別地区に近い方から西札内、中札内、東札内と通称しており、西札内は道道上登別室蘭線、中札内は市道中札内路線、東札内は市道東札内路線が各地区の中心を通過している。

来馬町は、かつては、鉄道の線路までの区域を含む来馬川流域に広がる町であったが、昭和49年4月の町名地番改正の際に、平たん部が中央町や常盤町として分離され、現在の山岳部のみが残ることとなった。その中でも来馬川によって東来馬地区と西来馬地区に区分されている。東

来馬地区には町内会組織が結成されているが、西来馬地区は、戦後の緊急開拓事業の移住者が昭和30年代に相次いで離農して、片倉町などに転居したことから、現在は住民が少ない。

#### 札 内 町

札内町は、岡志別川と登別川に挟まれ、上は上登別町、下は千歳町に接しており、約8万年から5万年前に噴火した倶多楽火山の火山堆積物などで高台を形成している。そのため水はげが非常に良く、この高台に住み続けていくためには、水の確保が重要な課題であった。

「札内」という町名は、「サツ・ナイ」（乾いた・沢）というアイヌ語に由来する。「幌別町のアイヌ語地名」では、この「サツ・ナイ」という沢は、現在、登別川と高速道路が交差する場所から札内の高台に向けて伸びる空沢を指すという。

札内地区は、アイヌ語地名のとおりに水が得にくい土地柄であって、明治期初頭までは継続的に人が居住していた跡は認められず、狩猟その他で立ち入る土地であったようである。そのような土地に人が定着しはじめるのは明治期に入ってからとなる。

明治初頭の本市は、四国方面から多くの移住者を迎えることになる。先住のアイヌ民族、明治3年から移住してきた片倉家旧家臣団、明治10年代以降の四国方面からの移住者たちによって、平地で比較的農地に活用しやすい土地はすでに確保されており、その後に続く移住者が平地で土地を確保することは明治15年頃には難しくなりつつあった。実際、明治15年には移住者の多くの出発地である愛媛県令にあてて、「農地として活用可能な土地が乏しく、移住者を受け入れる余地が少ない」との通

知が幌別郡から出された。しかし、その後も道内の他の地区に移住する予定であったが幌別郡に引き留められたり、先に移住してきていた者を頼ってくる親族などの移住が後を絶たなかった。

明治20年に室蘭に屯田兵が入ると、札内地区も屯田兵用地として、現在の市道カルルス路線に沿って間口1000間(182ド)、奥行き150間(273ド)の区画が置かれた。この区画は、道区画と支庁区画に分けられ、道と支庁に分けて測量区画した。しかし、この土地は明治37年9月に「屯田兵条例」が廃止されるまでの間、屯田兵は1人も入植することはなく、その後は民有地として払い下げられた。

明治期後半の移住者のほか、早い時期に幌別郡に移住した者の中でも、より広い土地を求めて札内地区に移転する者もいた。こうして徐々に人口が増えていった札内地区では、明治33年に幌別尋常小学校附属札内簡易教育所を開設した(札内町80番地付近)。しかし、水が得にくいことや、土が火山灰土であることから思うように収穫することができず、住民が転出したことに伴って児童数も減少し、明治45年当初から休校が検討された。休校は一時沙汰止みになったが、大正2(1913)年に夏場の低温で大凶作となり、20数戸あった入植者のうち大平庸吉、杉本久太郎、三原卯三郎、土井亀次郎、脇梅吉、赤松虎吉の6戸が残るのみとなり、児童数も激減したことから、同年10月に閉鎖された。札内地区に残った6戸であったが、離農者が残した畑を利用して馬を飼育し、耕作地も自然と増えたので生活状態は徐々に良くなっていった。

この頃の農作物は、馬鈴薯、大豆、小豆、そばで、地味が悪いものの相当量の収穫をすることができた。特に大豆と小豆は室蘭や小樽方面に出荷され、現金収入を得る手段となった。また、明治25(1892)年

に鉄道が敷設されると、札内地区では盛んに木材が枕木として切り出された。一方で、浜に魚粕の釜焚きに出かけるなどして収入の道を確保した。主食は、芋やトウキビ、そばでこれに少々の米を混ぜて食べ、そばは団子状にして常食にしたという。

昭和9(1934)年に壮警村(現壮警町)から幌別村長となつて赴任してきた今泉武雄は、札内原野の開拓に力を入れた。その1つとして昭和14年に北見からの団体入植を進め、一部が入植するに至ったが、アジア・太平洋戦争の勃発などにより大きな実を結ぶことはなかった。

昭和20年、戦争が終わると札内地区は、国の緊急開拓事業での樺太から引揚者や、復員してきた人々の受入れの候補地となった。昭和21年、札内、西来馬及び上鷲別が緊急開拓事業施行地に指定され、翌22年に札内地区には39戸が入植した。樺太からの引揚者は、比較的的土地に余裕があつた東札内地区に多く入植した。彼らは昭和25年に東札内神社を創建し、これからの開墾における心の拠り所として樺太時代に祭つてきた神社を分祀した。その2年後の昭和27年12月には、東札内の住民7軒の連名で馬頭観世音の石仏を建立し、開墾に従事した馬を慰霊した。戦争が終わっても札内の自然環境は依然として厳しく、戦前と変わりなく各家庭に水道も電気も通ることはなかった。そして、昭和29年の冷・風・干害では一層生活が困窮、生活保護世帯が増した。昭和30年4月までに離農した世帯は、半数に近い31戸に及んだ。

このように苦労を重ねてきた札内地区が大きく転換するのは、昭和30年代に入ってからである。

昭和37年、登別町開拓農業協同組合が再建計画を建て、土地改良、機械化、電化に乗り出した。この年には全国開拓の手本として佐々木徳己

が小豆で全国1位となり、農林大臣賞を受賞した。生活改善に向け、農業に従事する女性も女性会組織を立ち上げ、ここで鶏を飼って卵を売ったり、畑で作った野菜などを安い値段で町場に卸すなどして貯蓄に励んだ。昭和38年には札内に電気も通り、水道も完備した。また、北海道地方産業開発青年隊々員12名によって、ホイールトラクターとブルドーザー各2台を用いて、約20畝の新たな耕地の開墾と約30畝の既耕地の心土耕が行われた。機械による農地整備作業は、従来と比べ格段に作業時間を短縮することが可能となった。そのため、開拓農協組合員が機械化の一層の推進を決意する契機の一つとなり、翌年の「農業機械センター」の設置につながった。導入した重機によって土壌改良を行い、農業の主力も畑作から酪農や畜産へと転換していった。昭和38年、230頭の乳牛が札内地区で飼育され、昭和41年には10万羽を飼育する養鶏場が進出、昭和43年には肉牛供給センターが設立された。

また、昭和39年に町が「開拓婦人ホーム」を開設し、昭和40年には札内地区全体の心の拠り所となる札内神社が地域住民の手によって建立された。

このように、かつては住民の多くが生活に困窮する地区とされた札内地区も徐々に力を蓄えていった。

そのような札内地区であったが、昭和45年に登別市開拓農業協同組合が登別市肉牛飼育生産組合を相手取って、貸金請求訴訟を起こすという事件が起きた。このときの裁判所の仮処分によって、札内牧場に「肉牛の移動、売却を禁ずる」という立札が建ち、黒毛和種肉牛410頭に焼き印を推す「有体動産仮処分」が実行された。本件の詳細については、『市大ふるさと登別』下巻第二編〔11〕の2に記載のとおりであるが、昭和

47年6月、約2年におよんだ肉牛紛争は、市を始め関係者の努力によって和解にこぎつけ、全面解決を見るに至った。

主力を畑作から酪農へと転換した札内地区の農業は、農業者の努力などから高質な生乳を生産するようになった。そして、札内地区だけではなく、本市内の農業者全般に共通することであるが、北海道内の他地域では多い「組合勘定」を廃止したことにより、零細農業者は経営面で苦しい場面があるものの、負債が増えにくいとの効果があり、経営が安定していった。

農業形態の変化によって地区の様相が転換していった札内地区であったが、昭和40年代後半から50年代にかけて、国内や北海道内の動向から受ける影響が強くなっていった。

昭和38年に苫小牧港が開港すると、道都・札幌市と重要港湾である室蘭港を結ぶ国道36号は渋滞が発生し、高速化が求められつつある物資輸送にも影響があるものと考えられた。そのため、室蘭港と札幌市の間を苫小牧市を経由せずに結ぶ室蘭・札幌間（美笛経由）道路が立案された。

本道路の計画によって、それまで農道であった現在の道道上登別室蘭線は道道認定を受け、昭和61年10月には、登別川に架かる「新登別大橋」が本路線の一部として建設された。この橋は、室蘭市や幌別地区と、登別温泉や洞爺湖温泉などを結ぶ経路として、また、橋から川まで120mの高さがあることや、遠く太平洋まで見渡すことができる眺望、「逆ローゼ型」とされる橋の姿などを見るために、多くの観光客が訪れるようになった。そして、昭和57年には、札内地区に「日本工学院北海道専門学校」が開校し、学生も行き来するようになった。それに加えて、昭和60年には「登別カントリークラブ」が市道カルルス路線沿いに開業し、

ゴルフ客も往来するようになった。

それまで道で出会うのは全て顔見知りという農村地帯であったのが、観光客や学生なども行き交う地区へと変貌していった。

このような流れの中で、昭和59年9月29、30日には、農業の普及を図るために「登別農業まつり」（通称「大地の祭典」）が初めて開催された。また、平成2年の創部以来、本市で夏季合宿を行うようになった東海銀行女子陸上部（U F J 銀行女子陸上部）となり、平成16年に廃部）も平成7年からは冷涼な気候の札内地区で練習を行うようになった。

平成4年に農林水産省が「グリーン・ツーリズム」を提唱し、その2年後の平成6年に「農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律」（通称「農山漁村余暇法」）が制定された同頃、札内地区では北日本乗馬サービス「バンダナ」（平成6年）が開業し、それ以降も登別オフロードパーク（平成18年）、登別ホースパーク遊駿（平成24年）をはじめとする観光客を主なターゲットとする施設が開業した。

酪農の町として牧草畑が広がる札内の町は、情報処理の専門学校、ゴルフ場、個性的な趣味を楽しむ観光施設などができ、大きな変化を遂げたが、人口も順調に増えていくことにはならなかった。農業を主力産業としているまちのほとんどが後継者を見いだせずに定住者を減少させているように、札内もまた、人口減少と少子高齢化に歯止めはかからず、生徒数12名にまで減少した平成10年、札内小中学校が廃止となり、札内・来馬地区の子ども達はスクールバス「ぼんとこ号」で幌別小学校、幌別中学校へ通うこととなった。

ところが、札内小中学校の廃校は跡地利用を巡って登別農業の6次産業化を進める契機となった。登別、室蘭には現在14戸の酪農家がいるが、



札内高原館

丹精込めた土壌改良や牧草作りが実を結び、乳牛たちは極めて良質の生乳を生産することが出来ていた。その結果、平成15年、16年と2年連続で細菌数と体細胞数からみて衛生的乳質が道内一であると評価されたのである。平成12年、本市が1億5千万円を投じて札内小中学校を「札内高原館」という商品開発研究施設にリニューアルさせていたが、様々な試験期間を経て、平成16年にいよいよ乳質全道一の生乳を活用して、チーズやアイスクリーム、プリンなど次代の「登別ブランド」商品を製造販売するため、「(有)のぼりべつ酪農館」が設立されたのである。翌17年には「のぼりべつ牛乳」がデビューし、販売を始めた。平成18年には、学校給食で「のぼりべつ牛乳」が配られることになり、登別の子ども達は毎日登別ブランドのおいしい牛乳を飲むことになったのである。

平成21年、「のぼりべつ酪農館」は有限会社から株式会社へ商号を変えし、その後も第1次産業としての農業で生産された生乳を加工製造（第2次産業）して「のぼりべつ牛乳」などに変え、第3次産業としての流通販売までトータルで行うという、複数の産業に跨って付加価値を高める手法を実現した。

本市は全国でも屈指の観光地であることから、「のぼりべつ酪農館」

の取組は大きなヒントを与えてくれた。「のぼりべつ牛乳」は食においては極めて有力な資源となるもので、観光土産品としてのカステラやプリン、チーズなどと結びついた商品開発も期待されることである。また、宿泊体験のメニューについても、札内の自然を生かした心身のリフレッシュにつながる健康メニューや、農業体験を交えたものなども需要が期待されることである。「のぼりべつ牛乳」ばかりではなく、鹿肉や豚肉、牛肉などにも新商品開発の動きが起き、地場産品、地場産業の活用にあたって、第1次産業と第3次産業を組み合わせたリ、第1次産業と第2次産業を組み合わせたりする産業の複合化を目指す動きは、今後一層強まっていくものと思われる。また、これと歩調を合わせるかのように、平成27年から「開拓記念樹」ミズナラの近くに、太陽光パネルが並んで自然エネルギーの活用をはかっている。

同じく、その地にトライアングル姉妹都市を提携した海老名市から多くの市民が交流に訪れ、植樹を行っていた。

札内地区は、古くて新しいものが混在するところである。

## 来馬町

現在の来馬町は、来馬川を中心に胆振幌別川から市道カルルス路線、鉄道に挟まれた山側の地域を指すが、昭和49年4月の町名地番改正以前は、鉄道からカルルス町までの区域を「来馬町」としていた。

「来馬」は、アイヌ語の「ライバ」に由来しており、『幌別町のアイヌ語地名』ではその意味について、「Ray (死んだ) Pa (川口) の意で、古川の川口をさす」と解説している。胆振幌別川に来馬川が合流するあたりの様子を指していたようである。ちなみに「ライバ」がつく地名

は、富岸川が鶯別川の支流であったころの川名「ワシベツライバ川」や、現在の鉾山町を流れる「鶯別来馬川」がある。

西来馬地区は、胆振幌別川と来馬川に挟まれた地域で、特に胆振幌別川とボンライバ川に挟まれた標高約180mの大地には、昭和22年6月15日に及川年巳を団長とする日本製鉄(株)の退職者7名が入植し、開墾を進めた土地である。これも火山灰が凝結した岩の上にできた台地のために水を確保することが難しく、急崖を下ってボンライバ川で水を汲み、それを家の側にもうけた大きな水槽に貯めて生活用水や農耕に使用したという。その後、当初の7戸からは入れ替わりがあったが開墾は進められた。後発で移住した世帯には行政から早期に水道管を布設するとの説明があったというが、地形などの問題からそれは果たされず、逆に昭和30年代半ばには離農をすすめられるに至った。その後、間もなくして全戸が離農し、幌別の市街地へと移転した。現在は開拓記念碑(入植後10年を記念して昭和31年9月15日に建立)が現存するほか、かつての農地には植林がなされている。

また、この入植地の西側には「蔭の沢鉾山」があり、銅鉾が採掘されていた。この鉾山は、昭和14年に今堀喜三郎によって採掘が始められ、昭和15年4月15日に広島市の松本勝太郎が買収、採掘するが終戦によって昭和20年9月に休鉱した。昭和25年度に操業を再開したが、同30年頃には鉾床が尽きて閉山となった。この戦後間もなくの閉山期間中、鉾山主が広島県に居住していたことから不在地主と見なされ、農地改革の対象地となるが、その後は除外された経緯を持つ。

東来馬は、現在1つの町内会が組織されており、市道カルルス路線に沿って上っていくと、軽種馬の牧場が並んでいる。これらの牧場からは、

日本中央競馬会主催の競馬などで活躍する馬が生まれている。また、牧場主が共同で馬に因んで馬頭観世音の石碑を土井家の裏手に建立した。

さらに上つていくと、陸上自衛隊来馬演習場が設けられている。明治32年にカルルス温泉が開湯した際には、この演習場の敷地内を通行する道が設けられていた。

来馬町は、現在、市街化調整区域に区分されており、また、大部分が農地であることから所有権などの変動は多くないが、令和元年に「来馬演習場」手前の牧草地の中に養豚業を営む「ビイクトリーポーク登別農場」が開設された。同農場は、広さ約30ヘクタールの敷地内に豚舎7棟のほか管理棟など計18棟の建物が備えられ、繁殖から肥育までを一貫して行う計画で、常時1万1千700頭を飼育して年間2万2千頭の出荷を目指している。北海道産の飼料を使用した「登別のブランド豚」として各方面から期待が寄せられている。

#### 参考文献

- ・登別町『登別町史』昭和42年
- ・登別市『市史ふるさと登別』昭和60年
- ・北海道新聞社『北海道新聞』各号
- ・室蘭民報社『室蘭民報』各号
- ・知里真志保・山田秀三『幌別町のアイヌ語地名』平成16年復刻版

## 2 鉄南地区（幌別町・幸町）

### 地 理

鉄南地区は、西端が胆振幌別川、東端を現在の国道36号と旧国道が分岐する富浦町との境までの鉄道よりも海側の区域である。

海岸の多くは国土交通省の所管であるが、幸町が面している海岸については、隣接する富浦町の一部とともに農林水産省の所管となっており、海岸保全事業として昭和39年度から57年度にかけて護岸整備が行われた。

### 幌 別 町

鉄南地区で人口が一番多い幌別町は、元々は本市の中心地として形成されてきた地区であった。

胆振幌別川を指すアイヌ語地名「ポロ・ベツ」に由来し、多くのアイヌ民族が居住をしていた。江戸期に入り、松前藩による商場知行制が導入されると、ホロベツは同藩々士の細界家の知行となり、代々受け継がれていった。その後、商場知行制が場所請負制になると、当時の主要な産品であるサケなどの漁獲が多くなかったこともあり、隣のエトモ場所と共同で請負にされたり、西地（小樽内方面）への出稼ぎなどが行われたりした。また、松前藩においては、基本的にアイヌ民族に対する農耕が認められていなかったが、ホロベツ場所に関しては収入が少なく、生計維持が困難であったこともあり、特例として畑作が認められた地区でもあった。

胆振幌別川のほとりには、会所が設けられたほか、通行屋（官営の旅館）が設けられていた様子が、寛政11（1799）年に蝦夷地巡検を行っ

た蝦夷地取締掛・松平忠明の絵図からもわかる。この絵図に描かれた番屋は、同年に津軽藩（青森県西部）が幕府から蝦夷地警備を命じられた際に足軽勤番小屋として設置したものであった。会所横には、後に刈田神社となる稲荷社あるいは弁天社と記される社が設けられていた。

明治2（1869）年8月に「蝦夷地」が「北海道」と命名された際に、ホロベツにも「幌別郡」が置かれた。同年9月に旧仙台藩士である片倉小十郎に支配が命じられた。支配を命じられた片倉家では、同年11月に小十郎の子・豊七郎（後の景範）と家臣数名が、開拓使からの引継ぎや現地調査のために幌別郡を訪れている。同郡の永住人の1人である東海林栄蔵宅を2つに分けて、開拓所と集議所を設置した。引継ぎは順調に進んだものの、冬季に向かう時期であったこともあり、詳細な調査は難しかったようである。

翌3年に第1回の移住団が移住してきた。現・宮城県塩竈市の寒風沢港を出港した一行は、船路を続けて室蘭港に入港。上陸後は陸路を徒歩にて幌別郡に至った。その後の片倉家とその家臣団の活動については、若干の年代の相違があるものの日野愛熹が著した『明治二年以降片倉家北海道移住顛末』に詳しい。

明治4年に明治政府は、片倉家をはじめとする各藩などによる分領支配を廃止し、開拓使が一括して支配する体制を敷いた。そのため、幌別郡も、それまでの「片倉家とその家臣団による統治」から「開拓使による統治」へと移行し、開拓使の幌別出張所を設けて片倉支配を引き継いだ。出張所には齋藤良知が書記に、日野愛熹が移住貫族取締役となるなど、片倉旧家臣団が多く採用された。

明治10年、開拓を進めて農業の振興を図ることに注力していた開拓使

は、アイヌ民族における農業成功のモデルケースとして、養蚕にもいそしんでいた幌別村のカンナリキと、その妹・アシコロクの2名を表彰した。カンナリキは、同年4月に長男の太郎を室蘭市の常盤学校に入学させた。太郎は、明治16年12月に札幌師範学校を卒業して「小学初等科教員免許」を取得し、創成学校（札幌市）で教鞭をとった。この間、幌別郡のアイヌ民族の間では、アイヌ民族のための学校設立に向けた活動が行われ、札幌県に対しても要請活動が行われた。しかし、札幌県では、この要請を却下し、幌別学校（明治16年開校）の分校としてならば良いとの結論を出した。しかし、幌別学校の分校では所期の目的を果たせないと判断したのか、幌別のアイヌ民族が分校を設置するための活動をした様子はうかがえない。

この頃の様子について、本市が所蔵する戸長役場などが作成した文書、北海道立文書館などが所蔵する開拓使や札幌県などが作成した文書のほか、明治10年代後半に相次いで幌別に来訪した外国人が記した記録がある。その記録には、ジョン・バチラーが本国に送った報告書のほかに、お雇い外国人として東京帝国大学教授として赴任していたB・H・チェンバレンによる口承伝承や、グッドリッチによる日食に驚くアイヌ民族の様子の記録などがある。

明治18年8月に金成喜蔵（カンナリキ）が営業を開始した旅館に、明治19年5月、聖公会の布教を目的にジョン・バチラーが妻のルイザ、養女キンのほかに、召使いのパラピタとその妻・アシコロクとともに宿泊している。パラピタは、登別牧場で働くアイヌ民族の中に同名の人物を見ることができ、その妻のアシコロクについては、約10年前に開拓使から表彰を受けたアシコロク、その人であった。そして、その3日後にB・

日・チェンバレンがバチラーを尋ねて幌別村を来訪し、約1か月間幌別に滞在している。チェンバレンは、幌別に滞在した1か月を含む北海道滞在中に、各所でアイヌ民族から口承伝承を聞き取り、それを記録した。記録の中には、金成喜蔵から聞き取った「バナパンペ・ペナンペ」の物語2編が含まれている。同種の物語は、後に知里真志保がまとめた『山の刀襦 浜の刀襦物語』の中にも採録されており、この説話は、幌別地方でも広く伝えられていたものと推測される。バチラーは、金成喜蔵やその子太郎などと協力して、幌別郡にアイヌ民族の子弟を主な対象とした愛隣学校の開設に尽力した。

このようにアイヌ民族の生活の舞台であった幌別地区であったが、時を同じくして本州方面からの移住者も増加していった。

記録からわかるものは、明治7年頃からとされる。その後、明治14年の紙幣整理後の経済不況と、小土地所有者の没落が本道への移住希望者を急激に増加させる要因となった。そのため、明治15年には最初の移住のピークを迎え、その後、明治19年、28年、34年と4回のピークを迎えている。明治期に、四国や淡路島から幌別郡に直接の移住者は424世帯が判明しており、その約半数にあたる204世帯が幌別地区に移住してきた。

このようにして、片倉家旧家臣団、次いで四国・淡路島方面からの移住が相次ぎ、住民に占める和人の比率が徐々に高まっていった鉄南地区であるが、先住のアイヌ民族と和人の居住地は、胆振幌別川に近い地域に和人が多く、現在の幌別町5丁目、6丁目付近にアイヌ民族が比較的多く居住していた。しかし、住居は連なっており、他の地域のように明確には分離されていなかった。このことは、明治11年に幌別郡を訪れ

たI・L・バードも『日本奥地紀行』の中で、「他の地域に比べて両者の混在が進んでいる」と述べている。

明治25年8月、北海道炭礦鉄道の岩見沢室蘭間が開業し、本市内には登別と幌別に停車場が設けられた。幌別停車場の当初の開業場所は、幌別町5丁目付近にあり、明治32年のカルルス温泉開場式では、この幌別停車場付近からカルルス温泉までの送迎が行われた。しかし、同年12月に駅舎が火災で消失したため、12月26日に有島武郎が親友の森本厚吉とともにカルルス温泉に宿泊するために本市を訪れた際には駅舎が無かつたものと思われる。有島らはカルルス温泉行きを大雪で果たせずに幌別停車場前に1泊した後に登別温泉に向かい、丸一石山旅館で1週間滞在中して新年を迎えた。幌別停車場の駅舎は、明治42年に再建されるが、地域住民が鉄道の利便性から居住地近くへの移転を求めた結果、現在の場所に移転した。

この間、明治31年に役場が幌別地区に戻った。明治21年に「室蘭郡室蘭外二か村幌別郡幌別外二か村役場」、つまり現在の本市と室蘭市を管轄する役場を鶯別岬の麓に設けたが、当時の通信事情などから管轄が広すぎるとのことで、再度、幌別郡幌別村外二か村役場となり、幌別町3丁目2番地付近に役場が設けられた。この役場では、昭和4(1929)年5月の1か月間、知里真志保が勤務したほか、アジア・太平洋戦争中の昭和16年から19年までの間、防空監視哨が設けられ、哨長の伊奈卯太郎のほか青年学校の生徒などが24時間体制で詰めていた。

幌別町は、海岸に磯舟が並び、そこから直接海にこぎ出し、漁から戻る際には、浜に設けられた「まきど」を使って船を浜に引き揚げた。まきどは、主として漁に出ないで浜に残っていた女性や子どもたちが操作





幌別の前浜の様子（『北海道幌別漁村生活誌』所収）

した。子どもたちには、お駄賃としてサラガイ（当時は白い貝殻を白粉に見立てて「女郎貝」と呼んでいた）が渡され、子どもたちは自宅に持ち帰り、カレーライスの具などとなり、現在もその味を覚えている人は多い。この頃の幌別地区の漁業の様子については、昭和11年に佐藤三次郎が著した『北海道幌別漁村生活誌』に詳しい。同著は、後に佐藤の義理の兄弟となる知里真志保が、著作を支援して共著」と述べるほどのものであった。その内容も漁期や漁法のほか、子どもの遊び歌なども採録しており、幌別地区の地誌といえる内容であった。

昭和20年11月、幌別村役場は戦後の事務量の増加に伴って職員が増加し、それまでの庁舎では手狭になったことから、幌別駅前から現在の鉄南ふれあいセンターが建つ場所（幌別町3丁目17番地）に移転した。建設にあたっては、経費節減のため古材を多用したことで、新築とは名ばかりの状態であったという。

この頃、幌別地区に大きな影響を及ぼす出来事があった。日本製鉄（株）による鉄北地区への社宅街の建設である。

昭和15年に日本製鉄（株）は、幌別村から土地を購入して、

昭和15年 22戸  
昭和17年 752戸  
昭和18年 636戸

の合計1千410戸を建設し、同社社員が相次いで入居した。また、社宅街の隣接地には、同社の寮2棟が建設された。社宅街の生活用品は、日本製鉄（株）の配給所が設けられた。これによって、鉄北地区の人口は、昭和16年の1万418人であったのが、19年には1万7千842人と大幅に増加し、それまで本市の人口、経済ともに中心街であった鉄南地区は、徐々にその座を奪われていった。

昭和35年に役場の改築計画が持ち上がった。このときも昭和20年と同様に職員数の増加によって手狭になったことが理由であった。執務室の不足から助役室も転用され、助役は町長室で執務するといった状態であった。計画では、役場の移転先を幌別小学校校横（現在地）としていた。

この計画に対して、鉄南地区の住民は庁舎移転の反対を唱え、「役場庁舎移転反対期成同盟会」を立ち上げて、地域住民の意向を町長に伝えた。その後も移転反対の立場から町議会への陳情も行ったが、町議会では「用地変更は受け入れられない」との意見が多数を占めた一方で、一部の議員からは「住民の意思を汲んで再検討しては」との意見や、「庁舎移転に代わる発展対策を講じては」との意見が出された。その結果、町は鉄南地区の発展対策を検討するというところで妥結し、新庁舎は現在の中央町6丁目11番地に建設された。そして、昭和38年4月に旧役場跡地の一角にアイヌ民族を主な対象に生活相談や職業訓練などを行う「幌別生活館」が建設された。同館では、昭和41年に身体障害者登別分会の総会が開かれるなど、福祉の拠点として長く活躍した。

鉄南地区の市街地は、近世以来の住宅の立地をそのまま踏襲しており、特に現在の幌別町2丁目、4丁目、6丁目は、住宅の立地が雑然とし、道路幅が狭くて緊急車両も入っていけないところが多く、昭和30年代から改良を求める声が上がっていた。そのため、本市では昭和48年度からの5年間で住宅を移転して、幅員6〜7メートルの道路を整備して都市としての基盤を整備しようと計画した。住宅の移転などを行い、中通りの整備を行うとともに、移転した人々が住むことができる「改良住宅」を昭和48年度に幌別東団地に2棟8戸、昭和49年度から51年度までの3か年の間に美浜団地に7棟38戸を建設した。また、昭和47年には公営住宅の幌別東団地が本市内初の4階建て住宅として建設された。

教育面でも、昭和45年4月には地域住民待望の幌別東小学校が開校した。それまでは幌別小学校に線路を渡って通学する必要があり、保護者の心配の種であったが、線路を渡らなくても良くなったこと。また、幼なじみ同士で同じ学校に通学することができる安心感が、地域住民からは喜ばれた。さらに、昭和55年には市内初2階建ての保育所として「幌別東保育所」が開所した。昭和58年には、幌別東保育所に先駆けて幌別駅近郊に設けられていた「幌別保育所」が幌別東保育所と統合した。

昭和60年、本市の福祉の拠点として旧役場跡地に「鉄南ふれあいセンター」が建設されることとなった。そのため、建設予定地の一角に建つ幌別生活館は廃止されて、同館が担ってきた生活機能は、新築される鉄南ふれあいセンターで担うこととなった。同センター内には、当初本市の社会福祉協議会が事務局を構えたほか、北海道ウタリ協会登別支部（現・登別アイヌ協会）も入居した。

鉄南地区の商業は、市制施行と同じ頃に10軒の商店などが集まって、

「鉄南商店会」を設立した。同商店会は、その後、盆踊りや町内の祭りなどを企画運営し、商店会としてだけではなく、まちづくり団体としての役割を担ってきた。昭和50年代も会員数の増加は続いたが、平成5（1993）年に国道36号が海側に切り替えられると、旧国道の交通量は大幅に減った。交通量の減少に伴って商店会々員の店舗での買い物客は減少し、商店は相次いで廃業していった。平成10年には、会員数26軒のうち消費者と直接対面する小売業はコンビニエンスストア2軒のみとなり、その他は他業種交流などを目的としての加入であったという。そのため、大売り出しなどで人出を集めてきた商店会としての役割は一定程度果たしたものと見て解散することとなり、平成8年に設立し、構成員も商店会と重なる部分が多かった「幌別鉄南地区まちづくりを進める会」が鉄南地区のまちづくり団体として活動していくこととなった。

その後、幌別地区のまちづくりに向けた努力は、連合町内会を中心として粘り強く続けられた。深刻さを増していく少子高齢化社会に向け、みんなで取り組める事業はないのかという積極的な声があがり、行政に頼ることなく自分たちで出来ることに着手しようと、平成20年、コンビニエンスストアの空き店舗を改修して、「地域食堂」として再スタートさせることとなった。定年退職後にそば打ちを習って腕を磨いた人や、地域の人々の安らぎの場を提供して高齢者や子ども達の居場所作りに貢献しようという人々の熱意によって運営された「地域食堂」は、「ゆめみる」と命名された。開業当初から近隣住民などが来店して、当初想定していた以上の成果を生み出すことが出来た。「ゆめみる」は少子高齢化社会の人々の絆をつなぐ新たなコミュニティ施設として全道・全国からも注目を浴び、多くの視察者が訪れている。また、高齢者など



ゆめみ〜る

高校生以下の子ども達に無料で食事を提供している。

幌別地区の人々は、このほかにも、目立たないが解決が難しいとされた幌別4丁目国道沿道の廃家、散乱する廃材等の撤去に向けて平成22年、北海道・本市・地域の人々との連携によって清掃を実施し、その跡地にクロマツなどを植えて、景観の改善を実現させた。

本市の旧称「ホロボツ」発祥の地としての意識が、これらの取組の原動力となっている。

## 幸町

幸町は、幌別町と富浦町に挟まれ、長い海岸線が続く地域である。その中を流れるサトオカシベツ川によって、西側が幌別村、東側が登別村の区域であった。昭和9（1934）年の字界地番改正によって千歳町と富浦町の区域となる。そして、昭和

49年の町名地番改正によって、「幸町」と名付けられて現在に至る。

町名の由来は、「今後の新しい町づくりの発展に幸の多いこと」を願ったものである。同地区には、多くのスズランが咲いており、開花時期には他の地区からも多くの人が訪れて、スズラン狩りを行っていたという。昭和35年6月の新聞記事には、貸し切りバスや乗用車で多くの観覧者が訪れている様子が報じられている。このスズランが幸町の町内会名となった。

国道36号の海側（2丁目、4丁目、6丁目）は、幌別側に古くから住む人々の家が点在していたほか、富浦町側では砂利採取が行われた。一方、国道の山側（1丁目、3丁目、5丁目）は、昭和40年代半ばから分譲が開始されて、徐々に住宅が建築されていった。ちょうど同じ時期に北海道曹達（株）が社員に対して社宅の解体方針を打ち出したことから、それまで同社宅に住んでいた社員は、職場にも比較的近い幸町に住宅を相次いで建設していった。幸町の全域は、市街化調整区域であるが、すずらん団地町内会がある幸町5丁目付近は、「都市計画法」第34条第11号の規定によって、北海道からいわゆる「50戸連たん地域」の指定を受けている。

昭和40年11月、登別町は幸町に市衛生センターを建設した。人口の増加が見込まれる中で、町内から排出される全てのし尿を衛生的に完全処理することの必要性が高まりつつあったからである。幸町の住民は井戸水を生活用水として使用していたため、建設当初は、井戸水の汚染を懸念する地域住民から反対の声が上がったが、井戸水汚染の心配がないことを繰り返し説明していく中で理解が得られ、昭和39年8月着工へとこぎ着けた。

昭和54年2月、それまでゴミ処理場への埋め立てによって処理してきた本市内から発生するゴミは、人口増加に合わせて増加していき、埋立場所の確保や公害問題などが発生した。そのため恒久的な対策を図る必要があり、焼却処理への転換が迫られていた。そこで、昭和50年度から建設工事を進めて、54年2月に試運転を開始、同年4月から本格操業を開始した。清掃工場は、平成12年にクリンクルセンターの稼働が開始されるまでの間、本市内で発生するゴミの焼却を一手に引き受けて、焼却処理を行ってきた。

清掃工場の東側には、登別ロータリークラブからの寄付や市内事業者からの資材提供などによって「市営日の出球場」が設置された。同球場では、野球やソフトボールの試合が行われたが、清掃工場の老朽化によって、新たにクリンクルセンターが建設される際に、その敷地となったことから廃止された。

平成12(2000)年3月に火入れ式を行ったクリンクルセンターが稼働すると、清掃工場は役割を終えた。

国道を挟んだクリンクルセンターの向かい側には、平成16年に市民プール「らくあ」がオープンした。同施設には、水泳用プールのほかにウォーキング用プールも設けられている。また、かつてはしんた21内にあったトレーニング施設もらくあ内に移転し、ランニングや筋力トレーニングに励む市民の姿を見ることができている。

その他、幸町には、就労継続支援施設「月とらいおん」がある。同施設は、元は長くレストランとして地域住民から親しまれてきたが、営業をやめた後に所有者から無償譲渡を受けた社会福祉法人さいわい福祉会が、障がい者の通所施設として活用している。同施設では、豆腐製品や

豆乳を使用した菓子類などを製造している。

#### 参考文献

- ・登別町『登別町史』昭和42年
- ・登別市『市史ふるさと登別』昭和60年
- ・登別市『広報のほりべつ』各号
- ・登別市議会『登別市議会議事録』
- ・日野愛憲『明治二年以降片倉家北海道移住顛末』
- ・開拓使『開拓使公文録 本庁伺明治十年從一月至十二月』（北海道立文書館 簿書5674件番号37）
- ・開拓使東京出張所『開拓使公文録 本庁伺 明治十年』（北海道立文書館 簿書5863件番号33）
- ・開拓使札幌本庁記録局公文課『長官伺書録 副 明治十年』（北海道立文書館 簿書1951件番号32）
- ・戸長事務伺届 明治18年
- ・J.K.Goodrich『AINU FAMILY-LIFE AND RELIGION』1888年
- ・Basil Hall Chamberlain『AINO FOLK-TALES』1888年
- ・知里真志保『山の刀襦浜の刀襦物語』
- ・佐藤三次郎『北海道幌別漁村生活誌』昭和13年

### 3 中央地区（中央町・常盤町・千歳町・新栄町）

#### 地理

中央地区は、地理的に本市の中央部に位置し、来馬川と線路に挟まれた地区で北側を札内町、東を富浦町と接している。

現在の刈田神社の向かい側にはアイヌ語地名で「ポロト」と呼ばれる大きな沼があり、幌別駅西口前の付近にも池があったようである。その他、「鈴木沢」や「ウツナイ」などの小川が流れるなど、中央町は湿地が広がる地区であった。一方で、常盤町、千歳町、新栄町は高台で、千歳町にあった砂鉄鉱床は、「来馬鉱山」とも呼ばれて採鉱された。

#### 中央町

「中央町」と聞けば誰もが本市の中心地区を想定するが、古くから本市の中心地区であったわけではない。明治期以前は、会所があり、街道筋であった現在の幌別町1丁目、2丁目付近が中心であった。明治2（1869）年に幌別郡の支配を命じられた片倉家旧家臣団が構えた屋敷の位置を示す「屋敷図」（北海道大学附属図書館）からは、当時の幌別郡中心地区よりはむしろ、現在の中央町3、4丁目と富士町2、3丁目の来馬川沿いに移住したことがわかる。片倉家旧家臣団の幌別移住の最終目的であった農業による自立もまた、土地が想像以上の痩せ地であったこと、気候が不順で海霧に悩まされたことから未開地の開墾が順調に進むことはなかった。漁業、農業とも当初の算段通りには進まず、大きな困難の前に立ち止まりつつも、最後まで幌別に残った片倉家旧家臣団は10名前後であった。網元に雇われたり、あるいは札幌本道の道路作業員になるなどして、その日その日の食い扶

持を稼いでいくという厳しい境遇にさらされた。

明治14年頃に本格化する現在の徳島県や香川県などからの移住者は、来馬、川上方面に入植し、1戸が約1万坪の土地を開墾した。農作物は、あわ、ひえ、そば、とうもろこし、じゃがいも、小豆、大豆、大根などで、明治35年頃には2千240反が作付された。明治17年には青森県や東京都から種もみを取り寄せて陸稲に挑戦したが、これは失敗の連続であった。稲作には、米を収穫するだけでなく、多くの用途に活用できる稲わらの確保といった側面もあり、幌別郡だけではなく、全道の開拓民が稲作の成功に向けて多くの工夫と努力が重ねられた。しかし、晴天が少なく、気温や水温も低いといった本市の気候条件の中では、稲作の成果を上げることは難しかった。

幌別郡では、明治12年頃から葉タバコの試作を行っていたが、栽培が本格化したのは明治27年のことであった。阿波国（現・徳島県）出身で商業と農業経験のあった井上藤吉が栽培した葉たばこを「北海熊」という商標で旭川や道東方面で販売すると順調に売り上げを伸ばし、明治34年には専売局から年間3銚のたばこ耕作地としての指定を受けた。しかし、翌年の収穫直前に暴風の被害を受けたり、その後も天候不順の影響で生育不良に陥ったりしたことで、本州産の良質な葉たばこの品質を上回ることはできず、次第に売り上げを落とし、長続きすることはなかった。

明治13年8月、十勝地方で大量発生したイナゴが幌別郡にも来襲し、大きな被害をこうむった。イナゴ、痩せ地、海霧などの自然条件は、農業の発展を単純に許すはずもなかった。この頃、肥料が少なくて済み、比較的土を選ばない大根の作付けがはじまり、赤根茂助が明治28年に柏

木町で本格的に生産を開始した。収穫した大根は、室蘭方面には荷馬車で、苦小牧、札幌方面には幌別駅から鉄道で運搬され、「幌別大根」の名は全道的に広まった。

明治16年2月、四国・淡路の移住者達は、「幌別を栄えたまちにする」との意気込みを込めて、横2・6<sup>メートル</sup>、縦1・5<sup>メートル</sup>の大きな絵馬を作り金刀比羅宮（香川県多度津郡琴平町）に奉納した。当時の四国方面からの移住者は北海道移住に当たって道中の安全などを祈願するために、同宮を参拝するのが恒例であったようである。『北海道札幌県胆振国幌別郡開墾略図』と名付けられたこの絵馬は、昭和54（1979）年に国の重要有形民族文化財に指定され、現在も金刀比羅宮にて大切に保管されている。また、複製した絵馬は刈田神社本殿に掲げられており、当時の移住者の意気込みを知ることができる。

明治25（1892）年、岩見沢・室蘭間を石炭を乗せて走る北海道炭礦鉄道が開通すると、幌別郡の産業構造にも変化が生まれた。

幌別郡も次第に農業一辺倒の村から、他の産業の芽が育つていった。最も象徴的な変化は、幌別駅西口前から現在の中央町、富士町を通り鉾山町へと向かう馬車鉄道（昭和2（1927）年に蒸気機関車に転換）の開通である。明治39（1906）年に幌別鉾山を小田良治が取得し、その翌年11月には、鉾石運搬用馬車鉄道9・6<sup>キロメートル</sup>が中央町との間を行き来するようになった。幌別駅西口前には馬車鉄道の停車場と鉾石の積み場が設置された。

幌別村はこの後、様々な産業を支える労働者が住居を建てて暮らし始める住宅地へと生まれ変わっていくこととなった。明治期の後半から富国強兵、殖産興業が推し進められた時代、室蘭市は鉄の街として大いに

栄え、そこに働く人々の住宅地を室蘭から鶯別、幌別へと広げていった。山坂の多い室蘭市に比べ、国道36号沿いや道道上登別室蘭線沿道は、湿地帯ではあるが、平地で交通の利便性も良く住宅地としての需要は高かった。

アジア・太平洋戦争の暗雲が低く垂れこめ、兵器の増産を求められると、一層の労働力の確保が必須となり、来馬町（現在の富士町）には日本製鉄（株）の社宅が建てられた。昭和15（1940）年から始まった建設工事は、昭和18年には総戸数1千410戸となり、総人口1万人前後の幌別村の人口は1万7千235人まで急増した。また、新川町のポンプ場向かいには日本製鉄（株）の寮が建設された。この寮には終戦間に学徒勤労動員によって、日本製鉄（株）で働くために来た学生の宿泊所としても使用されたという。こうして幌別村の中心地は、それまでの漁業が栄える「鉄南」から、新たに市街地を形成しつつある「鉄北」へとシフトしはじめた。

鉄鋼産業の隆盛は、その後は終戦とともに一度静まるが、昭和25年のいわゆる「朝鮮特需」によって再び鉄の需要が高まり好況を呈すようになり、戦後の経済復興が加速された。この頃、本市においても昭和25年、日鋼炉材工場跡地に北海道曹達（株）が進出し、昭和26年の町制施行、昭和28年の警察予備隊（現陸上自衛隊）の幌別移駐とそれに伴う商店等の進出などがあり、街の景色を大きく変える出来事が立て続けに起きた。この頃の中央町は、幌別駅と富士町方面を行き来する通勤や帰宅する多くの労働者であふれかえっていたという。幌別駅から富士町に向かう道道沿いには、様々な業種の店舗が軒を連ね、路地に曲がると多くの飲食店が次々と開店した。昭和32年、鉄北地区からの利用者の増加に対応す

るため、幌別駅は西口を開設した。

昭和36年、登別町役場が幌別町から幌別小学校横へ移築されると、小学校と役所という2つの大きな公共施設の存在は、中央町（当時は来馬町）が中心街であることを印象付けるに十分であった。中央十字街周辺に様々な業種の商店が並び、町中のにぎわいが形成された。国道36号と中央通を行き来するコンクリート製品を運ぶ大型自動車も増え、「農地」の減少とともに、宅地が増加していった。

登別町は、その後も順調に人口を伸ばし、やがては人口5万人超えの地方中堅都市へと進展していきこうとしていた。中央町は、現在のらいば公園、アーニス周辺を中心街とし、薬屋、時計眼鏡店、オモチャ屋、家具、写真店、菓子店、理美容、飲食料店、衣料品店など、様々な業態の商店が営業し、町内で最もにぎわいのある商業地区となっていた。娯楽施設としてパチンコ店のほか、スマートボール場、卓球場やローラースケート場が営業し、2軒の映画館があった。

昭和40年には商店会組織が協同組合を結成し、幌別の街に始めてのデパート「ダイヤデパート」が開店した。肉屋、オモチャ屋、洋品店、楽器屋などがあった。同店には「西胆振初」といわれたエスカレーターを備えたデパートとして話題を呼び、子ども達は何度もエスカレーターに乗り込んだ。その向かいには総合食料品店として、プリンススマートもオープンした（前身は「新映座」という映画館）。にぎやかな商店街は幌別にも銀座通り商店街として誕生し、昭和45年12月には安心して買い物ができるように「歩行者天国」を始めた。

しかし、時代の流れは想像以上に速く、昭和30年代後半から昭和40年代にかけて馬車などが一気に姿を消し、輸送手段の主流は自動車となつ

た。モーターゼーションの進展は生活圏を拡大し、地元の小さな店舗で

はなく、大規模な駐車場を完備した大型店で様々な商品に触れて商品を選ぶように変化していき、地元商店街での消費を鈍らせた。また、新日本製鉄（株）や（株）日本製鋼所の労働者が多かったこともあり、勤務先と関連する室蘭市内の店舗で買い物する消費者も多かった。このような消費者の流れを取り戻そうと、中央町の商店街の人々を中心となつて、お盆の時期には子ども盆踊りや仮装盆踊りをやって幌別の中心街にふさわしい賑わいの場を作ることに努めた。夏のまつりは、昭和50年代に「市民まつり」という名称で市長が先頭（実行委員長）となつて開催し、昭和56年には「提灯まつり」に名を変え、地域の個性と特色づくりに励んだ。

昭和47年10月に登別郵便局は、幌別町4丁目から中央町2丁目（幌別駅前）に移転した。その後、地域住民の増加に伴う取扱事務量の増加や窓口業務等の機械化に伴って、局舎の狭隘が著しくなっていた。また、この当時東室蘭郵便局が担当していた鶯別地区の業務も登別郵便局に移管される予定となっており、局舎拡張の必要性が増していた。昭和59年、北海道郵政局では、登別郵便局に隣接する土地にある商工会館の買収について、所有者である登別商工会議所に申し入れを行った。商工会議所では郵政業務における市民の利便性の向上のために、協力すべきとの観点から申し入れを受けることとなり、昭和61年8月4日から増築工事に取りかかり、翌62年10月に竣工して業務を開始した。

中央地区は、古くからの商業集積地区であったが、老朽化や低層の木造店舗であることや、幌別駅から放射状に延びるかつての軌道跡に整備された道路が複雑狭隘であったことから、交通安全対策や防災の見地からも改善が望まれた。

その中で平成4（1992）年3月、中央地区を再生し、活性化するために中央町地区18・6鈔を対象にした「登別市中央町地区更新計画」が策定された。この計画は、平成5年6月8日に、「登別市市街地総合再生計画」として建設大臣の承認を受けた。

平成4年4月20日、地域住民と同地区の未来像について協議するために更新計画の説明会を開催し、地域住民からの賛同を得ることができた。そして、同年9月4日に富士町2丁目14番地付近から中央通までの区間（第1工区）の事業認可を建設省から受け、平成5年5月14日には北駅前通の区域と幅員の変更を内容とする都市計画の変更がなされた。

平成6年4月には、中央通から幌別駅前までの区間が市道から道道に昇格し、北海道が事業主体となって幌別駅前広場から旧日本製鉄（株）社宅入口までの道路の拡幅整備が行われることとなった。

平成6年12月9日、協同組合登別中央ショッピングセンターが市街地再開発事業（平成4年度～6年度）と小売商業店舗共同化事業（平成6年度）を併用して進めてきた「登別中央ショッピングセンター・アーニス」がオープンし、当初計画の第1段階が完了した。

次に、計画の第2段階として来馬川に架かる富士橋を中心とした富士橋大通り商店街振興組合（後に「らっぱ通り商店街振興組合」に改称）の加盟店の店舗建替えや街並みの整備が進められた。

整備は、事前に組合員が協議して定めた「店前の駐車場は原則として認めない」、「店舗の外観は北海道らしい「北のメルヘン」をイメージしたものとする」などの「富士橋大通り商店街 街づくりルール」に基づいて進められた。平成8年度から平成11年度までの4年間で小売業商店街近代化事業による個店の改築と街頭放送設備が設置された。また、平

成12年3月にふれあい緑地新設事業（らっぱ公園設置）が完了、同年4月からは幌別駅西口の駅前広場の整備などを行う「中央地区街区整備事業」が開始され、平成14年3月に完成した。

こうして平成2年から始まった幌別地区商店街近代化事業は完了し、アーニスを核に各店が展開するためのハード面での整備は完了し、ソフト事業の実施へと移行していった。

平成22年4月からは、毎月15日にアーニスを起点として3路線の買い物無料送迎バスの運行（同年12月まで）、平成26年の「登別まちゼミ」、平成27年1月からの「街バル」（ともに登別商工会議所主催）などの取組が行われた。

この幌別地区商店街近代化事業の実施と歩調をあわせるように、中央町地区での医療環境も向上していった。平成10年に主に人工透析治療を行う日鋼記念病院登別サテライトクリニックが開設された。1回につき数時間を要する人工透析治療を受ける患者にとつて、身近な幌別駅前で受けられる環境が整ったことは歓迎された。そして、同クリニックでは4年後の平成14年10月15日に小児科外来を開設した。平成12年に深瀬医院が開院して以降、本市内には小児科が恵愛病院（鶯別町）にしかなく、室蘭方面への通院を余儀なくされてきた子育て世代にとって朗報であった。そして、平成16年1月にリハビリテーション科と病棟（120床）を新設した際に「登別記念病院」と改称した。

平成18年10月16日に幌別駅前の旅館であった建物を改装して、「ほろべつ屋台村」が開業した。屋台村は、平成13年に帯広市にできた「北の屋台」が成功を収めたことから、まちづくり活動又は中心市街地活性化の有効な手段とされ、この頃の北海道内に多く開業された。「ほろべつ



屋台村」は、入りやすい雰囲気と、1つの店舗だけではなく、屋台村内の他の店舗からも料理を取り寄せることが可能なことから、幅広い世代に受け入れられた。

平成20年11月、中央地区で行われた地区懇談会の席上で、参加者から「中央町2丁目5番地にある市有地を買物、あるいは、まちづくり、商店会のイベントができるよう整備してほしい」との意見が出され、翌12月には登別商工会議所からも「市が所有する登別市中央町2丁目5番地1〜7への買物駐車場の整備」が要望された。この土地は元々道路用地として本市が所有していたが、この頃は道路としては利用されておらず、当面の利用予定もなかった。そのため、買い物のために中央地区に来た市民等が徒歩で商店街を周遊するために、買物駐車場を整備することとした。平成21年度に入り、登別商工会議所、登別中央飲食店組合及び市の3者間で駐車場整備と、その後の管理方法について協議が重ねられ、普通財産として商工会議所との間に無償貸借契約を締結することなどが決定した。平成21年12月に開始した整備工事が、平成22年3月に竣工したことを受けて、同月26日に登別商工会議所との間で無償貸借契約を締結した。この買物駐車場では、その後、平成22年から25年までの間、登別中央飲食店組合が主催して「寄酔祭」が開催された。

### 常盤町

多くの一般住宅が立ち並ぶ常盤町は、歴史は古いものの街としての進展は比較的新しく、戦後になって多くの方がマイホームを建てて開けた街である。この地区はもともと、来馬町の一部で、高台を「緑ヶ丘」、平たん部を「登喜和」と呼び習わしてきた。昭和49（1974）年4月の町名改正で両地区を合わせて「常盤町」と

いう町名が提案されて、大きな反対がなく決定した。「町の平和と発展が永久に変わらないこと」を願ったことであった。

常盤町の地に初めて入植してきたのは、明治15（1882）年から16年にかけての宮武清治、吉岡嘉市らである。しかし、湿地帯であることから開発は遅々として進まず、点在する入植者によって長く農業が営まれ、畑作、酪農等が行われていた。畑作では、幌別大根やトウモロコシが取れ、酪農では乳牛が主力であったようである。昭和40（1965）年頃まで、幌別町の浜にあがる魚や貝、海藻などと、畑から収穫されたものが馬車で行き来をして物々交換されていたという。

明治21（1888）年に来馬川とボンライバ川が合流する地点に「さけふ化場」が設けられ、翌22年には来馬川を遡上するサケ資源を保護するとの名目から、サケ漁が禁止となった。

町並みが大きく変わりはじめたのは昭和20（1945）年の終戦以降で、昭和26年に自衛隊官舎、昭和37年には市営住宅「緑ヶ丘団地」2棟が建設された。同団地は、平成元（1989）年から平成5年までの間に5棟建設（2LDK、3LDK合計96戸）された。昭和53（1978）年には日本電信電話公社（のちのNTT）登別電報電話局が建設され、多いときには20名を超える職員が常駐していたが、技術の進展とともに無人化されていった。

住宅も昭和40年代から登喜和地区から増えはじめていった中央町であるが、常盤町との境目に近い地区に登別青少年会館（昭和44年）、市立図書館（昭和47年）が開館した。昭和51年には市立図書館向いに「ホームストア中央店」が開店すると、日常生活の利便性が大きく向上したこともあり、住宅の増加に拍車がかかった。平成9（1997）年頃まで

には常盤町4丁目の高台であった地区も高台が削られて平地となり、住宅地として分譲されて、平成15年頃には現在の街並みとなっていた。

常盤町の中心部を走る東通りは、住宅が多くなかった時期にできた道路であったこともあり、車道は狭く、歩道もほとんど整備されていなかった。そのため、町内会からは拡幅要望が出されていたが、整備には多額の財源が必要なことから長年の懸案事項となっていた。

しかし、念願が遂に叶い、道道として認定されることとなり、幅員16m道路への拡幅を目指し、平成27年から用地買収などが始まったこの道路は、小中学校への通学路でもある。子ども達が1日も早く安心して通行できる道路整備の完成が待たれているところである。

## 千歳町

岡志別川のほとりを千歳町と呼ぶようになったのは、昭和9（1934）年の字界地番改正以降である。世の中の長久を祈るおめでたい言葉として地名が選ばれた。千歳町は本市内でも古くから開けていたところである。

千歳町は、岡志別運動公園付近から、道道上登別室蘭線が道道自動車道と交差する付近までの間に多数の遺跡がある。また、岡志別川の本流や支流には、アイヌ民族が払い下げを願い出た土地があった。その名残りとして、本市内では数少ないアイヌ民族の名前が建立者として刻まれた馬頭観世音の石像が千歳町にある。そして、明治40（1907）年頃には、知里幸恵が祖母・モナシノウクとともに住み、ユカラなどを学んだ場所がある。さらには、登別温泉の開発に尽力する滝本金蔵も、当初は字オカシベツに入植したと伝わる。

和人による千歳町の開拓がはじまったのは、明治14年から16年にか

てのことで、香川県から山木馬太郎、池内二太郎らが入植した。また、但馬国豊岡藩（現兵庫県豊岡市）家老で尊王論者であった木下弥八郎は、明治15年にニナルカ台地付近に入植した。しかし、開拓は思うようにならず、室蘭市に移転した。彼の息子成太郎は道議会議員、衆議院議員となり、妹の濱は、滝本金蔵の息子金之助の妻となった。ちなみに第一滝本館を栗林五朔に譲渡したのは、彼が道議会議員として栗林五朔と親交を温めていた縁によるものという。

明治42年、大阪の徳田弥七が事務所を設置し、前田安次郎を管理人とし香川県より若者20名を連れて、現在の千歳町6丁目の開墾を開始した。当時としては珍しい農機具をアメリカから購入し、大豆や小豆、トウモロコシ、馬鈴薯などを生産し、小樽や本州に出荷していたようである。また、ドービー建設工業（株）に面した千歳町3丁目あたりの「ニナルカ」と呼ばれる高台では、来馬鉦山（砂鉄）が稼働していた。

日中戦争勃発後、千歳町は工業地域へと変貌し、昭和18（1943）年に日鋼炉材工場が操業（昭和20年閉鎖）を始め、国鉄からの引き込み線が走っていた。炉材工場が閉鎖されたのちは、しばらくそのままであったが、戦後に北海道が道内での化学工業の増強に向けて曹達工場の誘致を進めることとなった際には、炉材工場の建物が残っていることや、国鉄からの引き込み線があり、製品等の輸送に便利であることから、本市千歳町が曹達工場の進出地として決定された。そして、進出してきた北海道曹達（株）幌別事業所は、昭和26年に操業を開始した。同工場では、苛性ソーダなどの化学薬品を製造し、本市の産業をリードする主力企業となっていた。初代社長の山田秀三は、戦前から官僚として活躍しており、戦後、曹達工場の経営に手腕を発揮するとともに、文化面でも

大きな功績を残した。彼は、仙台鉾山監督局長時代からアイヌ語地名に興味を持ち、言語学者の金田一京助の指導を受けていたが、北海道曹達(株)の社長就任と北海道への赴任が決定すると、金田一から知里真志保を紹介された。そして、肝胆相照らす仲となった両者は協力して北海道内各所のアイヌ語地名の研究を進め、本市については、『幌別町のアイヌ語地名』にまとめた。同著は、知里真志保の父・知里高吉からの聞き取り調査のほか、板久孫吉など、本市在住のアイヌ民族の古老からの聞き取りが行われた。昭和35年8月には、北海道曹達(株)社員の独身寮「白樺寮」で板久孫吉からの聞き取り調査が行われたが、その音声データは北海道立アイヌ民族文化研究センターに所蔵されており、調査が行われた白樺寮は、当時の面影をとどめて現存する。工場に隣接する同社の敷地内には社宅街が形成された。この社宅街は、昭和56年頃に同社の経営再建が図られた際に取り壊しとなり、その後は長くグラウンドとして使用されてきたが、平成26(2014)年2月に同社が太陽光発電としてソーラーパネルを建設した。また、現在の千歳町4丁目の社有地も昭和55(1980)年から56年にかけて北海道勤労者住宅協同組合に売却した。同組合が、その後に住宅地として分譲したことから、通称「コープタウン」と呼ばれるようになった。昭和57年には、札内町に開校した日本工学院北海道専門学校の新寮「千歳寮」が完成した。

昭和50年代は雨の多い年が多く、昭和55年から58年にかけて、幾度となく岡志別川やサト岡志別川が氾濫し、ウグイス団地(千歳町6丁目)などで多くの住家が床上浸水した。特に昭和58年の大災害は、千歳町だけではなく、幌別町や中央町までもが浸水し大きな被害を引き起こした。この時の甚大な被害を踏まえ、岡志別川は幌別東団地横から太平洋へ流

れる河口を広げる大規模な改修工事と、岡志別川の支流であったサトオカシベツ川を直接海へ流すため、新栄町の奥からクリンクルセンター横に新たな河川をつくるという大事業が実施された。こうした整備が終了してから、両河川が氾濫する災害は発生していない。

若々しかったまちも次第に高齢者の多くなった町並みへと変貌しつつある平成16(2004)年、「岡志別の森運動公園」がオープンした。公園内には野球場やテニスコート、パークゴルフ場などが整備され、晴天の日には、多くの市民がパークゴルフやテニス、ランニングなどに興じている。秋には同公園と隣接する「市民プールらくあ」を会場として、市民スポーツ大会が開かれ、子ども達から高齢者まで多くの人々が、ソフトボールやパークゴルフ、テニス、マラソンなどに参加して楽しんでいる。そうした優れた環境を福祉の面からも充足するかのようになり、平成30年4月1日には「特別養護老人ホームニナルカの里」(千寿会三愛病院)がオープンした。

### 新栄町

新栄町は、鉄道と倶多楽火山の火山堆積物が形成する高台との間にある牧草地で、東部を富浦町に、西部は千歳町に接している。町内には、サトオカシベツ川が流れ、その東側が牧草地、西側が準工業地区となっている。

この地区には、崖沿いに栗、柏、ならなどの大木が生い茂っており、北海道炭礦鉄道(株)が線路の敷設工事を行った際には、線路の枕木材などとして切り出された。

幸町、新栄町とも開拓の歴史をたどると、この土地に居住した者がはつきりするのには明治期に入ってからである。明治14(1881)年に藤沢

禎次郎（静岡県出身）や橋本一狼（兵庫県出身）が移住し、翌15年には愛媛県出身者約20戸が移住した。彼らは、富浦町までの土地についてそれぞれが払い下げを受けて、開墾にあたった。オカシベツ方面には、山下茂市、山木ツイ、大西禎三、大西弥三治、脇官治、田中忠太郎、浜田菊治などの名前が見受けられる。

新栄町から富浦町にかけては、俱多楽火山の火山堆積物による崖が形成され、大小様々な沢が形作られた。これらの沢や、崖と線路の間の牧草地には、多種多様な鳥類をはじめとする動物がいたことから、『幌別町のアイヌ語地名』には、エゾタヌキ（ムジナと呼ばれていた）が入る沢という意味の「モユクンナイ」やモヤウシナイ（草を刈りつけている沢）などと、アイヌ語地名が付されていた。

現在、国道から山側に入り、足利通り踏切を渡って突きあたると、その角に馬頭観世音の石碑が1基ある。これは法華寺（中央町）付近の家で祭られていたが、同家が離農した際に現在の場所付近に住む足利家で引き取って祭っているという。足利家に引き継がれた当初は、現在の位置よりも数メートル高い位置にあつたが、崖崩れなどもあつたことから、現在の場所に移設した。そこから崖に沿って東に約1<sup>キロメートル</sup>ほど行くと1つの沢がある。その沢の前には、かつて高さが約4<sup>メートル</sup>ほどある岩があり、その岩は、触れると正気を失うとの言い伝えがあつたが、現在は残っていない。

新栄町は、長く自然をとどめて風景を変えることがなかつたが、昭和45（1970）年に「都市計画法」による用途地域が準工業地域となつた。そして、昭和54年には工業地域の指定を受けた。現在、製造業、建設業、サービス業などの事務所又は工場などが集積しており、登別ブラ

ンド推奨品を製造する（株）望月製麺所や、平成12（2000）年のイベントで多くの未来への手紙を受け取ったFRP加工の「鬼の卵」を作った興和工業（株）などがある。

#### 参考文献

- ・登別町『登別町史』昭和42年
- ・登別市『市史ふるさと登別』昭和60年
- ・登別町議会『登別町議会議事録』各年
- ・知里真志補・山田秀三『幌別町のアイヌ語地名』平成16年復刻
- ・北海道曹達（株）『創（探）業50周年を迎えて』平成13年
- ・北海道新聞社『北海道新聞』各号
- ・室蘭民報社『室蘭民報』各号

## 4 富士地区（富士町・柏木町・新川町・片倉町）

### 地理

富士地区は、本市のほぼ中心部に位置し、胆振幌別川と来馬川に囲まれた地区である。昭和9（1934）年の字界地番改正がなされた際に「来馬町」と名付けられ、昭和49年4月から、来馬町の東南部分分割されて富士町、柏木町、新川町、片倉町となった。

安政7（1860）年3月に、ホロベツ場所の南部藩への引継書類『ホロベツ引渡諸書付』には「ホロベツ絵図」には富士地区の場所に「谷地」とのみ書かれている。実際、地理院地図の陰影起伏図を見ると、かつて胆振幌別川が蛇行して流れていた頃の痕跡をみることで、かつてか

ら、湿潤な土地であったのであろう。そして、新川町にある日本製鉄(株)ポンプ場の敷地も、蛇行する胆振幌別川を避けるようにして立地している。

片倉町から富士町7丁目にかけての高台は、倶多楽火山の火山堆積物によって形成された台地とされている。少し離れた場所から見ると、来馬町、千歳町の高台とほぼ同じ高さの高台であることがわかる。

**富士町** 富士町の「富士」とは、現日本製鉄(株)の旧名「富士製鉄(株)」に由来する。

昭和11(1936)年、日本製鉄(株)輪西製鉄所は第3次設備拡張工事を行い、これによって増加した従業員の住居を確保するため、各所に社宅を建設した。昭和15年、日本製鉄(株)は、従業員が居住する社宅街を幌別郡内にも建設することとした。用地は幌別村々有地の払い下げを受けることとし、同年5月の村会議で33<sup>ヘクタール</sup>売却の議決を受けた後、ただちに着工し、この年は22戸を建設した。17年、18年の2年も建設を進めた結果、かつては林や耕作地が広がっていた土地に合計1千410戸の社宅街が出現した。この社宅の出現によって、本市のまちな中心が、それまでの鉄南地区から線路の山側に位置する鉄北地区に移り、昭和36年に町役場を建て替える際に、鉄南地区から現在地に移転する理由の1つとなった。

社宅街は、中央を幌別駅と鉾山町を結ぶ軽便鉄道が通過し、南端は同じく幌別駅から胆振幌別川に向かう砂利採取線の線路が通っていた。社宅街は、南区(現富士町4丁目で嶋津歯科の向いから道道上登別室蘭線まで)、東区(現富士町5丁目で村上薬局から富士1号公園園手前まで)、

西区(現富士町6丁目で早川歯科から旧セブンイレブン手前まで)、北区(現富士町7丁目で富士会館から市民会館まで)の4区に分かれていた。各区には風呂があったほか、南区には、「伍長社宅」と呼ばれる役員付き社員向けの社宅があった。一般社員の社宅は、1棟4戸入居の建物であったが、伍長社宅は1棟2戸入居であったという。この4区対抗の運動会なども開催していた。日本製鉄(株)の守り神として創建された輪西神社の例大祭では、昭和40年代まで幌別の社宅街も神輿渡御の経路とされた。四軒長屋での共同生活は、4棟の長屋の真ん中に井戸があり、井戸から水をくみ出すときには鍵を使って蛇口を開け、使用することとされていた。水くみ作業は、子ども達の重要なお手伝いの1つであった。汲んできた水は、自宅内に置かれた大きなかめに移されて、生活用水などに使用された。食品や日用品は、昭和16年12月に社宅1棟(市街地より社宅街入口付近)を店舗に改造して、日本製鉄(株)配給所の幌別仮営業所が開設され、17年12月には戸数が大幅に増えたため、市老人



社章の入った境界杭(富士町)

福祉センターが建つ場所に「幌別配給所」が新設された。配給所では、「給料控除方式」(給料日に精算する方式)による販売を行っていた。終戦後間もない昭和20年9月には現金販売の

みとなったが、22年6月から「予納金制度」が導入されて、従業員があらかじめ配給所に納めた現金の範囲内で、主食その他を購入するようになった。昭和45年3月に（株）ホームストアが経営を引き継ぐまでは、室蘭製鉄所の直営であった。

昭和17年には、社宅街の消防施設として防火水槽21基、消火栓25基、トヨタ消防ポンプ自動車1台、手挽ガンリンポンプ1台を配置し、社員9人による私設消防団が組織され、詰所は現在のホームストア幌別店の建つ場所（富士町6-38-1）に設けられた。

アジア・太平洋戦争の末期、社宅街もアメリカ軍機による機銃掃射があつたとの証言が複数の方から聞かれた。戦後、GHQ指令の一環で町内会が解散させられ、村内各所に役場の支所や出張所が配置された。社宅街にも「来馬支所」が設置されたが、支所で執務を行うのは役場の職員ではなく、会社から指名された社員が幌別村から委嘱を受けて支所業務を行っていたという。また、来馬支所は、富士町の社宅街のほかに、鶯別地区にあつた日鉄炉材工場の社宅街も担当していた。

昭和25年に朝鮮戦争が勃発すると、戦争に伴う「特需」があり、戦後間もない時期で低迷していた我が国の産業の業績が一気に好転するきっかけとなった。社宅街と幌別駅との間は、出勤または帰宅する社員同士で賑わい、肩がぶつかり合うほどの混雑ぶりであつたという。

戦後、引揚者が現在の富士橋付近に店舗を構えはじめ、商店会が発足した。店舗の中心的存在として「曙市場」という大きな店舗ができたこともあって、商店会の名称は「曙商店会」となった。曙商店会の区域には、昭和44年には飲食店、食料品店、菓子店など60軒を超えるお店が立ち並ぶようになった。また、道路も富士町4丁目の交差点から富士町

7丁目の交差点まで、社宅街を通る道路は、「車道」と「人道」の2つに区分されていた。

昭和26年12月に劇場併設の「幌別会館（来馬集会所）」が建てられた。同会館は、社宅街の人々が映画を見たり結婚式を挙げたり、様々なイベント会場として利用した。幌別会館は、昭和45年10月に現状の土地、備品とともに市に委譲され、昭和33年にそれまで東西南北のそれぞれに設立されていた自治会を統合して発足した自治会組織「新和会」の活動拠点となつて利用された。そして昭和60年には老朽化が著しくなつたことから建て直されて「富士会館」となり、会館の横には当時の流行だったゲートボール場2面も整備された。

昭和28年4月、幌別町で初の町営「富士保育所」が開設された。

昭和38年11月、社宅街に設置した児童集会所の落成会が行われた。この児童集会所は、その後の児童数の増加を受けて、昭和41年に増築を行った。

昭和43年11月、富士製鉄（株）（昭和25年4月に始まった財閥解体によつて日本製鉄（株）が解体されて発足した）は、社員や協力会社の社員に5か年計画で社宅街の土地2戸分を1世帯分として分譲することを提示した。同社は、昭和45年に「新日本製鉄（株）」と改称するが、社宅街としての最後は富



消防団来馬分団火の見櫓からの眺め

士製鉄（株）の時期だったこともあり、同地区の社宅街は「富士鉄社宅街」と呼び続けられるようになった。

かつて、老人福祉センターが建つ土地・建物は（株）ホームストア所有で、ホームストア幌別店が建つ土地・建物は本市所有で、消防団来馬分団の火の見櫓があった。（株）ホームストアは、店舗が老朽化していたため改築を検討しており、本市も職員が増加し、手狭となった市役所本庁舎の増築を検討していた。そこで両者が協議して、昭和47年5月、土地・建物について等価交換を行った。（株）ホームストアは同年11月に現在地（富士町6丁目38番地1）に幌別店をオープンさせ、本市も昭和48年7月から49年2月までの市役所増築工事を行う間、交換によって入手した旧店舗建物（富士町7丁目11番地1）を仮庁舎とした。仮庁舎に使用した土地には、昭和55年に老人福祉センターを建設した。

昭和51年4月、本市初の市立「富士幼稚園」が開設し、多くの園児が通園したが、平成17（2005）年3月に惜しまれつつ閉園した。閉園後の建物には、平成22年に社会福祉法人恵正会が革製品の製造などを行う通所授産施設「すずかけ」を開設し、NPO法人革工房瑞樹とすずかけ作業所の運営を引き継いで運営している。

また、北区に相当する部分は、土地が他の3区よりも若干低かったことなどから、社員からの分譲希望がなかったこともあり、本市に譲渡された。本市は、この土地に職員住宅を建設していたが、昭和58（1983）年に「市民文化とコミュニティー活動の拠点」とするべく、登別市民会館（以下「市民会館」）を建設した。完成した市民会館には、市教育委員会が中央公民館（現市役所第2庁舎）から移転した。

市民会館は、その後は本市が主催する様々な式典の会場となったほか、

文化的な催事などでも活用され、毎年11月には文化の日に合わせて市民文化祭の主会場となっている。

このように日本製鉄（株）の社宅街として出発した富士町は、分譲によって社宅街から個人の持ち家が並ぶ地区へと移り変わったが、その購入者が同社社員であることが多かったため、現在も富士製鉄（株）あるいは、その後継の新日本製鉄（株）や日本製鉄（株）の現役社員や退職者が多く住む地区となっている。

昭和60年代後半の高炉休止と、社員の大幅な配置転換の計画が発表された際には、配置転換によって本市の人口が大幅に減少することを懸念する声が上がリ、62年1月に行われた高炉存続要請の署名活動には、活動開始後6日間で約3万3千筆（当時の本市の人口は約5万8千人）の署名が集まった。また、室蘭市で開催された「新日鉄室蘭製鉄所高炉存続要請市民決起集会」にも、多数の本市民が参加したという。

平成11（1999）年10月、拡幅のための架け替えが完成した富士橋では、開通記念式典が行われた。このときに富士橋から富士町7丁目交差点付近までの店舗で構成される「富士橋大通り商店街振興組合」も、「らっぱ通り商店街振興組合」に改称した。翌12年8月、「のぼりべつ豊水まつり」の会場がJR幌別駅前広場から、らっぱ公園と富士橋通りに会場を移して開催されるようになった。車道を通り止めにして行われる「豊水トントン」には、企業ごとのチームのほかに町内会など多数の市民が参加して、大盛況の祭りであったが、祭りを運営する商店主の高齢化などによって、平成24年をもって終了した。

この間、平成12年4月には、中央子育て支援センターが開設され、同センターで行われる子育て支援の取組は、子育て中の親子にとって大変

心強いものとなっている。

現在の富士町は、富士鉄社宅の建物が一部に残っているものの、大部分は建て替えられ、かつては朝昼晩とラッパが吹鳴された社宅街は、閑静な住宅街へと生まれ変わった。

## 柏木町

柏木町は、来馬川、ボンライバ川の西側に位置しており、昭和9（1934）年の字界地番改正以前は、オビラカシなどの地名も柏木町内に含まれていた。

明治期までの柏木町は、「ミズナラ」、「シナ」、「セン」、「カツラ」など、高さ25<sup>尺</sup>以上の大木が生い茂り、熊や野生の馬などの獣、ブヨ、蚊などの害虫という自然の脅威にさらされ、開墾の容易な土地ではなかったという。この大木の名残りを残すのが、市道望洋路線沿いに立つトチノキの大木である。この木は、環境省公開の「巨樹・巨木林データベース」に搭載され、紹介されている。

このように大木が生い茂る柏木町が脚光を浴びたのは、北海道炭礦鉄道（株）室蘭線の敷設工事が始まったことによつてであった。同工事では線路の枕木として多量の木材が必要となり、柏木町の大木も大量に伐採されて運び出され、鉄道の敷設工事が終わった後しばらくも、林業が盛んに行われた。

柏木町1丁目や4丁目では、早くから農業が行われ、大豆、小豆、とうきび、そばなどが育てられていた。また、明治13（1880）年頃には大根の作付けが行われていたが、明治28年に幌別町で商店を営んでいた赤根茂助が大根を大量に生産し、室蘭方面に馬車で積み出して販売した。すると、他の作物よりも面積当たりの収入が多かったことから、

柏木町を含む字来馬では大根栽培が盛んに行われるようになった。この大根は、「幌別大根」の呼称で、室蘭や輪西には馬車で、札幌や旭川方面には鉄道で運ばれて販売されたため有名になった。

一方、漁業に目を転じると、明治21年11月に来馬川とボンライバ川とが合流する付近に「さけふ化場」が設けられ、22年からはサケ資源保護の名目のもと、来馬川でのサケ漁は全面禁止となった。

柏木町内会の設立50周年記念誌『50年のあゆみ』では、来馬川を挟んで柏木町側を「西来馬」、常盤町側を「東来馬」と呼び、両地区には「西来馬農事実行組合」と「東来馬農事実行組合」が結成されていたという。およそ50戸の人々によつて、現在につながる町内会活動を始めたのは昭和38（1963）年のことで、「西来馬町内会」と命名された。当時の町内会活動は、主として街路灯の設置であったという。町内会活動の拠点となる集会所もないことから、「大英寺」で総会などが行われていた。柏木町が現在のイメージに近づく住宅街へと街並みを変えていったのは、昭和40年代の高度経済成長期におけるマイホームブームで、中心市街地からのアクセスに恵まれた柏木町は人気が高く、次第に人口を増やしていった。町内会が記録している会員数の変化を見ても、昭和47年度に200戸を超え、昭和54年度に302戸、昭和60年度には520戸、それから戸数は順調に伸び、平成30（2018）年度には650戸の大所帯となっている。

柏木町には、昭和50（1975）年に「老人憩の家柏木の家」が建ち、昭和52年からは公営住宅「柏木団地」が建設された。昭和54年には「柏木婦人研修の家」、「老人憩の家こぶしの家」を建設。昭和58年には柏木町4丁目に市営住宅「柏葉団地」を建設した。また、昭和57年には柏木



町3丁目、平成6（1994）年には柏木町4丁目を民間事業者が宅地造成して、住宅街が形成されていった。このように柏木町の人口が増加し、交通量も増加していったことから、道道上登別室蘭線（昭和48年に道道昇格）の拡幅が計画された。平成21年度には両側に歩道が設けられ、拡幅が完了した。

### 新川町

明治42（1909）年頃から大正6（1917）年までの間に、胆振幌別川の流路が河口付近で大幅に直線化され、それに伴って来馬川の合流地点は現中央橋付近から現在の場所に移った。胆振幌別川の流路は元々、来福橋の辺りから現道道上登別室蘭線に沿う形で方向を変え、ときめき橋付近から現在の河口方向にヘアピンカーブのように流れの向きを変えており、来馬川は中央橋付近で胆振幌別川に合流していた。ヘアピンの頂点となるときめき橋付近では、胆振幌別川の水流の激しさから、現ときめき橋付近の駅通の土地が浸食されるため、明治12（1879）年頃から土地の浸食を防止するための護岸工事などが行われてきたが、下流部分では速やかに海へ川の水が抜けていくように短絡された。

昭和14（1939）年11月、日本製鉄（株）は同社室蘭製鉄所で大量に使用する水を確保するため、現在の新川町3丁目にポンプ場を建設した。同場では、胆振幌別川と来馬川を水源に水を確保し、室蘭製鉄所に送っていた。胆振幌別川の水は、上流部で硫黄の精錬などを行っていたことから、水にも製鉄には不適な硫黄分が含まれていることを懸念して機械の冷却用とし、来馬川を水源とする水を鉄の冷却用とした。同ポンプ場が建設された当時は、まだ胆振幌別川が蛇行しており、現在の新川

公園には、大きな三日月湖があったことから、それらを避ける形で建設された。このポンプ場の向かいには、日本製鉄（株）の社員寮が2棟建設されていた。1棟は「香風寮」と名付けられ、のちの香風町内会の名の由来となった。この2棟の寮は、戦時中、室蘭製鉄所の勤労学徒として動員された学生たちが一時期寄宿した。

昭和36年10月6日、富士製鉄（株）（昭和25年に日本製鉄（株）が解体されて発足）で使用する大量の水を供給してきた胆振幌別川が、上流部での集中豪雨などによって氾濫し、死亡者がでるほどの大災害となった。災害の起こりにくい河川とするために直線化が行われ、それまで大きく蛇行していた富士製鉄（株）ポンプ場附近には、新たな流路を挟んで新川町・桜木町、それぞれに大きな三日月湖ができることとなった。この新川町側にできた三日月湖は、近隣に住む平氏が河川管理者の北海道から借り受けて、夏はボートを浮かべ、冬はスケートリンクとして開放した。「平の沼」と呼び習わされたこの三日月湖で遊んだ記憶を持つ市民は多い。「平の沼」は、昭和56年夏に前年の集中豪雨に伴う土砂崩れで発生した土砂を用いて埋め立てが行われ、平成元（1989）年に都市公園「新川公園」として供用が開始された。また、直線化された胆振幌別川の新川公園よりも約200m下流側の河川敷には、平成3年に室蘭土木現業所が親水護岸「ハクチョウふれあい広場 幌別川白鳥テラス」として整備した。元来、四季を通じて渡り鳥などが多く憩う胆振幌別川の中であつたが、散歩途中の市民などが白鳥テラスからハクチョウなどにパンの耳などのエサを与えたため、以後はハクチョウやカモをはじめ、多くの野鳥が羽を休めるようになり、それらの野鳥を観察するため、親子連れなどが訪れる場所となっている。

## 片倉町

市民会館と胆振幌別川を結ぶ線の上流側に位置する片倉町には、令和2（2020）年現在、本市内で唯一のチャシ跡が室蘭工業用水池のほとりにある。アイヌ文化期のものとされ、このチャシ跡の周りには片倉遺跡（縄文中期）があり、高速道路を挟んで海側には来馬遺跡（縄文中期）がある。

昭和49（1974）年、この地区は「片倉町」と名付けられた。その由来は、明治期に幌別村の開墾に精を出すとともに、白石から移住してきた片倉旧家臣団の精神的な支柱であった片倉景光の屋敷が、片倉町1丁目にあつたことに由来する。

片倉町は現在、室蘭工業用水池に沈んだかつての奥川上地区と同様に畑が広がる土地であった。その名残りは、片倉町2丁目を走る道央自動車道の高架下に、農作業に従事した馬を慰霊する馬頭観世音の石碑と、地域の発展を願って建立される社日柱にとどめている。そして、大きく蛇行する胆振幌別川に対しては護岸がなされておらず、自然河川の様相であった。そのような状況の中で、昭和36年10月6日に胆振幌別川の上流部分で発生した集中豪雨によって同河川が氾濫し、片倉町に濁流が流れ込んだ。この濁流によって、胆振幌別川沿いに住居を構えていた家族が流されて、幼い子ども達の命が失われる災害が発生した。この災害は、令和2（2020）年現在において記録が残る本市が見舞われた災害の中では最も多い人命が失われたものとなった。地域住民では、失われた子ども達の霊を慰めるため、災害発生から百か日にあたる昭和37（1962）年1月13日に、子ども達が生活していた住居からほど近い片倉町4丁目に親子地蔵を建立した。

災害後の片倉町は、多くの住宅が建ち並ぶ住宅街へと変貌していった。

この変遷を国土地理院が公開する空中写真を基に見ていくと、災害から2年の昭和38年頃に片倉町3丁目の新川町よりの地区から、住宅の建設が始まった。特にこの地域には、戦後の緊急開拓事業で西来馬地区（蔭の沢）で開拓に尽力した家族が離農後に転居してきた土地でもあった。昭和42年から49年までの間に、現在と同様の住宅地が広がることとなった。昭和42年の幌別ダム建設に先立って、同ダムよりも下流部分の蛇行が緩和されて、護岸も整備されたことが住宅建築を後押ししたものと考えられる。

住宅街として発展しつつある片倉町ではあるが、その一方で幌別西小学校、西陵中学校、北海道登別明日中等教育学校が立地する文教地区としての側面を有している。

昭和38年に町立高として開校し、昭和40年に道立高となった登別高等学校は、平成17（2005）年に登別南高等学校と統合し、新たに登別青嶺高等学校として青葉町（旧登別南高等学校跡地）で開校した。そして登別高等学校の跡地には、平成19年4月に北海道初の中高一貫教育の「北海道登別明日中等教育学校」が木を基調とした建物で開校した。中学校、高校の中等教育6年間の一貫教育を生かし、国際理解教育と外国語教育を特色とし、「グローバルリーダー」の育成をめざす個性豊かな学校として注目を浴びている。

片倉町はそうした文教地域であるが故に、本市で唯一通学区域を巡って大きな事件を起こした地域でもあった。事件の発端は、昭和30（1955）年1月21日午後9時10分頃、幌別小学校正面玄関から出火した火事で、約3千平方メートルの木造校舎が40分ほどで一気に焼き尽くされ、夜空を紅蓮に染める火事は、近隣の人々に大きな恐怖を植え付けたとい

われている。

学び舎を失くした児童（1千460名）は幌別西小学校に14学級、幌別中学校に14学級が別れて通学し、2部授業を開始した。

窮迫する町財政での応急復旧には限界があることから、当時の文部省へ建て替えについては木造ではなく、コンクリート造り耐火建築とし、これを起債（借金）によって行うことを強く要請した。その結果、起債額も1千万円が上積みとなる5千400万円となり、10月に簡易耐火造り（赤レンガ）で工事が完成。11月3日に喜びの落成式が執り行われた（この後、平成4（1992）年に大規模な改築工事が行われるまで、この校舎は多くの児童を送り出していった）。また、幌別小学校の大火事は、この年就任した岩倉町政の重要課題と位置付けられ、児童をいつまでも木造作りの学校に通わせることは出来ないと、昭和32（1957）年に登別温泉小学校、翌33年は鶯別小学校の校舎をレンガ造りへと建て替えることとなった。

一方、新築とはいえ、26学級ギリギリの面積で建築された幌別小学校は、31年の新学期早々から教室が不足する事態となった。そのため、富士鉄社宅東地区の一部を幌別西小学校に通学区域を変更すると父兄に到達したところ、父兄諸氏から一戸当たり800円の復旧基金をとつていたこともあり、約束破りだとの怒りを買った。また、町教委の提案に南地区の一部も幌別西小学校区域に含まれたことから、該当する父兄から通学区域の変更に対する不満が噴出して紛糾し、両者とも一歩も引かぬ姿勢を示した。

その後、この問題は9か月にわたって対立を続けたが、「幌別西小学校を8学級分増築し、幌別小学校と規模の均衡を図る」という町教委側

の提案を南地区の父兄が受け入れたことから、東地区の父兄も軟化して決着を見た。

しかし、通学区域に関する問題は昭和40年に再度起こり、ここでは児童の入学式拒否という大きな事態まで呼び起こすこととなつてしまった。この起こりは、人口増で児童数の増減が激しい幌別・幌別西小学校の学級数を調整するため、来馬川を境に通学区域を変更するという町教委の発表に端を発していた。

反対の急先鋒となつた父兄は、わずか数分で幌別小学校に通える距離でありながら、幌別西小学校に学校替えとなる富士鉄社宅入り口付近の関係父兄で、兄弟で通学する小学校が異なることや、通学の負担が増すことなどを理由として、130戸の反対署名を町教委へ提出した。町教委は幾度となく説得に努めたが、その甲斐なく、4月1日の幌別西小学校の入学式に学校が変更になつた児童60名のうち、40余名が欠席をする事態となつてしまった。本市の教育行政はじまつて以来の異常事態であつた。こうした異常事態を憂いた当時の幌別西小学校校長・潮武敏の「親の良識と愛情」を説いた懸命の説得が続けられ、絶対反対の父母の気持ち解きほぐすことに成功し、急転直下、4月8日の授業から最後まで通学を拒んでいた19名の児童が小学校の門をくぐつたのであつた。改めて入学式を執り行い、幌別西小学校は、新入生の参加を心から歓迎した。その後、通学区域を巡る登校拒否などの問題は発生していない。

昭和56年9月に、片倉町6丁目に市郷土資料館が開設された。同資料館は、片倉家の居城であつた白石城（宮城県白石市）の建物をモデルに建設したもので、本市内から出土した石器や土器、幌別鉾山で使用された削岩機などを展示していた。



しんた21

平成6（1994）年1月6日、本市は、福祉と保健活動の拠点として市総合福祉センター「しんた21」を開設した。同センターでは、健康増進事業としてトレーニング機器が設置され、市民が汗を流したほか、高齢者や障害者を対象にしたデイサービス事業も行われた。同センター開設の同日、道南バス（株）がセンター前に「しんた21」バス停留所を設けたことで、それまで「登別高校前」停留所（現「明日中等前」停留所）までであったバス路線が同センター前まで延伸された。利用者の利便性が向上した。

## 参考文献

- ・登別町『登別町史』昭和42年
- ・登別市『市史ふるさと登別』昭和60年
- ・登別市『広報のほりべつ』各号
- ・柏木町内会『50年のあゆみ』平成24年
- ・『ホロベツ引渡諸書付』安政7年
- ・登別市議会『登別市議会議事録』
- ・北海道新聞社『北海道新聞』各号
- ・室蘭民報社『室蘭民報』各号

・富士製鉄（株）室蘭製鉄所『室蘭製鉄所五十年史』昭和33年

## 第2節 鷺別地区（鷺別町・栄町）

### 地理

鷺別地区は、本市の南側の海岸地帯に位置し、海岸線と鉄道の線路に囲まれた区域である。

第2種特別工業地区の指定を受けている鷺別町6丁目と栄町2丁目は、かつて砂鉄等の採取が盛んに行われて、その後、工場等の立地が進んだ場所である。

### 鷺別町

最も古い時代の鷺別をたどると、昭和36年に室蘭大谷高校の生徒によって、鷺別神社とその周辺から貝塚が掘り出され、およそ5千年前から紀元前600年頃までに使われた土器や人骨などの遺跡が発掘された。昔から食料は豊富だったようで、ハマグリ、アサリ、カキ、ウニ、ホタテ、ホッキなどの海産物、鹿、クマ、きつね、うさぎ、犬、カワウソ、アザラシ、イルカなどの骨も多数見つかり、鷺別には遙か昔から人が住んでいたことが明らかとなった。

「鷺別」という地名の由来について、郷土史研究家の宮武紳一は『広報のほりべつ昭和55年4月1日号』で、次の3つの説を紹介している。

- ・カバッチリ・ベツ（鷺のいる川）
- ・『北海道蝦夷地名解』（永田方正著）ではハシ・ベツ（柴川）を由来としている

・知里真志保は「ワシ・ベツ、鷺別川」は「チワシベツ＝波立 っ川」

の上略形と推測した。

宮武は3番目の説を定説とし、その根拠として鷺別川は水位の落差がほとんどなく、水量に関係なく潮が満ちてくると川の中まで波が入り込んで波立ち、鉄道の線路の下まで波立つ様子が見られることをあげている。

鷺別の歴史をたどっていくと、明治以前の記録も残されている。

安政2年、幕府の命令を受けた南部藩は恵山岬から幌別までの警備を担当することになり、藩士の新渡戸十次郎（新渡戸稲造の父）らを派遣して鷺別岬に警衛所勤番所を設けた。安政4年には武州大宮・氷川神社の祠官岩井帯刀がアイヌ民族を雇い、養蚕で鷺別を開墾しようとしたが失敗したとの記録も残っている。

明治期に入ってから記録を見ると、明治2年、南部出身の鎌谷岩吉が上鷺別に居住して炭焼きとして働いたという（明治6年頃室蘭へ移住した）。明治3年には片倉主従の一団5戸が移住してきており、4年も小片五郎兵衛門ほか10戸34人が移住してきた。

鷺別の開墾の主軸は農業であった。馬の放牧も行ったが1年ほどで幌別来馬に移した。明治7年、彼らは開墾の成功を目指して農社を結成、鷺別の浜に農社住宅と牛舎を建設し、プラウなどを使った西洋式農法を実施した。しかし、砂地が多く、大豆、小豆がわずかに収穫することができる程度であったという。一方、貝塚から多くの海産物の骨などが発見されていたとあり、漁業は盛んで、イワシ、スケトウタラ、メヌケ、川を遡上するサケなど、種類も豊富だった。地元の漁師である室三太郎はカジキマグロ獲りの名手で、北海道知事から表彰を受けるほどの腕前であったという。

片倉主従は、まち形成のリーダーとして活躍し、明治11年には札幌本道沿いに商店を開設して酒やたばこの販売を始めた。明治14年、北海道開拓の進展を見ようと鷺別を訪れた明治天皇の巡幸を記念し、小休止された鷺別6丁目15番地に地域の若者が木製の記念碑を建てた。この記念碑は、のちに石製の御駐蹕之碑となり、現在に至っている。

明治15年には幌別小学校の分校として榛沢蔵松宅の一部を校舎として鷺別小学校を開校し、初代校長には黒沢源一郎がなった。そして、明治20年代に入ると次第にまちとしての体裁が整っていき、明治23年に鷺別神社のふもとに戸長役場が置かれた。明治25年には鉄道が敷設され、空知方面から運ばれる石炭を出荷する室蘭港までの鉄路ができた。鷺別駅が現在の場所に建てられたのは、明治34年のことである。その当時の鷺別は、隣に室蘭港という良港があることから、鉄道、札幌本道とも、北海道の中心地である札幌につながる重要な輸送地区となっていた。

着実に町としての賑わいが広がりがつつあった鷺別の前浜に明治39年、大きな珍客が訪れた。この珍客は、ちょうど岬と同じような形をしたクジラで、近隣の人々は、その肉を売って得た代金を基に寄付を募り、岬の中腹に「鷺別神社」を建立した。そのときのクジラの骨の一部は、同社の社内地に祭られている（昭和49年に再建され、現在に至っている）。この頃の大きな問題として、鷺別川の取水問題があった。会社の進展とともに大量の水を必要とする（株）日本製鋼所は、明治41年に鷺別川の水に目をとめ、奥に取水施設を造った。ところが、このことが漁港に重大な障害を与えた。鷺別川の水量が減ったことから、川岸に船を着けることができなくなったのである。鷺別村は大正3年、（株）日本製鋼所から1千500円（1万5千円とも）の水利利用の契約金を受け取り、

大正11年には鶯別漁港整備費として7万円も受け取った。しかし、実際に港を完成させるためには12万円が必要ということで、郵便局に保管しておくこととなったが、漁業資金などに使われるうち、資金は行方不明となつてしまい、鶯別漁港は建設されなかった。

漁業と農業が主力産業であった鶯別の町が大きく変化しだしたのは、大正期から昭和期へと移り、軍需産業が活況を呈していた隣町室蘭市の影響によるところが大きい。

昭和12年、現在の室蘭中央卸売市場のところに九州の八幡市から黒崎窯業（株）煉瓦工場が進出し、工場に勤務する社員が下宿や間借りして人口を増やした。昭和14年には日鉄炉材工場の社宅が栄町1丁目に105戸建設され、鶯別地区は人口を大きく伸ばし、室蘭市の工場群で働く社員たちのベットタウンへと町並みを変えていった。

昭和20年、アジア・太平洋戦争の終結後、鶯別地区の浜には煮沸式の製塩業を始めようと10戸ほどバラックと、製塩のための釜が並び、昭和22年に鶯別漁港の整備工事が開始され、昭和25年には鶯別小学校も新校舎を竣工した。昭和27年から28年にかけては、河口部分から鉄道までの間を、その付近で砂鉄採取を行っていた六戸鉱業が河川改修を行い、改修後の土地の売却などをおこなった。

昭和30年には、精神・神経専門科を擁する「恵愛病院」が開院した。平成8年には、現在の建物（250床）に改築され、国道36号からひときわ大きな建物が目に入る。同病院を経営する友愛会は高齢者福祉の分野にも進出し、地域包括支援センター「けいあい」や、特別養護老人ホームを開設して本市の高齢者福祉の一翼を担っている。

昭和35年、先に誘致が決定していた「帝國酸素（株）」が栄町3丁目

で操業を開始した。昭和38年には、輪西にあった「富士工業（株）圧延工場」が栄町1丁目に移設して、大きな工場を建設し、工場横には従業員の家も建てられた。また、社宅隣には一足早く昭和35年に北海道労働金庫によつて勤労者住宅25戸が分譲され、さらにその隣接地には、昭和36年から同39年にかけて町営住宅42戸（現道営「であえーるはまなす団地」）が建設された。それらを含め、その地区は「はまなす団地」と呼ばれることになった。

町並みが次第に膨張すると昭和37年、明治初頭の開墾の頃からくすぶっていた鶯別と室蘭の境界をめぐる問題が再燃した。明治2年、片倉景範は白老との境界をフシコベツ川に置き、室蘭との境界については、鶯別川を境界としていたものの、室蘭郡を亘理伊達家と分割支配していたこともあり、白老郡との境界ほどしつかりとしたものではなかった。

このため、室蘭の泉隣太郎や添田竜吉を代表とする農民は幾度となく片倉氏や開拓使を訪れ、境界を整理して室蘭側の土地を増やさねば生活が成り立たないと訴えていた。明治34年2月1日の北海道告示で、鶯別川を境界としてようやく決着をみた。護岸がしつかりと整備されていなかった鶯別川は約60年の歳月の中で形状を変えたため、両郡の境界が明確にならなくなつていった。その間も住宅ブームなどで次々と住宅が建設されるにつれて、鶯別駅と鶯別川を結ぶ境界線上にある住家同士で、土地問題が起きるなどイザコザが起きたことから、両市で費用を折半して改めて測量を行うこととなった。昭和39年に測量した結果、境界線上に建つ2軒の家は室蘭市へ、他の13軒は登別町へ帰属することとなった。

境界周辺の住民58世帯127人は、これを機会に室蘭への編入を考えた。「室蘭市民権確保期成会」を結成し、境界線はあくまで鶯別川とするこ

と、登別町への納税拒否、選挙棄権、国勢調査非協力などを訴えて室蘭市への編入を目指す活動を行った。しかし、通学、道路排水溝の整備、国道までの歩道と横断歩道も整備するという当時の高田町長との協議を経て、円満解決となった。

昭和40年からは、鷺別川の鉄道より上流側の河川改修工事が始まり、蛇行していた川曲がりも改良されて、川幅も従来の2倍に拡張された。いつも増水を心配しなければならなかった上鷺別地区を水難から守ることができるようになった。昭和41年には、幹線道路である国道36号が交通量の増加とともに交通事故発生の危険が高まっていることから、住民総意の運動により駅前信号機が設けられ、相前後して4車線に舗装拡幅が進められた。昭和42年には、鷺別中学校も完成した。

昭和47年、地域の商店主たちは室蘭志向が強く、室蘭に購買力が流れていくことを食い止めるため、個店が集まって大店舗を作ろうと協同組合を組織し、ショッピングセンター「新和」を鷺別町3丁目にオープンした。店頭に商売繁盛を願って札幌狸小路商店街から譲り受けた狸の置物が置かれ、向かいの第1ストア（昭和46年オープン）とともに、地域を代表するショッピングゾーンとして長く親しまれることとなった。また、そのほかにも菓子店や写真店、雑貨店などの商店が鷺別駅前の通りに建ち並び、商店街を形成していた。彼ら商業者は、夏は新和デパート駐車場で七夕祭りや盆踊り、花火大会などを開催し、子ども達の想い出づくりを演出した。

当時の子ども達の遊びといえば、鷺別の子ども達にとっては、海は自分たちの庭で、ほとんどの子どもが夏は泳いでいた。昭和20年以前を知る人々にとっては、海から顔を出しているズブ岩と鷺別岬から80メートルほど

先にあつた「ローソク岩」は大事な目印であつたという（昭和26年に岩礁づくりのために爆破されてなくなつた）。海から岩までの距離を泳ぎきると初めて一人前と認められたのである。また、曲がりくねつた鷺別川は子ども達にとって格好の遊び場で、夏は釣り、冬はスケート場となつていた。しかし、河川が整備されると、スケート場としては使われなくなつた。

明治39年から鷺別の移り変わりをみつめてきた地域の守り神、鷺別神社が改築されることとなつたのは昭和49年12月のことだつた。これを記念して「鷺別にも伝承芸能を」という気運が高まり、宮城県で若い頃獅子舞をしていた草岡久夫が名乗り出て「鷺別獅子舞」を創作、12名によって愛好会が発足。翌年には「鷺別獅子舞保存会」へと発展し、鷺別小学校の子ども達に受け継がれていくこととなった。太鼓に鐘、笛が入り、黒獅子が人々の願いを受けて、ゆつたりと舞うところに特色があるといわれている。

本市の人口が5万人を超えた昭和50年代、急激な都市化は新旧の間に差を生み、様々なひずみを生み出すことが指摘されているが、そうした情勢の中から物騒な事件も起きた。昭和も終わろうとする63年の暮れ（11月）に室蘭で発生した暴力団組長射殺事件を契機として暴力団同士の抗争が激化し、1月下旬から2月上旬にかけて発砲事件が続発した。そして平成元（1989）年2月10日、鷺別でも2名の暴力団員がけがをするという事件へと拡大した。一般住家の立ち並ぶ地域で起きた事件は、今後の住民にも被害が及ぶことが懸念され、事態を重く見た本市は、室蘭警察署や室蘭市と共同して暴力団追放のための決起集会を開催した。平成元年2月16日、室蘭市内のホテルで開催された決起集会は、登別・

室蘭両市の飲食店組合、建設業協会、各商店会など、100団体500人が集まった。

昭和50年頃と都市化の進展とともに、複雑に曲がりくねった鷺別川が改修された後、流量が足りず生活用水が沈殿したり、自転車や冷蔵庫など大きなゴミなどが捨てられるなど、鷺別川は次第に汚れ、多くの人が眉をひそめるような川となっていた。このため、昭和49年に鷺別地区の町内会全てが集まって対策委員会を設置し、2年をかけて徹底的にPR。昭和51年から1年に1度、1戸1人以上が参加して河川清掃が行われるようになった。再生は難しいと思われた鷺別川は、個々人の小さな実行力の積み重ねにより、ふるさとのシンボルにふさわしい川へとよみがえっていった。この取組は、本市内の他の地区の河川（胆振幌別川、来馬川）にも広がり、効果を上げていった。そして、平成7年に日本河川協会から河川功労者として表彰されることとなり、高い評価を得ることができた。

鷺別地区の人々のまちづくりによせる努力は、その後も着実に続いていった。

自然景観保全に向けては、平成17年に「ふるさと鷺別を考える会」の会員によって、北海道千本桜運動で贈られたエゾヤマザクラの苗木30本を鷺別岬遊歩道に植えた。平成19年からはふるさとの美しい景観を散策することで、健康作りとも重ね合わせる「鷺別海岸浴ウォーキング」が実施されることになった。ウォーキングに参加した人に鮭汁をふるまうのは鷺別婦人会が担当するといったように、鷺別地区の住民が主体となっておこなってきたが、平成26年に中止されることとなった。また、未来ある子ども達を地域でどうやって育てていくべきかという問題で

は、共稼ぎや女性の社会進出などにより放課後の子ども達の遊び場所をどのように確保していくのかという問題も生まれてきた。鷺別地区の住民は平成17年、53名が集まって「鷺別子ども見守りたい」というボランティア団体をつくり、児童の安全通学を支援した。地域の先駆的な取組は再び評価を得て、「鷺別子ども見守りたい」は平成22年、安全・安心なまちづくり関係功労で内閣総理大臣表彰を受けた。

そして、平成20年には小学校の空き教室や体育館を利用して、放課後の子ども達の安全で安心な居場所を確保し、そこで一定時間地域の人が見守ることとし、「放課後子ども教室ひなわしメート」という事業をスタートさせた。正月には餅つきや百人一首、夏には流しソーメン、本の読み聞かせなど、様々なプログラムを実施したこの取組もまた、平成23年、幌別地区に「はまなすメート」の誕生へと波及した。

鷺別地区は、平成23年東日本大震災で目に見えた被害こそなかったものの津波という海岸線に暮らす者にとつて、きわめて怖い自然の脅威にさらされていることが明らかとなった。

このため、計画中であった鷺別小学校の建て直しにおいて、住民からの意見集約なしには進められない一大プロジェクトとなった。当初は3階建てが妥当と思われるものも4階建てとなり、校舎内に非常用の防災備蓄倉庫も置かれた。屋上への避難も想定され、3階、4階、屋上で、地域住民の3割となるおおよそ1千人が収容できる避難スペースを確保するものとなった。また、防災上の措置ばかりではなく、平成24年に閉鎖した「鷺別青少年会館」の機能を引き継ぎ、「鷺別子ども見守りたい」や「ひなわしメート」などの地域活動に対する配慮から、1階にはPTAやボランティア活動、世代間交流などに使える特別活動室や多



目的ホールも設置された。平成30年には、鶯別小学校敷地に鶯別児童館も移転新設された。

## 栄 町

鶯別町の東側に国道36号を挟んで位置する栄町には、元々幌別村と鶯別村の境界があった。その名残りは、現在の学校区域に残っている。鶯別中学校に通う栄町1丁目と2丁目、緑陽中学校に通う栄町3丁目と4丁目。この両者の間に両村の境界があった。また、現在、(株)パロマ工業が立地するあたりには3つこぶの砂山があり、「みつやまっこ」と呼ばれていたという。

昭和35年12月、北海道労働金庫は、栄町1丁目に勤労者住宅25戸を建設した。この住宅は、「はまなす団地」と呼ばれた。この頃の栄町の様子を昭和38年に国土地理院が撮影した空中写真から確認すると、栄町4丁目には住宅が一定程度あるものの、栄町1丁目と2丁目にはほとんど建物を確認することができず、この勤労者住宅と同じく昭和35年度から39年度にかけて建設された市営鶯別東団地がある程度であった。その後、日本製鋼所系列の不動産業者によって宅地分譲が勧められるものの、ほとんど住宅が建っていないこともあり、昭和36年6月には、はまなす団地から陸上自衛隊幌別駐屯地までの区間約4.8<sup>キロメートル</sup>と、千歳町から富浦町までの4.3<sup>キロメートル</sup>の国道2区間の制限速度が試験的に時速70<sup>キロメートル</sup>まで引き上げられた。この制限速度がいつ頃まで継続されたかを確認できる資料はないものの、千歳町から富浦町までの区間が昭和41年に引き下げられているので、この頃に同じく引き下げられたのであろう。

その後、昭和49年頃には、室蘭海陸通運の社宅が栄町4丁目に建設されたことなどもあり、おおむね現在の町並みが形成された。

昭和50年代後半から平成にかけて、栄町で圧延工場を営んでいた富士工業が撤退した。昭和59年に閉鎖され、栄町には大きな空き地ができた。それから5年、新日鉄の高炉休止問題なども起き、経済は長い停滞の時代へと向かっていった。だが、平成4年に(株)パロマ工業が進出し、富士工業跡地に大きな工場を建てた。平成9年には栄町2丁目にモダ石油が進出した。格安ガソリンで有名な同社の進出によって、本市内のガソリンスタンドでの価格競争が激化することとなった。

栄町の町内会による自治活動で話題となったのは、国道36号という幹道に面した交通アクセスに恵まれた地区ではあるものの、鶯別地区と幌別地区に挟まれた長い区間、はまなす団地などの市内路線バスの停留所はあるが、札幌や新千歳空港に行く高速バスのための停留所はなかった。このため、町内会の活動として老朽化していた停留所を買い取り、町内会の費用で停留所を建て直すなどしたところ、札幌行きが停まり、平成18年からは新千歳空港行きの高速バスもが停まるようになった。

平成20年には、老朽化が著しかった市営住宅鶯別東団地が建て替えられ、5階建ての道営住宅「であえーるはまなす団地」となった。同住宅は、平成25年に津波避難ビルの指定を受けた。

### 参考文献

- ・登別町『登別町史』昭和42年
- ・登別市『市史ふるさと登別』昭和60年
- ・黒澤友義『昔の鶯別 そして未来に』平成30年
- ・栗本鋤雲『宛庵遺稿』（尾鷲市立中央公民館・中村山土井家文庫所蔵）
- ・『川島専三資料Ⅰ資料（近世）』1 松前島郷帳』（北海道立図書館

064 / KA / 1-1)

・北海道庁『昭和九年 宇界並二地番(一)』(北海道立文書館 A7-

1 3423)

### 第3節 美園・若草地区

#### (美園町・若草町・上鷺別町)

#### 地 理

美園・若草地区は、本市内で最も西側に位置して室蘭市に隣接し、線路よりも山側で、東側を新生町に接している。

美園町は、室蘭市高砂町から鷺別川を渡り鷺別学田通り踏切付近に向けて延びる道路が地理的な中心を走っていた。若草町は、ワシベツライバ川(のちの富岸川)と、それに流れ込む小さな流れが血管のように張り巡らされて流れ、湿地帯であったこともあり、鷺別小学校と同校の学田を結んでいた学田通りが山裾を走る程度で、現在のように平地には道路は見られなかった。

そのような土地が現在のような一大住宅地になるまで、上鷺別東部地区土地区画整理事業が行われ、その結果、整然と区画されたことよつて、店舗と住宅の建設が相次いで行われて現在に至っている。

#### 美 園 町

鷺別川の左岸側で、J Rの線路に囲まれた美園町は、明治期に入ってから積極的に開墾がなされた土地であった。美園町付近では、江戸末期に岩井帯刀などが山に生える天然の桑を用いた養蚕を試みたものの湿気が多く、桑などが腐敗して失敗した

という。

美園町を通る道路は、江戸期以前、室蘭市の楽山付近から鷺別川に向かって伸びる道が、美園児童センター付近で同河川を渡り海岸に向かつており、その道路沿いの美園町3丁目24番地に「鷺別開拓発祥の地」の解説看板が立っている。

明治2(1869)年に太政官から幌別郡の支配を命じられた片倉小十郎が、明治3年以降に旧家臣とともに幌別郡に移住してくるが、その一部の5名が解説看板の建つ付近に移住し、開拓に従事したことを記念したものである。開拓者が住む数軒の住居と苦心の末に開墾した畑が並ぶ、そのような光景が昭和20年代まで続いた。

美園町が現在のような住宅街へと転換していくきっかけの1つとなったのが昭和29(1954)年に発生した台風15号、「洞爺丸台風」と通称される台風による被害であった。同台風によって各所に大量の風倒木が発生した。国は、風倒木を処分するために民間事業者などに払い下げ、民間事業者では払い下げを受けた木材を用いて盛んに住宅建設を行った。本市では、鈴木組(豊浦町)が美園町4丁目付近に建て売り住宅12戸を建設して販売した。この建て売り住宅の飲用水などには、当初は井戸水を予定していたが、掘削したところ飲用にあまり適さない水であったことから、住宅裏のボンス山から流れてくる水を利用して、各戸への水道が敷設された。この頃の本市上水道は、主要道路の道端に共同利用の水道栓がある程度であったため、各戸に水道が引かれている美園町の住宅は人気が高く、住宅を購入したり、新たに建設する人が増加していった。その後、本市の上水道も整備が進んだが、一部の住宅では現在もボンス山からの水を利用している。



にぎわうコープさっぽろしがイースト店

昭和43年に、日本製鋼所系列の不動産業者が旭ヶ丘団地（美園町4丁目）の分譲を開始した。同団地は150区画に区分され、主として（株）日本製鋼所の社員が購入した。分譲開始と同じ年に旭ヶ丘団地の住民は、「旭ヶ丘町内会」を発足した。（株）日本製鋼所の不動産関連部門なども美園町5丁目、6丁目を分譲したことで、美園町の住民が増加した。

昭和43年から富岸地区団体営農道整備事業として、登別中央通（現道道上登別室蘭線）の整備が進められた。そして、昭和50年にはボウリング場を改装したイーストショップが美園町1丁目にオープンした。同店に核店舗として入居した志賀総合食料品店は、総業を中心に多彩な品揃えを誇り、消費者の心をつかんだ。多くの駐車可能な駐車場とともに、近郊からの集客を果たした。その後、平成21（2009）年に志賀総合食料品店がコープさっぽろの傘下に入り、23年7月には「コープさっぽろイースト店」として再出発した。

## 若草町

美園町と新生町に挟まれる若草町は、ワシベツライバ川（現富岸川）が西に向かって流れ、それに山から来る小さな流れが合流する湿地が広がる地区であった。そのため、道路も山裾の比較的地盤が堅固な土地を通るしかなかった。したがって、道路

が無い平たん地への住宅等の建設は進まず、鶯別字田通り沿いに住宅が建設された。昭和33（1958）年に上鶯別地区に電灯が引かれ、37年には電話が開通した。この頃、土地の所有者が宅地として売却を始めたこともあり、地域的な便利さもあつて急速に人口を伸ばした。昭和33年から44年までの11年間で、戸数が約7倍に増えている。この頃はまだ湿地帯であった頃の名残りもあり、葬儀などに若草地区の住民は長靴で参列することが多く、履き物で若草地区の住民であることが周囲に判別されたという。その後も順調に戸数を増やしていき、昭和59年頃には上鶯別東部地区土地区画整理事業が完了し、現在と同様に住宅が建ち並ぶ一大住宅地となった。

若草町を流れる大小の河川は、若草町に置かれた国鉄の鶯別機関区で、蒸気機関車に水を供給することに役立つ。若草公園の線路側には



若草中央公園

貯水槽が置かれ、そこにはワシベツライバ川から引き込まれた水が貯められた。河川から流入することから、貯水槽には川魚も住みつき、また、若草中央公園付近にあった鯉料理店から逃げ出した鯉も生息し、それを目当てに近隣の住民が釣りを楽しんだという。

地域住民への聞き取り調査で必ず出るのが、この鯉料理店の話であった。昭和12年に開業し、昭和48年に惜しまれながら閉店に至つ

た同店は、豪華な建物の造りもあり、会社間での飲食など、比較的公式な場として利用された。鯉料理店から見て学田通りを挟んだ高台には、ジンギスカン店もあった。その後、中央通が道道上登別室蘭線の路線認定を受け、舗装や拡幅が進むと、モーターゼーションの進展にあわせて道路沿いに家族向けの飲食店が多数出店した。

昭和46年に若草小学校が開校、昭和52年に市立若草幼稚園が開園した。若草幼稚園は、土地区画整理事業後の間もない時期に建設されたこともあり、空き地の真ん中にポツンと建つたはずまいであり、地域住民が行った町並みの変化に関する定点観測の中では目印となった。昭和56年には、海側の栄町と若草町の間を結ぶ若草跨線人道橋が完成（口絵参照）。多くの幼稚園児によって渡り初めが行われた。そして、昭和62年3月31日には、道道に交差するように約1万平方メートルの面積を有する「若草中央公園」が供用を開始した。同公園では、例年「グリーンピア・サマーフェスティバル」が開催されて屋台などが並び、本市内では比較的大きなお祭りとして、子ども達に喜ばれている。

人口の増加に伴って、若草町の市民の間では、本市に対する手続きのためには驚別支所、もしくは本庁舎まで赴かなければならないことに対する不満の声が上がり、支所設置を求める声が高まっていった。この声を受けて本市では、平成9（1997）年4月に驚別支所若草分室を若草つどいセンター内に開設した。同分室では、住民票の写し、印鑑証明書、戸籍謄本の交付や、年金現況届の受付など、日常的に必要な頻度が高い事務が行われた。平成11年には室蘭信用金庫若草支店内に移転して業務を行ってきたが、住民票等のコンビニ交付サービスを開始したことなどから、分室の必要性が低減したため、令和2（2020）年3

月末をもって廃止した。

平成15（2003）年11月、若草町内会の老人クラブでは、町内会にある優和公園内に9ホールを備えたパークゴルフ場や遊歩道を整備した。遊歩道沿いには文学関係の石碑を多数配置し、「文学の道」として名付けた。完成した遊歩道などを視察した上野市長は、「（市民の手による）大事業だ」と感嘆の声を上げたという。

若草町の中心を通る道道上登別室蘭線沿いには、多数の住宅の建設に伴って複数のパチンコ店が営業をしていた。しかし、バブル崩壊後の不景気の中で相次いで閉店して、空き店舗となっていた。そのうちの1店に、平成21年に北海道競馬の場外馬券場進出の動きがあった。地域住民の間では、場外馬券場の進出に対する賛否両論があり、「射幸心をあおり、地域の風紀が乱れるのでは」との懸念から、反対運動も行われた。同年3月には反対署名が1千200筆以上集まった。その後も北海道競馬事務所が住民説明会を重ねて聞き、地域住民の懸念の緩和に努めたこともあって、進出に理解が示されていた。そして、平成21年8月に地域談話室を備える「Aiba登別室蘭」がオープンした。同場外馬券場では、平成25年3月から日本中央競馬会主催のメインレースの勝馬投票券も販売されるようになり、多くの来場者を集めた。また、Aiba登別室蘭に隣接する旧パチンコ店の空き店舗は解体されて、その跡地に回転寿司が進出した。同店は、土曜・日曜日には多数の集客を果たしている。

### 上驚別町

上驚別町は、本市の西端に位置し、主として山岳部となっている。

かつては、新生町1丁目、3丁目から美園町までを含む広大な地区で

あつたが、昭和49（1974）年の町名改正によって、平たん部の新生町、若草町、美園町が分離され現在の区域となった。令和2（2020）年4月末現在で上鷲別町の人口は84世帯165人が住んでいるが、大部分は若草町5丁目に隣接する地区に住んでいる。かつて新生町5丁目の山側にあつた高野台団地も上鷲別町の区域に含まれるが、現在の居住者は皆無となっている。

昭和48（1973）年に建てられた「七面堂（日蓮宗身延山鏡圓坊別院）」では、八幡大菩薩、鬼子母神、七面大明神、善賢菩薩及び子安観音などが祭られて、6月19日を祭日とし、子安観音は10月15日にお祭りをしていた。七面堂には、その他にも馬頭観世音（佐々木住職の実家があつた和寒町内で祭祀継承者が不在となつたため、この地に移設。石碑には昭和3年10月15日石川某（不明）建立とあるが詳細は不明）もあつた。

#### 参考文献

- ・登別町『登別町史』昭和42年
- ・登別市『広報のぼりべつ』各号
- ・登別市『市史ふるさと登別』昭和60年
- ・北海道新聞社『北海道新聞』各号
- ・室蘭民報社『室蘭民報』各号
- ・若草町内会『わがまち若草町町内会のあゆみ』昭和62年3月
- ・旭ヶ丘町内会『登別市旭ヶ丘町内会 創立30周年記念誌』
- ・旭ヶ丘町内会『登別市旭ヶ丘町内会 創立40周年記念誌』
- ・美園町会『美園町会五十年のあゆみ』
- ・桜ヶ丘町内会『創立30周年記念誌 桜ヶ丘町会のあゆみ』

## 第4節 富岸地区

### 1 青葉地区（桜木町・緑町・若山町の一部）

#### 地 理

青葉地区は、市立青葉小学校の通学区域と同一（緑町、桜木町、青葉町、大和町1丁目、若山町1丁目、2丁目）で、胆振幌別川からアイヌ語地名では「キウシト」と名付けられた。このキウシトの尾根は、かつて本市が3村に分かれていた頃には、幌別川と鷲別川の境界となつていた。また、線路と海岸線との間で胆振幌別川が室蘭方向に大きく蛇行していたことなどもあり、国道は戦後間もなくまで札幌道路踏切（大和町1丁目）から線路の山側を通つていた。この路線が1級国道28号に指定された頃には、桜木町1丁目12番地付近から斜めに入り、線路を越えて幌別橋に向かうという経路を通つていた。この名残りが、「28号線踏切」である。

本区域内は、おおざっぱに区分すると、

- ①若山町1丁目、2丁目、道道上登別室蘭線を挟んだ青葉町の一部
- ②桜木町、緑町及び青葉町の一部
- ③大和町1丁目

の3つの区域に区分される。

①の区域には、小さな河川が多く流れ、平地部分には湿原が広がる地域であつた。そのために、鷲別方面と幌別方面を結ぶ通行路は、通常であれば通行しやすい平地部分ではなく、高台を通つていた。

②の区域は、タツカルシナイ、ノポリトラシナイ、フレベツといったアイヌ語地名の残る河川が流れるが、①の区域よりも谷地は少なく、畑が広がる土地であった。

③の区域は、長く胆振幌別川の河口部分であり、陸地ではなかった。昭和45（1970）年12月に決定した都市計画では「工業専用地域」としており、まだ埋め立て途上の段階から工業団地として造成された土地である。

### 江戸期以前

本地区内には現在、川上A遺跡（続縄文（前半期）、遺物包含地）、川上B遺跡（縄文（早期、前期、中期）、集落跡）の2か所が確認されている。

川上A遺跡からは、続縄文期の恵山式土器が出土し、また、本市内では唯一の土偶が出土した遺跡でもある。川上B遺跡は、北海道縦貫自動車道建設工事に関連する事前調査（昭和55年から60年にかけて実施）において発掘され、約4万平方メートルの区域内からは約150の住居や墓の痕跡が確認された。状況から、さらに東西にかけて遺跡が広がっている可能性があるとされている。

その後は、江戸期までには特段の記録が残されていないため、その期間の詳細は不明である。

### 明治期以降

明治2（1869）年に幌別郡の支配を命じられ、翌3年から移住を開始した片倉家旧家臣団は、本市内各地区に分かれて移住した。その中で、鍛冶職人であった明珍清太夫と妻及び偏助の3名は、「トンケシ」に移住した。

この頃のトンケシは、現在の富岸町の区域よりも遙かに広く、字トンケシの区域は、現在の新生町、栄町4丁目から胆振幌別川付近までの区域であり、幌別村と鷺別村にまたがっていた。

明治9年に北海道大小区制の施行による幌別郡は、幌別村、鷺別村、登別村、富岸村、蘭法華村の5か村に区分されたが、明治15年に富岸村は幌別村に、蘭法華村は登別村と統合された。その後の3か村（幌別、鷺別、登別）の区域図を見ると、幌別村の西端は、青葉地区の西端と同一であったことから、富岸村の区域は、青葉地区の区域とほぼ同一であったものと考えられる。

明珍家は、明治10年頃に開拓使に出仕し、札幌市、恵庭市とその居を移した。戦後、陸上自衛隊幌別駐屯地が設立されて間もなくの頃、敷地付近より「明珍」と記された遺物が発見された。

その後、明治15年の津村柳吉（香川県）、明治26年の松井林蔵（兵庫県）をはじめ、続々と四国方面からの移住者が増加していった。また、「北海道国有未開地処分法」に基づく地所の払い下げの出願も盛んに行われた。このときの出願状況では、ノポリトラシナイ川の付近に集中している。そして、移住者の心の支えとなる神社もこの頃に祭られた。

明治26年に松井は、故郷の淡路一の宮である伊弉諾神社の御神札を奉持して来道し、ノポリトラシナイ川の中流付近に一宮神社を創建した。その後、高齢者には長い坂道を登るのは大変であるとのことで、昭和34（1959）年に幌別ダム横の高台に移転した。しかし、氏子の高齢化により、祭祀の継続が難しくなることが予想されたため、平成16（2004）年に御神札を伊弉諾神社に戻して神社を引き払った。また、大正14（1925）年5月には、地域住民一同で開墾など農作業に欠か

せない馬の霊を弔うために、馬頭観世音菩薩の石仏を建立した。建立地は、現在の陸上自衛隊幌別駐屯地の南西角付近で、同駐屯地が設置される際に桜木町4丁目に移転されたが、元々建立されていた高台は、「観音台」と通称され、往事の名残りを留めている。次いで、昭和10(1935)年頃には地神碑が建立された。同碑は「社日さん」と呼ばれ、春秋の2回の祭日には地域住民が集まって祭事を行い、その後、当番の家で直会なおらひが催された。

移住者の増加していった青葉地区は、海側から津村家、松井家、藤江家などの畑や水田が広がる農村地帯であった。また、道道上登別室蘭線と道央自動車道登別室蘭インターチェンジが交差する付近では、何軒かのアイヌ民族が耕作を行っており、高台では炭焼き小屋などもあったという。

昭和25年に警察予備隊が発足すると、昭和27年に本市では、その誘致を村議会で可決した。当初、駐屯地は奥川上(現在の室蘭工業用水池付近)への設置が検討されたが、土地が細かく分筆され、それに比例して土地所有者の人数が多いことが支障となった。一方で、現在駐屯地が設置されている緑町の土地は、津村家だけの所有であったため、交渉の容易さから、そちらに設置されることとなった。

同年12月に、保安隊幌別駐屯部隊の先発隊が幌別駅に到着し、駐屯を開始した。駐屯が開始されたことにより、駐屯地付近には食堂などが進出し、幌別駅前にも飲食店が増加した。また、一般車両よりも重い自衛隊車両が通行可能となるように、来福橋などがコンクリート製の橋に架け替えられていった。

昭和36年10月の集中豪雨災害で小平岸橋や国鉄の鉄橋などが流失し、

その災害復旧工事として翌37年には小平岸橋(車道)が竣工した。

昭和40年には、最後の非電化集落である西川上の集落15戸が電化された。この頃に来福町内会(桜木町1丁目と2丁目の一部)、新登津町内会(緑町2丁目)、西川上町内会(桜木町2〜6丁目)が相次いで発足した。昭和46年1月、室蘭総合自動車学校が自家用車の普及と自動車免許取得希望者の増加に対応するために、経営難にあえいでいた登別自動車学校を買収し、社団法人室蘭安全協会公認登別自動車教習所として開校した。

桜木町5丁目にあった排水路は、大部分が素掘り側溝で、かつ細いものであった。そのために降雨量が多くなるとも埋まりやすく、その改善が求められていた。

昭和46年6月4日、登別温泉で大きな土砂崩れなどが発生した集中豪雨による被害は、青葉地区でも発生した。この地区を流れる小河川は、周囲の畑などに水を供給する水路としても活用されていた。また、川沿いに幌別ダム施工時の土砂採取場所があった。工事終了後に芝生等による養生は行われていたが、度重なる雨によって、徐々に養生の状態が悪化し、折からの集中豪雨によって排水路に土砂が流入、流れを妨げられた水は周囲の農地に流れ込んで被害を発生させた。災害復旧するにあたっては、それまでの排水路を廃止して、新たに三面水路による排水路を設けた。また、昭和47年から50年にかけて、新徳消川にも2・3丁目の三面水路による改修が行われ、同じく徳消川の改修も行われた。これらの改修によって、桜木町での水害発生は減少するものと思われた。

しかし、昭和51年に再度、集中豪雨によって小河川は氾濫し、桜木通(登別交番から川上公園に向かう道路)や幌別駐屯地前の中央通一帯が水に

浸かり、ゴムボートによる救出活動が行われた。このときの記憶は住民の間に深く残り、昔の思い出を語るときの話題に欠かせないものとなった。

昭和49年の町名地番改正により、川上町であった同地区は、緑町、若山町、桜木町、青葉町に分かれた。この改正によって、桜木町4丁目に建つ「川上団地」は、名称を「桜木団地」に改称した。また、昭和49年に市総合体育館が若山町にオープンした。

そして、昭和52年に青葉小学校が開校。同校の開校によって、それまで幌別西小学校に通学していた同地区の児童は、青葉小学校に通学することとなった。次いで、昭和58年に緑陽中学校が富岸町の高台に開校し、青葉小学校の卒業生は、以後、同中学校に通学することとなった。

昭和54年4月に登別南高等学校が開校し、その並びに登別市職業訓練センターが開設した。また、この年、道南バス（株）では、道道上登別室蘭線の開通や若草町などで住宅地の形成から本市内の路線が重要な路線となることを見込んで、若山町に第2ターミナル的のものとして、同社東営業所の若山車庫を建設した（昭和57年4月に「若山営業所」として独立）。また、昭和53年10月に桜木簡易郵便局が開設した。

昭和56年2月、市内における宅地不足の解消を図るために、登別市土地開発公社は同公社所有の若山町2丁目の土地、約2万2千854平方メートルの分譲を開始した。この土地は、バス路線に面しており、すぐそばにバスの停留所があるなどの好立地であった。しかし、当初の申し込み資格が市内に居住または勤務先があるといった厳しいものであったために、申し込みが進まなかった。そこで、同年6月に本市外の居住者も対象とするように資格要件を緩和して2次募集を行い、分譲を完了した。

昭和57年に、仙海寺が室蘭市から若山町に移転してきた。同じ頃、桜木町2丁目の通称「さくら団地」の分譲が新日本製鉄（株）によって開始された。旧登別大谷高等学校のグラウンドからさくら団地の一部にかけては、かつて胆振幌別川が大きく蛇行していた名残りの三日月湖が残っていた。昭和43年に公有水面（三日月湖）と後背地（胆振幌別川と三日月湖に挟まれた土地）の埋め立てが免許されて、工事が開始されることとなったが、総面積約6万8千平方メートルと広大な土地であったことから、町は新日本製鉄（株）の協力を要請し、それを受諾した新日本製鉄（株）が施工し、埋め立てによって新たにできた土地の一部を同社に譲渡した。室蘭市仲町の同社構内に立地する産業振興（株）のアパート3棟（平成20（2008）年4月解体）が大きく目立ち、その他には目立つ建物が無かった桜木町2丁目は、この頃より新たに住宅の建築が行われるようになっていった。同じ頃、三日月湖畔で市内唯一（令和2（2020）年3月現在）の出土例となるお面の土偶が出土した。

昭和50（1975）年5月に、中央町から移転してきた日本道路公団登別工事事務所（白老インターチェンジから登別室蘭インターチェンジまでの工事を担当）が、担当区間の工事完了によって昭和62年1月をもって閉鎖した。閉鎖後の建物と敷地は本市が購入し、平成元（1989）年の開催を控える「はまなす国体バドミントン競技」の準備室とした。はまなす国体の終了後は、半分を倉庫などで利用するとともに、事務室の一部を来福町内会の町内会館として貸し出した。同町内会では、駐車スペースを活用して町内会の祭事会場とするなどしてきた。しかし、建物の老朽化が進んだことから、平成26年に解体した。

平成期に入り、同地区には様々な企業の進出がはじまるとともに、公



共施設の整備が行われた。

平成元年には、本市が誘致を進めてきたわかさいも本舗（株）の登別本店（若山町）が建設され、平成2年に市若山浄化センター（若山町）、平成6年に登別立正学園の白菊幼稚園（桜木町）、平成7年には北海道コカ・コーラボトリング（株）室蘭・登別統括営業所と（株）ナガワ登別営業所が相次いで開設（緑町）され、平成17年4月に登別南高等学校と登別高等学校の統合校である登別青嶺高等学校が開校した。また、平成26年8月には、サッポロウエシマコーヒー（株）登別支店、（株）北海小型運輸の配送センター（青葉町）が竣工した。

平成21年に本市は、旧登別自動車学校の建物と敷地を取得して、翌年3月に「登別市市民活動センター（のぼりん）」を開設した。開設当初は本市が直接運営していたが、平成25年度から指定管理者制度を導入し、令和元年現在はNPO法人登別市自然活動支援組織モモンガくらぶ（平成30年8月）が業務を受託している。

交通経路も大きく変わった。それまで道道上登別室蘭線を富岸方面から幌別方面に向かう際には、都市計画としては最短距離を通るよう計画されてきたが、実際の経路としては「平の沼」（新川町）など、胆振幌別川が大きく蛇行していた頃の名残りがあることから、来福橋か小平岸橋を迂回する必要があった。しかし、平成元年に平の沼が埋め立てられたことなどから、桜木、新川両町を最短経路で結ぶ架橋工事が進められ、平成10年に完成した橋は「桜新橋」と命名された。平成12年には、桜新橋の桜木町側に「しが食料品店桜木店」が出店した。桜新橋の開通としが食料品店の出店によって、中央町方面からの買い物客の一部が、同店で買い物をするようになった。同店は、平成21年に同社の経営を引き継

いだ「コープさつぽろ」が、登別桜木店として営業を開始した。また、平成26年には、道道上登別室蘭線が道道登別室蘭インター線に接続するための道路整備が行われた。

平成10度から14年度にかけて、桜木団地の建て替えが行われ、それまでの平屋建てから道営住宅5棟（3階建て）、市営住宅3棟（5階建て）となった。完成した5階建ての市営住宅は、「津波避難ビル」としての指定を受けている。

平成29年1月、青葉小学校の特徴の1つでもあったスケート授業で活用されてきた「青葉スケートリンク」が、気温の温暖化などによってリンクの管理が困難となり、30年間の歴史の幕を閉じた。

古い住宅が建ち並ぶ街並みであった青葉地区は、その後、緑町1丁目や桜木町5丁目、6丁目などに新興住宅街が形成された。また、古い住宅も建て替えが盛んに行われるなど、今後の発展が期待される地区の1つとなっている。

#### 参考文献

- ・登別町『登別町史』昭和42年
- ・登別市『市史ふるさと登別』昭和60年
- ・登別市議会『登別市議会議事録』各年版
- ・知里真志保・山田秀三『幌別町のアイヌ語地名』平成16年復刻版
- ・北海道新聞社『北海道新聞』各号
- ・室蘭民報社『室蘭民報』各号

## 2 富岸地区（富岸町、新生町、大和町、若山町の一部）

### 地 理

本地区は、富岸川を中心に西富岸川の左岸よりも東、緑陽中学校がある高台から海に向かって伸びる尾根（アイヌ語地名で「キウシト」といった。）の間に位置し、昭和9（1934）年の字界地番改正において「富岸町」とされた地区である。平成期に入ると、この地区の中央を走る道道上登別室蘭線沿いに大型店舗が進出し、それに前後して著しく人口が増加した。

主な道路を列挙すると、先述の道道上登別室蘭線のほかに、市道では西富岸川に沿って「富岸西路線」、住宅街を取り囲むように「鶯別字田路線」などがある。また、道道に「富穂橋」（富岸川）、西富岸橋（西富岸川）、市道には、「内外橋」（富岸川）などの橋梁が架けられている。

地区の中央を流れる富岸川は、カムイヌプリの中腹から流れ出し、平野部に至った後、現在の道道上登別室蘭線の手前付近から鶯別方面に向きを変えて流れ、美園町の鶯別字田通り踏切付近で鶯別川に合流する同川の支流の1つ「ワシベツライバ川」（別名「泥川」ともいった。）であった。大雨等により水かさが増すと、この流れの転換点付近で水があふれ、明治25（1892）年に開通した北海道炭礦鉄道の線路が堤防としての役割を果たして、なかなか水が引かないといった問題を引き起こしていた。明治23年頃に、富岸地区に輪西屯田兵や四国・淡路方面からの移住者が来ると、この問題を解決するために、流れの転換点付近から直接海に水を抜く水路の掘削を行った。この水路は、ワシベツライバ川の別名にちなんで「新泥川」とも呼ばれた。

なお、明治9年9月8日から明治15年2月6日まで「富岸村」が存在

したが、同村は、明治15年2月7日に全区域が幌別村に編入されたこと、幌別村の西端は現在の青葉町と若山町2丁目であったことから、青葉地区の区域内にあったものと推測される。

### 江戸期以前

富岸地区は、本市内でも比較的多くの埋蔵物包蔵地が見つかっている。富岸川沿いの高台には、

- ・富岸小学校遺跡（縄文中期）
- ・富岸神社遺跡（縄文早期・前期・中期・晩期）
- ・富岸遺跡（縄文中期）
- ・富岸川右岸遺跡（縄文中期）
- ・富岸川左岸遺跡（縄文中期・後期）

の6件が点在し、亀田霊園の西富岸川を挟んだ対岸には「亀田公園遺跡」（縄文早期・中期）がある。また、これよりも若干青葉地区側になるが、キウシト遺跡（縄文（早期・中期・後期）、続縄文（前半期））や若山町遺跡（縄文（前期・中期））も発掘されている。この中でも富岸遺跡と富岸川右岸遺跡には、鹿をはじめとする動物を狩猟する際の落とし穴（Tピット）が多数発見されており、縄文期には盛んに狩猟が行われていた様子がうかがえる。また、縄文期に海水面が上昇し、内陸まで及んでいた「縄文海進」の影響も、埋蔵物包蔵地の分布からうかがうことができ。これらの遺跡の大部分は、北海道縦貫自動車道建設工事に伴う事前調査において発見された。

その後、「トンケシ」という地名は、江戸期に通行した和人の手による紀行文などにも出てくるが、特段の記載はない。一方で、アイヌ民族の口碑の1つに「トンケシの津波」といわれるものがある。津波が襲来

して、「トンケシコタン」が壊滅したというものであった。中西諒（東京大学大気海洋研究所）らは、若山町3丁目の空き地においてボーリング調査を実施し、1663年の有珠山の火山灰の下から、津波の痕跡と思われる痕跡を発見した。これは、1640年の駒ヶ岳噴火の際に発生した山体崩壊に伴う約6分の津波の痕跡と推測している。

### 明治期以降

明治3年に移住してきた片倉家旧家臣団の1人、明珍清太夫は「トンケシ」に屋敷を構えたとされるが、このときの「トンケシ」は、幌別駐屯地が創設された際に敷地付近で「明珍」と書かれた遺物などが見つかっていることから、現在の緑町付近と推測される。

明治23年に輪西屯田兵の一部（石井方淑、副馬富五郎、竹中秀蔵、篠原兵次郎、蒲原忠吉、蒲原政一郎、野崎長一、勝野、池原、中川）が追給地を得て、輪西から移住してきた。それとほぼ同じ時期に、四国・淡路島からの移住者が富岸町の区域に定住しはじめた。この頃は、平地部分は谷地が広がっていたことから、学田通りよりも富岸川に沿って上流側に住む世帯が多かった。そのため、富岸小学校の前身となる室蘭塵別小学校富岸分校は、明治29年5月1日に字トンケシ番外地（現在の富岸町3丁目87番地付近）に設立された。

移住してきた彼らは、作物として芋、大豆、小豆のほか、大きさが馬鈴薯の2倍くらいある「あきいも」と呼ぶをいも収穫し、デンプンに加して室蘭に出荷していたという。

明治39年8月には、輪西屯田兵が中嶋神社（室蘭市）を分祀して富岸神社を亀田記念公園東側の小高い丘に創建した。その後、同神社の敷地

は放牧地などに囲まれるようになり、明治45年頃に現在地に移転した。

大正5（1916）年に、村財政の都合により富岸簡易教育所は廃止されて鶯別尋常小学校に統合されるが、大正11年4月に再度富岸特別教授所が字富岸136番地（現富岸町1丁目3番地1及び2）に設置された。そして、昭和8（1933）年には鶯別尋常小学校から独立して富岸尋常小学校となった。

昭和9年の字界並びに地番改正では、富岸地区の全域は「富岸町」とされた。そして昭和22年6月に村役場の駐在員事務所が設置された。

富岸地区での稲作も進められた。富岸川の水を利用した造田が計画されて2反が造田されるが、収穫は思うようにならなかった。そのため、当時の富岸地区の住民の間では、稲作に対する諦めムードが漂っていたという。しかし、戦後の緊迫した食糧難から、全国的に湿地帯への客土改良などによる食料増産が求められるようになり、本市では富岸地区がその対象となった。昭和29年2月に、富岸川から取水する灌漑溝工事が行われ、2町歩に作付けがされたが、この年は9月に発生した台風15号（洞爺丸台風）によって収穫は皆無に終わった。しかし、当時の農業者は稲作の成功に精力的に取り組み、翌30年には新たに10町歩を造田し、1反当たり平均4俵の収穫を得た。また、もち米の作況が初めて「並」となったことへの感謝を表すために、収穫したもち米を農協などの関係者に贈った。

昭和32年6月に、住民待望の電化が幌別町農業協同組合を事業主体としてなされ、農家15戸、非農家4戸がその恩恵にあずかることとなった。

昭和36年2月に、富岸小学校の校舎が新築となった。この頃の富岸小学校は、現在とは異なり小規模校として区分されていた。そのため、昭



富岸町の水田の様子

和49年には、同じく小規模校であった札内小中学校やカルルス温泉小学校と合同で、学芸発表会を行った。同校はその後、敷地を道央自動車道が通過することとなったことから、昭和53年に現在地に新築・移転した。なお、昭和51年に新築した同校体育館も再利用されることとなり、現在、その建物は移転・新築されて、富岸青少年会館として利用されている。

昭和39年12月に、北海道勤労者住宅生活協同組合が勤労者住宅20戸を、翌40年に5戸を建設して汐平団地と名付けて分譲を開始し、室蘭市在勤の勤労者が住むようになり、それまで専業もしくは兼業の農業者であった富岸地区の住民に、農業と関わりのない住民が増えはじめた。会社勤めの住民が増えていったことにより、祭典の開催日もそれまで8月16日、17日に固定していたが、社員などが参加しやすいように土曜日・日曜日に変更となった。農業が主であった頃は、祭典の日程は農作業の都合にあわせて決められていた。そのため、この日程変更にあたっては、農業に従事する古くからの住民と、農業に従事しない比較的新しい住民との間で何度も話し合いが行われた。また、この頃は地区内には小売店等があまりなく、食料品は若山町3丁目の玉田商店が御用聞きで回っていた。

そして、昭和49年4月の町名地番改正において富岸町は、ほぼ現在の

富岸町、大和町、若山町、新生町の一部（新生町の1丁目及び3丁目は上鷺別町からの町名改正）に区分された。そして、昭和52年5月1日に、富岸、はまわし、汐平、あかしや、富浜の5町内会によって富岸地区連合町内会が発足した。

昭和57年度には、それまでほぼ直角に曲がり、富岸川に流れ込んでいた西富岸川について、その部分を曲線的に改良することで氾濫の危険性は低減した。

昭和58年4月、緑陽中学校が富岸町1丁目に開校した。新生町などの人口増加に伴って生徒数も著しく増加し、校舎が狭隘化していた鷺別中学校から緑陽中学校が分離した。同校の敷地は、陸上自衛隊第13施設群による部外工事として実施され、昭和55年10月18日に本市に引き渡しとなり、校舎建築により開校となった。

昭和60年5月、富岸地区土地区画整理事業に着手した。同事業が開始される以前の同地区は農地であったために、周囲の幹線道路の他にはほとんど道路がなく、このまま分筆が進むと無計画に住宅が建設される懸念があった。また、この事業を実施することで、当時目指していた「8万人都市」に向けて、鷺別・富岸地区と幌別地区の連たんが促進されるものとの目論見があった。昭和60年度から平成2（1990）年度までの6年間をかけて実施した結果、主な対象地区の富岸町は、世帯数、人口ともに事業実施前の約5倍となった。

平成6年に、それまで水田など農地が広がる若山町に、登別サテイ（現・イオン登別店）が出店した。この前後の時期には、富岸地区への出店が活発に行われ、一般住宅も多数建設された。

そして、平成15年にケアハウス・デイサービスセンター「アンデルセ

ンの丘」が開設され、平成16年にはサンワドー（現DCMサンワ登別店）とマックスバリュ北海道（現マックスバリュ登別店）を核店舗とする登別ショッピングセンターが富岸町1丁目に開業。平成22年に、養護老人ホーム「チボリの森」が川上町から移転して開設された。

参考文献

- ・登別町『登別町史』昭和42年
- ・登別市『市史ふるさと登別』昭和60年
- ・富岸町内会『創立50周年記念誌 半世紀のあゆみ』平成20年
- ・知里真志保・山田秀三『幌別町のアイヌ語地名』平成16年復刻版
- ・北海道新聞社『北海道新聞』各号
- ・室蘭民報社『室蘭民報』各号

## 第5節 鉾山地区（鉾山町・川上町）

### 地 理

鉾山地区は、本市の北西部に位置しており、北は壮瞥地帯で、新第三紀、第四紀の火成岩で形成されている。

鉾山町の北部には、大峠や幌別岳などが連なり、その山腹から流れ出た河川が合流して胆振幌別川を形成する。また、金属鉾床が広く拡がり、金・銀・銅の採掘が行われ、町名の由来となっている。川上町は、鶯別来馬川、室蘭市との行政界、鶯別岳とカムイヌプリを結ぶ稜線、カムイヌプリ付近から登別室蘭インターチェンジを結んだ線、そして胆振幌別

川に囲まれた地区となっており、鶯別来馬川上流には川又温泉がある。

### 鉾 山 町

鉾山町は、明治40年代から金・銀・銅が生産され、大正3年には国富鉾山とともに銅生産に関して重要鉾山に位置づけられるなど、鉾山で栄えた地区であった。

明治25（1892）年、北海道炭礦鉄道（株）室蘭線の鉄道工事を請け負っていた早川組が銅鉾の試掘したものの、事業化には至らなかった。また、『殖民公報 第41号』では、明治27、28年に小樽の人某が現鉾区内なる瀧ノ沢、一ノ谷で、34年には一ノ沢で試掘したが、こちらも事業化には至らなかったと記している。この地区が「鉾山」の名を冠する実際のきっかけとなるのは、明治39年から始まる小田良治による開発からである。

明治39年、三井物産札幌出張所長などを勤めた小田良治が、資本金400円を投じて鉾山地区の土地を「北海道国有未開地処分法」に基づく貸付や売払を受けて、鉾山の開発に着手した。最初に岩の崎鉾（山神社横手）で銅の採掘が始まった。各所で試掘を続ける中で、ほどなくして胆振幌別川のさらに上流部にある旭鉾で金鉾が見つかり、その採掘を開始した。日清戦争で得た賠償金によって金本位制をとるようになった当時の日本にとって、金の産出量や保有量は国家的な重要問題であった。金鉾石が産出したことで沸き立つ現場の様子は、『金井抱二日記』<sup>注1</sup>に記されている。明治40年11月には、幌別駅から現在の市ネイチャーセンターふおれすと鉾山付近までの約9・6キロメートルに約4万円（現在の約4千423万円）の費用を投じて敷設した馬車鉄道の運行を開始した。馬車鉄道は、鉾山地区で精製された製品や鉾石を積んで幌別駅前に向か

い、帰りには生活用品などを積み込んで戻ってきた。また、室蘭市などに用事がある住民も、この馬車鉄道を利用したという。昭和2(1927)年には、増産に向けた輸送力増強のために蒸気機関車へ転換した。しかし、蒸気機関車が出す火の粉によって、沿線で山火事が多発したため、ガソリン車、次いでディーゼル機関車へと動力を転換していった。同路線は、壮瞥町黄溪で採掘された硫黄鉱石を積んで鉱山地区と幌別駅前を往来していたが、昭和27年に壮瞥町側の道路改良によってトラック運送へと切り替えられ、本市側の路線は撤去された。

それから小田良治は、明治44(1911)年に壮瞥町黄溪の硫黄鉱山を買収し、そこから現鉱山町までの約8<sup>キロメートル</sup>の間に索道を架け、黄溪で採掘した硫黄鉱石を索道のかごに乗せて本市側に運び、幌別駅まで軽便鉄道にて運搬して出荷した。

幌別鉱山の稼動は、第1次産業が主力であった幌別村の様相を一気に変えていった。当時のまちの中心街は、漁業や農業に従事する人が多くいた幌別地区といわれていたが、鉱山が稼動して2年後には、幌別駅周辺の人口が151戸697人であったのに対し、鉱山地区は181戸671人となっており、どちらが「まちの中心」かが分からぬような状態であった。大正3(1914)年には農商務省が定めた重要鉱山の1つとされ、大正5年から大正8年にかけては、硫黄産出量日本一とまでいわれるほどの盛況を呈していた。このように盛況であった一方で、銅などの精錬時に出る煙などによって、近隣の植物は枯れ、胆振幌別川を遡上するサケの数も激減した。この鉱毒発生をうかがわせる事態は、鉱山稼動直後の明治39(1906)年に発生した。そして、このサケの不漁によって胆振幌別川に何か所かあったサケの漁場経営に大きな影響を

与えることになった。幌別の有力なアイヌ民族であった金成喜蔵の娘ハナは、「この不漁により金成家が没落する原因の1つになった」(『バチラー八重子の生涯』P73)と述べている。このような状況に対して地域住民は、大正5(1916)年8月に幌別村民大会を開き、遡上するサケの減少と鉱山稼動との因果関係を調査するよう胆振支庁などに求めた。また、農業や木材業を営んで、軽便鉄道が敷設された土地の一部の地主であった藤江出来太は、鉱毒の対策をなかなかとらない北海道硫黄(株)への抗議の意志を示すため、同社の軽便鉄道の線路上に座り込みを行い、鉱石等の運搬を阻止する手段に訴えた。同氏は鉱石等の運搬を阻止したが、通学する児童・生徒が乗っている鉄道は止めなかったという。

盛況を受けて、公共施設等の整備も進み、明治40(1907)年5月には、幌別尋常小学校の分校として「幌別鉱山教授所」(41年3月には「幌別鉱山特別教授場」に改称)が開設され、須田賢が教育にあたった。そして大正4(1915)年には、幌別鉱山特別教授場が独立校となつて「幌別鉱山尋常高等小学校」になった。また、金鉱石を採掘していた旭坑付近には、明治42年11月に幌別尋常小学校附属旭鉱特別教授場を開設。大正4年6月に幌別鉱山尋常小学校の附属となり、大正7年4月には独立して旭尋常小学校となった。しかし、児童数の減少から大正9年7月に閉校となり、幌別鉱山尋常小学校に統合された。その他、大正5年9月6日には、3等郵便局の「幌別鉱山郵便局」が開設された。

しかし時代の成り行きは栄えるばかりではなく、第1次世界大戦以降の不況によって銅が値下がりし、硫黄も外国からの輸入品に押されると、経営は次第に厳しいものへと変わっていった。大正9年、小田良治と三

井系列の硫黄山が合併して「北海道硫黄(株)」を設立。企業刷新を図ったが、ヤマを離れるものが後を絶たず、大正末期には戸数が半減するほどだった。

それでも、アジア・太平洋戦争中は時局を反映して、硫黄の需要が増加により活発に推移したが、戦争の終結とともに再び厳しい経営が続くこととなった。

鉱山地区には、幌別鉱山のほかにもう一つの鉱山があった。幌別地区から鉱山町に向かう途中、「第二橋」といわれた現在の「蔭の沢橋」を渡った右手の「蔭之沢鉱山」である。

この鉱山は、昭和14(1939)年に松本勝四郎が鉱業権を取得し、「松本鉱業蔭之沢鉱山」と命名して採掘を開始したが、昭和20年9月に終戦の影響もあり、一時採掘を休止した。松本は、当初東京に在住し、その後広島県広島市に居住しており、鉱山の管理等は山田末吉が所長として行っていた。そのため、戦後の農地改革では「不在地主」と判断され、同鉱山付近の土地は強制買収の対象となった。これに対して松本が異議を申し立てをしたことよって、強制買収の対象から除外され、昭和25年の採掘を再開した。しかし、鉱床が尽きたこともあって、昭和30年頃に廃坑に至った。蔭の沢鉱山で採掘していた鉱石は、そのまま国富鉱山(共和町)に送られて、同地で精錬された。

鉱山地区には、鉱山のほかに温泉資源もある。明治41年に水戸藩(茨城県の大部分)出身の川又兵吉が、のちに「川又温泉」と呼ばれる温泉を発見した。

現在は訪れる人もまばらな「川又温泉」であるが、登別南高等学校(現登別青嶺高等学校)人類研究部の生徒たちが平成4(1992)、5年

にかけて、川又の子孫などから詳細に聞き取り調査を行っている。その結果、温泉分析表など貴重な資料が残るとともに、川又兵吉の人となりも現在に伝えることとなった。

彼らの聞き取り調査によると、川又は生前、「桜田門外の変に一族が加担したと疑われたことから南部藩に逃避し、その後は北海道に移住して、川又温泉で宿泊料が低廉な宿泊施設を開いた」と子孫に語っていたという。川又による温泉の発見は、明治41(1908)年であるが、『幌別町のアイヌ語地名』によると、この温泉をアイヌ語では「クスリアフブカルシ」(薬湯を我等貰うのが常である場所)と呼んでいる。アイヌ民族は、川又の発見以前からこの温泉の存在と効能を知り、活用していた。川又の孫・輝光は、幼少時に兵吉に連れられて川又温泉方向に歩いて行くと、十勝から来たという高齢女性に会い、この女性が「傷やけどの薬にするために、温泉のお湯を瓶に汲んで持ち帰る」との話聞いたと述懐している。川又兵吉は鉱泉権を取得し、昭和7(1932)年に宿泊施設を開館した。水温34度で無色透明の硫黄泉を飲用すれば、薬効ありと一定の人気を得ていたようである。市内の古老からの聞き取り調査の際にも、「馴染みの温泉として、子どもの頃、父の胃潰瘍を直すために一升瓶2本を担いで川又温泉の温泉水を取りに行った」という話が聞かれた。

しかし、川又温泉に行くには、軽便鉄道で鉱山町の市街地に着いた後に、鶯別来馬川の主流に向かって歩いて進むしかなく、交通の便がきわめて悪いことから、登別温泉やカルルス温泉の様には流行はしなかった。

また、昭和29年の洞爺丸台風で宿泊施設が倒壊してしまい、翌年に再建したが次第に来泉客も減少し、昭和31年に温泉は休館。昭和36年10月の

集中豪雨によって建物も流され、現在は湯船<sup>注2</sup>が残るのみとなっている。

昭和40年代に入ると、北海道硫黄(株)は徐々に業務を縮小していった。昭和46年6月には壮瞥町黄溪での硫黄の精錬を中止し、47年6月には北海道硫黄(株)が鉱山地区住民への電力供給を停止した。そして、48年5月に北海道硫黄(株)幌別鉱業所が閉鎖となった。これによって、さらに人口が減少し、49年3月には幌別鉱山小中学校が廃校となり、幌別西小学校と西陵中学校にそれぞれ統合した(小学生3名、中学生4名)。

昭和50年8月、「幌別鉱山獅子舞保存会」が発足した。鉱山町で盛んに行われていた「幌別鉱山獅子舞」であったが、北海道硫黄(株)幌別鉱業所閉鎖によって獅子舞が停滞ぎみとなったため、後継者育成を目的に結成した。平成5(1993)年には、「幌別鉱山獅子舞」が本市の指定文化財に指定された。現在も同会では、刈田神社の例祭などで獅子舞を披露している。

北海道硫黄(株)幌別鉱業所の閉鎖によって人口が激減した鉱山町であったが、再び新しい息吹を発しはじめたのは、昭和63年の「ふるさと創生資金」の使い道をめぐる市民の話合いからである。

廃校となった幌別鉱山小中学校の校舎は、昭和53年7月から市民研修センターに転用して、多くの市民に利用されてきたが、『登別市総合計画(1996年策定)』において、鉱山町を「自然体験、自然環境教育の拠点地区」として位置づけられたことをきっかけに、ネイチャーセンター整備に向けた機運が高まった。市民研修センターの利用者を中心にネイチャーセンターの在り方などについて話し合いがもたれ、平成11年には本市に対してネイチャーセンターに関する提言書が提出された。そ

して本市では、その提言の内容を踏まえて、ネイチャーセンターの整備をすすめ、平成14年4月に「市ネイチャーセンターふおれすと鉱山」として開設した。同センターは、開設当初は本市が直接運営していたが、利用者などが結成した市ネイチャーセンターの運営を支援するボランティア組織「登別市ネイチャーセンターふおれすと鉱山活動支援組織モモンガくらぶ」が平成17年にNPO法人の認証を受け、「非営利活動法人自然活動支援組織モモンガくらぶ」(以下「モモンガくらぶ」となった。平成18年4月からは、清掃と夜間管理業務を同法人に委託。翌19年4月には指定管理者制度を導入して、同法人が指定管理者となった。

ふおれすと鉱山の整備を進めた本市は、ふおれすと鉱山周辺や鉱山地区の森林について、適切な整備・保全を図って、行政と市民の協働による森づくりを目指すこととし、その指針とするため、平成18年3月に100年後の鉱山地区をイメージした「ふおれすと鉱山流里山づくり構想」を策定した。モモンガくらぶでは、ふおれすと鉱山周辺をはじめとする山林について、その動植物などを調査して保全などを進めた結果、鉱山での採鉱や精錬などによって大きな影響を受けた鉱山地区の植生などの復活が進んでいる。

注1 明治40(1907)年から大正10(1921)年までの間、幌別鉱山で勤務した金井抱二が記した日記。採掘した鉱石の検査方法や事業所内の様子などが生き生きと記されている。日記の一部は、長内弘著『史観』に翻刻されている。

注2 『市史ふるさと登別 下巻』946ページには、湯船の大きさについて「一畝四方の囲い」と記されているが、登別南高等学校校



の実測では「縦×横×深さ＝1.2×2.0×0.6<sup>メートル</sup>」であった。

## 川上町

川上町は、昭和9年の字界地番改正によって誕生した町名で、現在の和和町1丁目、桜木町、緑町、青葉町、若山町1丁目と川上町の広域にわたる町名であった。

明治初頭、幌別に入植してきた片倉家の当主がやがて定着した町は「片倉町」と名付けられ、その片倉町の先のところに昭和56（1981）年、白石城を模した郷土資料館が建立された。そこから山手をもっと進むと胆振幌別川をまたいで川上町へつながっていく。そして坂道に沿って進み、ダム右手の山中に分け入ると、小山の中腹に「ダム龍神」の石碑が建っており、碑文によってこの地が昭和42年に北海道企業局がダムを築設し、湖水に埋没したことを伝えている（昭和43年ダムの西湖岸に守護神木塔を設置したが、土砂が堆積して除去した昭和55年、石造に変えて建立された）。

農業などの開墾を目指して川上町に人が住みはじめたのはおおそ明治15（1882）年以降で、これは明治初期、片倉主従が幌別浜側から胆振幌別川流域に住みはじめたことから、その地を外して川伝いに比較的広く土地のとれる現在の片倉町から奥の川上町、片倉町から室蘭側の桜木町、緑町、大和町へと入植していったものと考えられる。

明治23年8月、室蘭市で建設業を営んでいた星野多仲が幌別村の総代人紺野久治、中山弥重との間で、現在の（株）上田商会川上工場付近での砂利採取に関する契約（契約期間10年）を結んだ。その後、この地区の集落名は、「石山」と呼ばれるようになった。この契約では、幌別停車場と石山との間を結ぶ道路の修築、橋梁の架設が条件として付された。

修築された道路は、砂利等の運搬のほかに農産物や日用品の運搬に活用されたという。

明治26年2月、鋏を振り上げて開墾に勤しむ人々は、幌別開拓の成功と入植者の安全を祈願し、兵庫県津名郡一宮町多賀（現在の兵庫県淡路市多賀）にある伊弉諾神宮から御神札を受けて神社を建立した。この神社は、「二宮神社」と命名され、「一宮さん」と通称された。例祭日は伊弉諾神社の例祭（本殿祭）にあわせ、4月22日に行われた。当時の川上地区は通称で3つの地区に分かれ、奥川上（ダムで水没した地区）、東川上（現在の片倉町）、西川上（現在の桜木町）の3地区の持ち回りで開催されていた。神社の場所は、ノボリトラシナイ川に沿った高台にあったが、そこに至るまでの傾斜が厳しく、神社前で例祭後の帰宅する際に転倒しつげがをする氏子などが現れたことから、室蘭工業用水池横の高台に移転した。しかし、氏子の高齢化が進み、祭祀の継続が難しくなることが懸念されたことから、平成16（2004）年5月に祭神としてきたお札を伊弉諾神社に返して廃止した。

奥川上地区の人々は、神社のほかに五穀豊穡を祈願する5角柱の地神碑、様々な場面で活躍した馬を慰霊する馬頭観世音、また、山での安全を祈願する山神碑も建立した。

昭和22（1947）年、川上町266番地付近（現在は室蘭工業用水池の水域）に室蘭営林署が苗圃を設け、鉢山町に造林事業所を、幌別町と登別温泉町に担当区を置いて、戦時中に軍需材として乱伐された跡の植樹に力が注がれた。川上町に設けられた苗圃は、幌別ダムを建設した際に水没することから、札内に移った。

昭和34年9月、幌別ダムの建設計画が持ち上がった。胆振幌別川の度

重なる氾濫を経験している当時の幌別町としては、第1に洪水調整を目的とした治水ダムとして、第2に室蘭特定工業地帯（室蘭・幌別・伊達・虻田・豊浦・白老）が発展していく上で必須となる工業用水を確保することを目的としたダム建設であった。計画が持ち上がった当初は、所有する農地が水没することとなる地域住民を中心に反対の声が上がったが、町理事者や農協、町議会議員の説得によって反対する地域住民の態度も徐々に軟化していき、昭和37年1月末には「ダム建設協力促進会」を設立して、ダム建設に協力していくこととなった。そして、水没する地域に居住していた住民たちが集い、離農によって離ればなれになること、また愛惜の思いが断ちがたい土地との別れを惜しむ宴が開かれた。



幌別ダム

建設計画が持ち上がったから6年の歳月が経過した昭和40年8月、ダムの建設工事が始まり、42年9月に貯水を開始され、43年4月には完工式が行われてダムは完成した。完成したダムは、いつまでも水が尽きないようにとの願いから、町村金吾北海道知事によって「不盡の湖」と命名された。また、海岸線から約2.8キロメートルと、他のダムと比較して海に近い位置にあることから、「海が見えるダム」としても知られている。そして、昭和56年10月からは、登別富士郵便局の風景印にダムの景色が盛り込まれるようになった。

昭和49年5月には、養護老人ホーム恵寿園が開設された。開設当初は、心身ともに元気な入居者が多く、園庭を手入れする際には、積極的に力仕事を担う方もいたという。また、同園の開設によって、道道弁景幌別線が、それまでは室蘭工業用水池に沿ったカーブの多い道路から、現在の路線へと切り替えられた。平成20（2008）年に同園の運営は、社会福祉法人彩咲会に委譲され、名称も「チボリの森」と改められた。そして、平成22年に富岸町に移転した後、建物は撤去された。

現在の川上町は、多くの人が訪れる地区ではないものの、昭和55年にダム横から伸びるトラウシナイ林道を利用したカムイヌプリへの登山道が開設され、市街地にも近いことから連日登山する愛好家が訪れている。そして、平成2年10月、この登山道の6合目付近に登別山岳会々員の手によって建設された山小屋「カムイヒュッテ」の落成式が行われた。カムイヒュッテは、同会が管理し、一般の登山客の宿泊や休憩にも利用されている。

#### 参考文献

- ・北海道庁『殖民公報 第41号』明治41年3月
- ・農商務省鉱山局『本邦重要鉱山要覧』大正3年
- ・北海タイムス社『北海タイムス』大正3年1月14日
- ・北海道新聞社『北海道新聞』各号
- ・室蘭民報社『室蘭民報』各号

## 第6節 登別地区

### 1 登別地区（登別本町・登別東町・登別港町）

#### 地理

登別地区は、本市の名称「登別」の由来である登別川が流れる地で、蘭法華岬の東側、倶多楽火山の火山堆積物によって形成された台地の麓に位置する。登別川とボンアヨロ川に挟まれ、真ん中を伏古別川が流れる同地区には、昭和9（1934）年の字界地番改正以前、「ボロヤチ」、「フシコヤチ」といった「谷地」を意味する字名があった。

登別駅の海側には、フンペ山（標高約60<sup>メートル</sup>）がそびえている。小さな山ではあるが、この山の成り立ちに関するアイヌ民族の伝説はテレビで放送されて、国内に広く知られた。また、頂上付近にはアイヌ民族が大漁などを祈る幣場（オンネヌサウシ）があったと伝えられ、この幣場に行くために上る空沢は、「ヌサウンコツ」（幣場・に行く・沢）と呼ばれていた。そして、主として石切場として利用されていた東側の尾根には「山神」の碑が祭られていた。

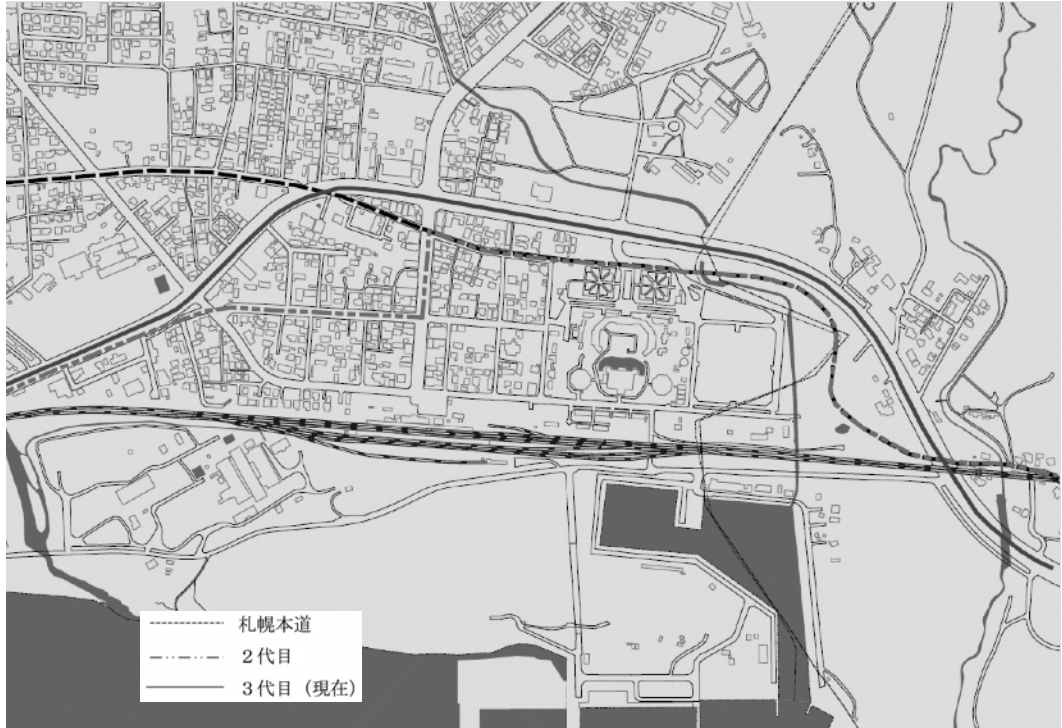
このような4方を山と海に囲まれ、湿地帯が広がる土地であったが、江戸末期にアイヌ民族が和人によつて強制的に移住させられてコタンを形成した。『幌別町のアイヌ語地名』（知里真志保、山田秀三）によると、コタンは現在の登別本町2丁目付近に位置していた。また、明治29（1896）年作図の旧版地図には、札幌本道から旧登別神社下を通つてカムイワツカ（中登別町）に抜ける道路と、伏古別川沿いに住家が点在

していた様子が記されており、現在のように平たん部に住宅が広がる様子ではなかった。

登別地区を通る国道は、明治5年の札幌本道開通から現在に至るまでに2回経路を変更している。その主な理由は、幌別方面から登別方面に向かった際に、蘭法華岬をどのように通過するかであった。本市を通る国道28号（現国道36号）は、軍用道路としての性格も有していたことから、迅速な移動を図るために、なるべく平たんな道を通ることが求められた。そこで、昭和7（1932）年に蘭法華トンネルが開通すると、蘭法華岬を上らずに海沿いを進み、登別駅前通りでそれまでの国道と合流して進むことになった。その後、なるべく市街地を通過せず、急な曲線などをもたない道路の整備が求められた。そこで、昭和40年には、改めて蘭法華岬の崖に沿つて登り、そのままつすぐ登別地区に降りていく現在の経路となった。

#### 概史

幕府によつてホロボツの支配を命じられた南部藩への引継文書には、登別地区の定住者として丑太郎、金蔵の名前を見ることが出来る。丑太郎とは登別地区で商売をしていた川村丑太郎のことで、遠く室蘭市中島町まで荷物を運んでいた。その際に同地で事故死したことから、室蘭市中島本町にある「牛太郎坂」の名前の由来となった人物である。一方の金蔵は滝本金蔵で、武蔵国児玉郡出身の大名であったが、新井小一郎が長万部に御手作場を開く際に誘われて来道した。その後、伝説では妻・佐多の皮膚病を治す方策を捜していたところ、夢のお告げによつて登別温泉を知り、本市オカシベツに移転、のちに登別地区に移住したという。金蔵は、登別温泉の開発で名をはせ



登別地区の国道のおよその変遷（旧版地図を参考にした経路を追記）

る一方で、人馬継立業を登別本町1丁目で行っていた。その地には、「滝本金藏人馬継立業の跡」として、解説看板が立っている。この場所は、目の前を札幌本道（明治5（1872）年開通）が通り、すぐそばには登別温泉に向かう道も通る、まさに交通の要衝であった。また、金藏は漁業も営んでおり、登別川沿いに水揚げしたサケの干し場の払い下げを願い出て、許可を得ている。

この登別温泉に向かう道は、明治元年にヘサンケ455番地に登別神社が建立されたことから、「宮前通り」、あるいは「宮下通り」との通称が残った。この道路を山に向かつて進むと、現在の登別伊達時代村の駐車場付近に出て、そこからカムイワツカ（中登別町）に通じた。小学校などの遠足でこの道を通った記憶を持つ市民も多いが、現在は草むしっており、なかなか通ることが難しい。

明治22年に北海道炭礦鉄道（株）室蘭線の工事が始まると、フンペ山付近に登別駅が設けられた。明治29年に製版された地図によると、登別駅の位置は登別川右岸で蘭法華岬付近に記載されているが、明治25年の開業後からの登別駅を含む近隣の停車場の推移や、営業哩数から勘案すると、登別川左岸、フンペ山の麓にあったものと考えるのが妥当であろう。この登別駅を建設するにあたっては、地盤が弱いこともあり、軟弱地盤の改良のために工事現場近くにある本市内の石山から切り出された多くの石が埋められた。また、線路の栗石としても用いられたといわれる。その後、登別軟石は、その紫紅色の色合いが、他の地域の軟石の色合いと異なることから、旧日本郵船（株）小樽支店をはじめとして、建築物の装飾として多く用いられた。

線路の敷設や建築の材料などとして、登別軟石が盛んに切り出される

と、それらを他の地域に運搬する登別駅の前は自然と賑わいを増していった。

明治42年6月、札幌石材馬車鉄道会社の助川貞次郎が、登別駅前から登別本町2丁目までの約2<sup>キ</sup>メートルに切り出した石を運ぶ馬車鉄道を敷設した。切り出した石材は雪のない時期はトロッコで、冬期間は馬そりで運んだ。運ばれてきた石材は、現在の登別港町1丁目4番地31付近で国鉄に積み替えられ、フンベ山から切り出した石材も国鉄に積まれて全道各地へと輸送されて、登別を代表する産業となっていた。盛んに石の切り出しが行われたことで、多くの職人たちが生活を送ることになった登別駅前には、様々な業種が営業をはじめた。しかし、鉄道の敷設工事終了などによって石の切り出しが一段落すると、職人たちの多くは他の土地に移住していったために賑わいが失われていった。

明治25年に幌別尋常小学校登別分校が開校し、30年には前年の河川の氾濫で鉄橋が流出した登別駅が現在地に移設されることになり、現在の駅前通りが整備された。明治21年に26戸151人だった登別村（登別温泉、中登別、富浦を含む）の人口が、同37年には203戸755人へと大きく増加した。

明治30（1897）年の登別駅の移転は、登別地区の中心を登別本町から現在の登別東町へと変える要因の1つとなった。これによって登別本町から馬車に乗って登別温泉に行っていた観光客も、登別駅から虎杖浜寄りの伏古別川を通り中登別のカムイワッカを中継点とし、登別温泉へと行くようになった。そして、登別地区の中心は、登別温泉へと向かう駅前となっていた。

明治32年、登別駅前に幌別郵便局の郵便受取所として登別郵便取扱所

が開かれた。その後、登別郵便局に昇格（明治38年）し、大正13（1924）年に駅前の旧常松食堂付近に移り、昭和36（1961）年には現在の「きつき店」付近に移った。昭和47年に「登別駅前郵便局」と改称して、昭和60年に現在地（登別東町1丁目5番地）に移転新築された（平成14（2002）年、2階部分を増築）。

登別地区の多くは湿地帯であったため、地下水が悪く飲料に適さないことから、大正3（1914）年に町の人々が共同して旧登別神社（登別本町2丁目）付近の湧水から、竹管を埋めるといった簡便な方法の水道施設を設置して、飲用水や生活用水を確保していた。大正8年には木管に改修して、途中コンクリート製の水槽と共同栓などを設け、現在の駅前通を経由して登別駅まで送水していた。町営の簡易水道が給水を始めたのは昭和25（1950）年で、全域に拡張されたのは昭和28年であった。防火用水についても、登別川から現在の中登別町64番地付近まで水を引き、春秋2回、町内会で用水路の清掃をするなど、非常時に備え管理していたという。消火栓が整備され、用水路が役割を終えたのは昭和40年のことである。



フンベ山の石切場の様子

大正8（1919）年3月20日、国道と駅を結ぶ道路が出来たことで市街地を形成しはじめていた登別地区で、登別駅前の中心街から出火、31戸が焼け出されるという大火事

が発生し、住民の心は大きく沈んだ。同年、栗林徳一が「株式会社登別製銃所」を、現在の登別マリノパークニクスが建つ場所に建設し、あわせて職員16名の住宅5棟、職工54名の住宅6戸建て5棟、合宿2棟を建設し、登別地区全体の3分の1が焼失して元気をなくしていたまちに生氣を呼び戻した。しかし、製銃所は長く続かず、その跡地には(株)日本製鋼所が「ピッチコークス工場」を建設した。昭和18(1943)年5月の米国潜水艦ステイルヘッドによる艦砲射撃は、このピッチコークス工場を目標としたのではともいわれた。同工場も長くは続かず、登別地区における安定した工場誘致はアジア・太平洋戦争の終戦を待たねばならなかった。

幌別村や鷺別村が室蘭市の影響を受けて街並みを変えていったように、登別村は登別温泉の影響を受けて街並みを変えていった。特に影響があったのは、登別温泉の観光客入込数であった。当初の輸送方法は、馬車に観光客を乗せて登別温泉までの送迎をしたと伝えられているが、日清・日露戦争で傷ついた人々の療養の場所として全国に名を知られ、人気を博すと交通手段も進化した。しかし、道路事情が悪かったことなどから馬車の転覆事故も起こったため、観光客からは人気が乏しかった。そこで、大正4(1915)年に線路の上を走る馬車鉄道が開通した。その後、輸送力の増強を図るために、大正7年に栗林五朔によって蒸気機関車に転換された。しかし、蒸気機関車はき出す火の粉によって沿線に山火事が多発したことから、大正14年には電車へ転換された。昭和になるとバス事業も本格化し、木炭自動車などで昭和18(1943)年頃まで観光客を輸送し、温泉人気が衰えることはなかった。

当時の風物詩として岩原秀夫は、登別温泉目当てに登別駅を降りた観

光客のバスの待ち時間があるとき、登別温泉から芸者衆を呼び、駅前広場で三味線や太鼓の音曲で観光客を退屈させないよう努力していたことを記載している。また、木炭自動車で登別方面や室蘭方面へ向かう学生が大勢乗り込む朝の通学バスは、たびたび観光客にとつて円滑な帰宅を妨げるものとなった。そうしたとき、観光業に携わる者から、学生達に「登別温泉は、観光客の方々に来訪してもらっていいことで町も繁盛し、君たちの学生生活も成り立っている。混乱を鎮めるため、学生諸君には一時待ってもらおう訳にはいかぬだろうか」との呼びかけがあった。学生達はそれに応え、喜んで観光客に席を譲ったという。

登別地区で合併、分村に関する住民運動が最初に起こったのは明治30(1897)年で、白老にも幌別にもどちらにも所属していない、いわゆる「無所属部落」の問題だった。白老村側と協議し、飯島太市が居住する地区(現在の「わかさいも本舗登別東店」を挟んだボンアヨロ川沿いの一帯)を幌別郡に編入することとなった事件である。飯島太市は、白老村アヨロ(現虎杖浜)の有力者の人々とも話し合い、滝本金之助などにも仲介を頼み、「中登別」に編入させることに成功した。

飯島太市をはじめ関係者がこの件で一番喜んだのは、子ども達の通学問題であった。これによって、長い時間をかけて白老の小学校に通わずに、登別の小学校へ通えることとなり、通学時間が大幅に短縮されたのである。滝本金之助もまた、これらの境界問題に尽力する目的の1つには、やがて虎杖浜や俱多楽湖を登別の行政区域へ加えていきたいという希望が隠されていたようである。

そうした希望が現実のものとなって、大がかりな住民運動を展開して行政に迫ったのは、昭和2(1927)年3月22日の登別温泉・登別・

蘭法華・カールスの各部落が結束し、「登別に役場を移転すべし」と決議したときのことであった。登別地区、登別温泉地区の人々の主張は、幌別村の人口が1千816人なのに登別村は3千225人、納税額も幌別村と登別村をあわせて1万645円であるのに対して、登別村は1万9千275円という差があり、登別村こそが幌別村の中心地であるのに役場も遠く、観光業などの事業推進の時に手続きが遅くなって、十分な効果を果たすことが出来ないなどから、役場の移転を強硬に主張したのであった。5月1日には、役場移転の是非も論点となった村会議員選挙も行われ、幌別派6名、登別派6名の同数が当選した。しかし、この騒動は、次の理由をもって棚上げされた。

・移転費用に1万3千250円という巨費を投じなければならない(当時の村の税総額は3万2千円程であった)。

・村議会の全会一致で登別温泉を国立公園化しなければならなかった。

昭和11年頃に、日鉄輪西製鉄所が戦争による鉄の需要増大に応じ、倶多楽湖からの引水計画を要望した。すると、登別温泉出身の議員は「登別温泉の源流と考えられていた倶多楽湖の水が無くなるのではないか」という危機感から、「倶多楽湖の問題は温泉の盛衰に関係する。幌別村の行政区域とせよ」との意見書を提出した。このため、昭和13年11月に「室蘭市都市計画協議会(現審議会)」が富岸地区よりも西側の地区の室蘭市への編入を決定し、室蘭市が幌別村との合併を申し出たのを機会に、登別温泉、登別、カールスの3地区に白老村アヨロと倶多楽湖を編入して、一大観光村を創設して分村せよという運動が起きた。

翌年以降、村議会などでは激論が交わされたが、アジア・太平洋戦争

の勃発など世情が不安定であったことや、肝心の室蘭でも実現に向けた運動が盛り上がりせず、ここでもこの問題は自然消滅した。

戦争が終わって敗戦の苦しみ心に痛めながらも、新時代の息吹を感じ始めた昭和21年12月9日、臨時村議会が開催され、再び「幌別村分割に関する意見書」が提出された。第1案は、昭和14年の分村化運動と同じ流れの登別温泉とカールスを幌別村から分割する内容であったが、第2案は第1案に加えて富浦・登別・中登別が分割範囲に含まれていた。登別地区出身の議員は、このとき登別漁港の築設問題を優先して積極的な関わりを避けていた。短期間のうちに、各地区の町民大会や村議会では白熱した議論が行われた。そして、昭和22年3月16日の村議会では第1案に中登別の約半分を加えた「登別温泉地区」を分村することが、1票差で可決された。

しかし、

・戦後の混乱期で時期尚早であり、機は熟していない。

・分村後の母村側(鶯別、幌別、登別地区等)の財政状況が良好とはいえず、自立はとうてい困難である。

という理由から、杉浦村長代理は道庁長官への「分村に関する上申書」を提出する際、慎重を期したことで分村は回避された。

昭和33年、再び熊谷室蘭市長が新年の記者会見で、幌別町との合併推進を表明した。しかし、今度の呼びかけには、今まで分離分村の急先鋒で、登別、登別温泉地区で独立を目指そうとしていたグループに微妙な変化が生まれていた。幌別、鶯別、登別、登別温泉地区の4地区をあけて、町から市へと自立し、人口5万人以上の中堅都市を目指すという大目標が掲げられ、分村合併には慎重派が大勢を占めるようになっていった。

また、そうした雰囲気の後押しするように、昭和35年11月、町議会に「幌別町から登別町へ町名を変更する」動議が提出され、翌36年1月に賛成23、反対2の圧倒的多数で可決された。登別地区の人々にとつては、「我が登別町」が「町」そのものの名前になったと溜飲を下げ、室蘭市との合併に本市の将来を託す声が増えることはなかった。そこには当然、「鉄鋼産業の都市として成長する室蘭市の風下に位置することになるような吸収型の合併は拒否する」という意志も強く働いており、北海道でも有数の観光資源を有するまちが、我が登別温泉であるという矜持は極めて高かったと思われる。

登別駅前には、天井に開いた穴から月が見えたことから「月見館」と呼ばれる映画館もあり、昭和40年代に一気に普及したテレビにその座を奪われるまで、貴重な娯楽施設として親しまれた。また、登別地区を2つの区域に分けた運動会なども開催されており、プログラムの1つ仮装行列などを懐かしく語る古老もいた。

そのような中、昭和36年度に現在の鉄南ふれあいセンターの場所にあつた役場を鉄北の幌別小学校横（中央町6丁目11番地・現在地）に移転するという話が持ち上がった。すると、今まで室蘭市と合併する意志のなかつた鉄南地区の住民が、室蘭市との合併問題を推進してでも役場移転は反対するという姿勢に転じた。

ところが、室蘭市長、市議会一行が正式に合併を申し入れに来る昭和36年6月23日の前日に大事件が起きた。登別町収入役の800万円に及ぶ公金横領事件が発生したのである。この処理を優先するため来訪は一時延期となり、7月13日に改めて室蘭市長は岩倉町長へ合併を正式要請するため訪れた。

合併推進者は、その時点で鉄南地区の住民と鷺別地区の一部住民で「合併新聞、合併促進号外」などのチラシをまいて、運動の拡大を図つた。合併反対者は登別温泉地区の住民を中心に、カルルス・登別・幌別・来馬の一部を含めて、請願書を市議会へ提出した。

しかし、この論戦も10月6日に甚大な被害を及ぼす大雨災害が発生したことで、その対応に追われて一気にかすんでしまい、昭和38年に実施された地方統一選挙でも喫緊の課題ではなくなつていた。

昭和38年には伏古別トンネル付近でボーリングに成功し、登別温泉、カルルス温泉に続く第3の温泉として、伏古別川を挟んで虎杖浜と登別の境界に「臨海温泉郷」が出現した。昭和40年代に入り、本市と白老町との境界近くの国道36号沿いに「臨海温泉旅館」、「登別臨海ファミリールランド」「登別臨海温泉ホテル」などが続々と建設された。臨海温泉は、入浴料等が比較的安価であつたこともあり、当初は人気であつたが、昭和56年に発生した三陸沖地震の影響などから施設の修繕費がかさみ、同年に臨海温泉ホテルが、昭和62年には臨海温泉旅館が廃業・閉鎖を余儀なくされていった。

そして昭和39年には、観光玄関口の環境整備を進めるため、登別駅前通りの拡幅工事が行われ、駅前にはバス停や駐車場が整備された。地域住民のための公共施設整備として、昭和41年には登別支所、消防支署、公民館の合同庁舎が完成し、登別地区も都市的な市街地としての体裁が整えられていった。

観光城下町らしく、市街地の中心的な建物はやはり「登別駅」で、多くの乗降客で賑わうばかりではなく、特急列車が停まる駅のホームでは、発車のベルが鳴り響く中、駅弁を販売する売り子と乗客の巧妙なやりと



りが名物となり、忘れられない風物詩の1つとなっていた。(有) 登別駅構内立売商會が販売した「のぼりべつ洋寿し」は、その当時のヒット商品で、昭和35年から販売が始まり、握り寿司のシャリにハムやチーズ、ポイルした海老などのサンドウィッチに使うネタを具としてのせたもので、あつさりとした味が評判であった。

登別地区は、本市の重要な産業である「観光」の玄関口として重要な1地区であるとともに、新興住宅街としても進展していくことが望まれ、室蘭と登別の合併問題は息を潜めていった。

登別地区は昭和49年の町名地番改正によって、現在の「登別東町」「登別本町」「登別港町」の3地区に命名されることになったのだが、この経緯が記された『登別東町第5町内会30年誌』を見ると、同町内会の発足は昭和53年4月1日で、まだ町内会が結成されていなかった昭和36年当時は、雑貨店を営む小原近雄以外には、千葉、大塚進、平沼、三上などが点在する6戸程度しか居住していなかった。当初、登別地区を3地区に分けるにあたり、本市の原案では、3地区それぞれに「旭町、大手町、円山町」とするものであった。しかし、それまでの登別地区全体を指す「登別町」に強い愛着を抱いていた地域住民も多く、住民説明会の段階では、「市の名称を「幌別市」としてでも、「登別町」を残して欲しい」との意見も出された。話し合いが重ねられた結果、市原案を「旭町」を「登別港町」に、「大手町」を「登別東町」に、「丸山町」を「登別本町」に修正することとして、地域住民の同意を得ることができ、昭和49年4月1日から施行された。

平成11(1999)年から始まった「平成の大合併」では、再び分村合併問題が再燃した。平成14年頃から熱を帯びて合併問題が語られ、「青

年会議所」の若者たちによる室蘭市との「法定合併協議会」設置の動きがあったものの、本市内の町内会、各団体、企業とも自立の道を継続するという意向が強く、幾度となく起きた分村、独立、合併論議の中で、1番合併反対の意向が強い結果となり終息した。

昭和から平成と移りゆく間に、本市は人口5万人の中堅都市として成熟し、観光を主力とする登別、登別温泉地区と工業を主力とする鶯別、幌別地区という対立軸が失われ、「一体感のあるまち」へと変化していったのである。それぞれの地区との間に競合がなくなり、新興住宅街に暮らしていく市民の多くに、自分たちが築き上げてきた「我がまち」という愛着が強まっていったものと推測される。

沿海の水産資源の減少から、沖合漁業に転換するにあつたの漁船の大型化は避けられず、それらの漁船が停泊するには漁港整備が欠かせないという意向を持っていた。このため、石材業の推進はもとより、戦前から伏古別川河口付近の漁港の築設要望が20年以上にわたって行われてきた。そして、長年の努力が実り、昭和25(1950)年に着工した。その日は地元小中学生の旗行列でお祝いするほどの喜びようであった。修築された登別漁港は、胆振東部・日高地方沿岸の唯一の避難港として海難事故を防いできた役割は大きいものがある。また、白老、虎杖浜、登別の3漁組が共同で漁港を利用していた。地域になじんだ漁港で、昭和52年から「登別港まつり」が始まり、翌年には「登別漁港まつり」という名称になり、サケの手づかみ合戦や歌合戦などが行われ、漁港に大漁旗と歓声があふれる秋の祭りとなっていた。平成14(2002)年には第2種漁港から第3種漁港へ昇格し、国の直轄事業として整備が行われている。また、これらの地域の取組の1つとして、登別漁港で水揚

げされた水産物を直売する「海鮮直市」がJR登別駅前で開催され、周辺地域の方々から人気を集めた。

登別駅横には工場が進出し、北海道コンクリート工業(株)(昭和32(1957)年旭コンクリートから改称)が登別川沿いに建ち、北海道内の鉄道電柱などを生産し、本市を代表する企業として成長していった。

また、現在「登別マリニクス」が建つ場所には、戦前は「登別製銃所」、その後は(株)日本製鋼所のピッチコックス登別工場となり、昭和32年1月には井華塩業(株)が進出してきた。しかし、製塩工場は昭和35年5月に国内における塩の生産過剰のあおりを受け、再び撤退した。長らく地区の産業中心地となるべきこの跡地が復活を遂げるためには、昭和が終わった平成2(1990)年まで待たねばならず、観光都市登別を印象付ける「登別マリニクス」という海洋水族館となつて華麗なリニューアルを果たすことに成功した。

それまで、工場や鉄道関係の社宅や公営住宅、登別温泉の観光施設で働く人々の一般住宅などがあり、閑静な住宅街を形成して産業振興は次の次となつていた登別地区は、大きなプロジェクトが実現され、観光周遊エリアとして見直すべき必要性が高まつていった。昭和60(1985)年には札幌と登別間を1時間30分でつなぐ高速道路が本市まで延伸した。登別地区の事業者や町内会、企業などの関係者が集まり、これからの登別の街づくりをどのように進めていくべきかを協議するため、「登別まちづくり期成会」が立ち上げられた。同期成会に集まった若手商業1一度の夏祭り「フラワーパレットのぼりべつ」を企画実施した。登別マリニクスがオープンした平成2(1990)年の第1回は、駅前通りで行われたが、その後は会場を変え、現在はマリニクス

ス前の都市公園「登別ビーチパーク」で開催することとなった。そこで知恵を絞り、「わくわく広場」と名付けたイベントを開催、大道芸としてのサーカス(シルク・ド・ソレイユ)やプロレス、千人鍋、フンペン散策などのイベントを行い、まちの活性化に努めている。

平成4年、登別温泉を訪れる観光客は400万人を超え、特にゴールデンウィークの時には、登別伊達時代村、天華園などのテーマパークも同時期にオープンし、大勢の観光客であふれかえり、登別駅前から登別温泉に向かう国道交差点は自動車行列をなして渋滞した。しかし、その翌年からはバブル景気が崩壊したことも影響して景気が低迷し、登別マリニクスも入場客の減少に悩まされる時代が続くこととなった。

平成12年、本市は民間の大胆な経営再建策に賭け、第3セクター方式を解消して、のぼりべつクマ牧場を経営している加森観光(株)に再建を託した。加森観光(株)は、ペンギンの散歩やイワシ1万匹の銀河水槽など、新たなアトラクションを企画するなどして次第に顧客を増やし、台湾への誘客活動も積極的に行うなど、単年度収支を黒字化していった。この時代は経済状況が厳しく、多くの企業や商店が前年度と同程度の売り上げを確保することができず、経済状況は停滞気味であった。登別地区の中心街で消費者の購買力を担っていた「プラザさいとう」が、営業不振となつて平成12年1月に閉店し、この店舗を旭川軌道(株)が買い取り、同年9月に「旭友ストアー登別店」として開店した。同店は、平成22年3月に閉店し、その翌月からは、「コープさつぼろのぼりべつ東店」となり、現在に至っている。

登別地区の医療施設は、終戦後間もなく「鈴木診療所」が開院し、昭



JCHO登別病院

和24（1949）年には「狩野医院」も開院した。昭和49年には、登別温泉で温泉治療の研究を行っていた「北海道大学医学部附属病院登別分院」が、登別東町に移転開設された。しかし、それらの施設が次第に閉鎖されはじめ、いつしか登別地区は医師のいない無医療地区へと変えていった。本市の懸命な医療者確保対策が実り、平成9（1997）年10月に四十九院正道医師が仮診療所で診療を開始し、翌年11月「登別東クリニック」を開院した。そして、一時は閉院とまでいわれた「JCH O登別病院」（旧登別厚生年金病院）が、関係者の努力によって令和2（2020）年4月に登別東町に移転開院した。

平成18（2006）年4月には、迫り来る高齢社会に備えるため、国道36号と道道洞爺湖登別線に面した交差点横に、医療法人社団登別千寿会が地域包括支援センター「愛桜（あおい）」を開設し、社会福祉士や

介護支援専門員、保健師を常駐させ、地域の高齢者が安心して地域で暮らしていけるよう、介護予防など様々な面から支援をしている。

登別地区は玄関口に「登別マリパークニクス」というテーマパークがあり、登別温泉へと通じるバスターミナルがあることから、単なる働く人たちのための新興住宅街には取まらない街の形態となっている。これが独特な個性を発揮する街並みを形成しはじめてもい

た。平成23年、登別本町2丁目に知里幸恵の遺品等を展示する「知里幸恵 銀のしずく記念館」がオープンしたことは、大きなインパクトを与えた。そのほかにも個人の力によって、北海道を代表する画家の1人、野本醇の作品を展示する「北の箱舟美術館」が平成13年からオープンした。デジタル以前のアナログフィルム時代の貴重な映像機材を展示する「登別映像機材博物館」（平成25年開館）、埋もれるお宝を展示する「古趣北乃博物館」（平成26年開館）など、相次いで博物館的な文化施設が開館し、企業ではなく個人々の意欲によって、じつくりと街中を散策するための場所が整いはじめ、観光周遊ゾーンを作っていった。登別地区に続々と誕生した文化施設はすべて個人の努力によるもので、国、北海道、本市などによる助成はない。このため、それぞれの施設は個人の志を最大の柱として、入館者の来場を待つこととなった。

また、東日本大震災後、低迷していた観光客の流れにも変化が生まれ、徐々に台湾、韓国などのアジア人観光客が増えはじめ、平成22年7月に中国人を対象にした観光ビザ発給要件が緩和されたことから、中国人観光客の来日が増加し、大勢の中国人客が登別駅前に押し寄せ、変化せざるを得ない状況が作られはじめていった。

登別温泉を訪れるアジア系の観光客の増加によって、否応なく街並みに変化が生まれていた登別地区は、近年再び変化の兆しを見せはじめている。特に平成の終わりにかけ、登別駅は特急電車が停まる度、大きなキャリアバックを抱えて降りる中国人客が20人、30人と数えるほど増えてきた。登別駅から登別温泉までは10分ほどかかり、道南バスに乗りかえることになるのだが、このバスが乗客と大きなキャリアバックを乗せなければならず、すぐに満席となるため、バスを増発して運搬するほど

の盛況ぶりとなった。特に中国の旧正月である春節の時期には、JR登別駅の中に入りきれぬ観光客が外にはみ出して並ぶほどの賑わいとなっていた。このため、観光業に従事する人々からは、大きなキャリアバックを抱えて降りてくる観光客や障がいを持った方々、高齢者の方々のために優しい駅となる必要があると、積極的にエレベーター設置の活動を強めていった。事業費として、おおよそ8億5千万円が予定されるこの事業は、令和2（2020）年4月から入湯税を150円から300円に値上げする措置を講じて、財源を確保して進められようとしている。駅前には平成30（2018）年にゲストハウスができ、新しい食堂もオープンするなどの変化も生まれている。平成29年には、ホームセンター「ホームックニコット登別東店」がオープンし、これも駅から歩いて5分の距離にあり、多様な商品提供により消費者を喜ばせることとなった。そこに隣り合つて、令和2（2020）年4月から「JCHO登別病院」が開院することとなった。本市のほか白老町からの来院者も多いため、登別温泉から移転することで交通の利便性が確保されるため、利用者の増加が想定される。これによって、登別温泉地区に向かう通りの街並みが利便性を増し、多くの人が歩行する中心街的な通りへ変わらうとすることも期待される。

登別地区の施設の統廃合問題で、最も大きな課題として捉えられているのは、現在、多くの人々が行き交う登別駅前のアクセス改善のため、令和4年にJR登別駅前横に「(仮称)登別市情報発信拠点施設」をオープンさせ、登別駅前を登別観光の玄関口として再生させる計画である。令和元年7月発表の「(仮称)登別市情報拠点施設のあり方」によると、2階建てのこの施設は、公民館、支所を統廃合するとともにJR登別駅

に直結し、1階は諸外国からの観光客に対応して多様な観光メニューを提示できる観光総合案内所となり、登別支所の事務室も置かれ、2階には多目的ホールや会議室が置かれる予定である。これは、今ある公民館、支所機能を新施設に統廃合させるとともに、婦人センターも使命を終えて廃止される予定である。また、新施設では本市を訪れる観光客のために、地場産品や観光土産品を販売する売店も設置される予定で、「道の駅」的な役割も担うことが期待されている。

登別地区は、登別を代表する文化人「金成マツ、知里幸恵、知里真志保」が育つた地区でもある。滝本金蔵と一緒に登別温泉に観光客を馬車で運んだ知里波エ登の息子「知里高吉」は滝本金蔵にかわいがられ、読み書きそろばんなどの実学を学んだといわれている。

知里幸恵や知里真志保たちの父・知里高吉は、資格こそ持っていないが「馬」の扱いも熟知しており、彼に馬を治療してもらった人は多く、馬の種付けなどで頻繁に出かけていた様子が妻・知里ナミの日記に記されている。また、彼は造園、造林などにも優れ、登別地区の公園造成などにも優れた技術を発揮したといわれている。現在、登別には造園業者は多くいるが、その先達は彼であったといわれている。知里高吉は日本語に堪能なばかりではなく、日本文化を愛し、生活にも日本の慣習を積極的に取り入れていたという。子ども達に新進の学問を学ばせようとしたのもそうした気概の表れであろう。妻のナミもまた、文化的素養の高い女性で、ジョン・パチラーの薫陶を仰ぎ敬虔なキリスト教徒であった。知里高吉とともに高齢になった金成マツを自宅に引き取り、金田一京助の財政的援助も受けながら、離れに一軒家を建て、彼女のライフワークとなったユカラの執筆を助けたという。

知里真志保はアイヌ語の研究から出発して、アイヌの慣習や文化全般について研究を広げ、文化人類学、民俗学、言語学などへと学問の範囲を大きく広げていった。

その彼の業績を称え、同期生や同窓生、地域の人々によって昭和48(1973)年、「銀のしずく降り降れ降れまわりに」と刻まれた顕彰碑が登別本町3丁目のハシナウシの丘に建てられた。これは生前、彼が「海の見える川の丘に住みたい」と話していたことから、彼の希望に添って選ばれた場所であった。

現在、その顕彰碑は本市が管理できる公共の場所へ移設することとなり、平成8(1996)年に彼が通った登別小学校の庭へと移されることとなった。

知里真志保の碑は、何かの因縁に導かれるかのように登別小学校の庭へと居住地を移していったが、そのことを暗示するかのよう16歳の知里幸恵は、大正9(1920)年5月に旭川から母のナミに宛てた手紙で、次のように記している。

登別の春はどんなにかきれいでせう。登別の海はどんなにかのどかでせう。春雨のソボソボと降るその景色も何なに美しいでせう。うらかな春の日を浴びながら遊んである高央の面影を胸に浮かべて、どんなに大きくなったかと思ふてなつかしくてたまらないので御座います。景色のいいあの小学校の校庭で元氣よく飛びまわつてゐる真志保のすがたも目に浮かびます。(中略) 私は海が懐かしくなりませぬ。

参考文献

・登別町『登別町史』昭和42年

- ・登別市『市史ふるさと登別』昭和60年
- ・知里真志保・山田秀三『幌別町のアイヌ語地名』平成16年復刻版
- ・北海道新聞社『北海道新聞』各号
- ・室蘭民報社『室蘭民報』各号

## 2 富浦地区(富浦町)

### 地 理

富浦地区は、東に蘭法華岬、南は太平洋に面し、西はモククンナイ付近で1番幅の広い沢から流れる用水路、北は札内大地の1部の区域に相当する。地区の中心は国道36号が横断し、それよりも海側、特に富浦町1丁目は水産業のまちとして発展し、山側は札内地区と同様に酪農業や畜産業が行われている。



現在の富浦町の町並み

蘭法華岬には、「七曲りの坂」と通称される険しい坂があり、それを降りたところにコタンがあつて、そのコタンを「ランポク」あるいは「ランポツケ」といった。のちに範囲が拡大されて、地区の呼称となった。昭和9年の字界地番改正の際に、「漁業の豊かな入り江」になることを願つて「富浦」と命名された。この字名は、昭和49年の町名地番改正においても引き継がれ、「富浦町」となった。しかし、

旧名の「ランポッケ」に対する地域住民の愛着は深く、現在も商品名などに用いられている。地域住民に話をうかがうと「昔、蘭法華と呼ばれた地区で」などの言葉が出てくる。また、地質学的にも倶多楽火山の火山堆積物の層は、「らんぼつけ」に由来して「ランボーゲ層」と命名されている。

この地区の海岸は、農林水産省所管の農地海岸に指定されており、「背後の優良な農地とそこで展開される農業生産活動を守り、地域の活性化を図るきわめて重要な役割」（農林水産省ウェブサイト「海岸事業」より）を担うことが期待された海岸である。

蘭法華岬の先端には岩礁があり、そこにはコンブ場が広がっている（第4回、第5回藻場調査）。蘭法華岬に囲まれた緩やかな湾は、遠浅が広がり、船揚場としてのほか、海水浴場として多くの人手があつたが、湾内に堆積した砂を浚渫したことによって水深が深くなり、また、交通事故が多発したこともあつて、海水浴場として利用されなくなった。

### 明治期以前

現在の室蘭方面と苫小牧方面とを往来する際、札内台地から蘭法華岬にかけて伸びる台地は、それまで比較的平たんな道のりを旅行してきた旅人にとつて、「七曲りの坂」と呼ばれる急な坂は交通の難所であつた。そのこともあり、享和2（1802）年には、トンケシとともにランポッケに小休所が設けられた。松浦武四郎は『東蝦夷日誌』の中で小休所について、「ここホロベツより出張、茶を煮る」と記しており、常駐の管理人は当初置かれなかつたようである。また、小休所からの眺めについても、「上り平地、下崖にて、下を臨ば白浪撃レ岸、西を眺ば会所元よりエトモ岬・内浦岳、其景恰も薩埵

峠にて富峰を如レ見。」と記し、景勝の美しさを称えた。明治3年8月付けで片倉家が開拓使に提出した書類では、アイヌ民族の耕作地として「畑地一町六畝二十分ランホッケ山中」とあり、札内地区へと続く富浦地区の高台で、アイヌ民族が耕作を行つていたことがわかる。

本州方面から移住してきた和人が、富浦地区で生活をはじめたのは、片倉家旧家臣団の遠藤震三郎、佐野源蔵、松本周治など11人が移住してきたときと伝えられる。明治5、6年頃には、佐川寿治、小野寺万吉、高橋武治、斎藤吉蔵、北原三郎、伊沢林治、大野勇治の7戸が蘭法華に移住してきた（『幌別郡之内蘭法華登別屋敷図』）。最初に移住してきた遠藤震三郎は、明治7年から8年にかけて幌別郡副総代、8年から11年までは幌別郡総代を務め、漁業で成功した様子は「ランポッケの殿様」とまでいわれた。遠藤家の家屋は、のちに宮武新吉、村上三次郎と所有者は移り変わったが、大きな建物であつたことから、周りを農地と海に囲まれた富浦地区で「村上家から何メートル」のように、場所を示す際の日印ともなつた。

佐川たちが移住してきた明治5年、開拓使は箱館札幌間を結ぶ道路「札幌本道」を開通させた。工事責任者の平野弥十郎は、工事区間における3か所の難工事の1つとして富浦地区の工事をあげている。馬車道として整備するには傾斜がきつすぎるため、発破をかけながら切り通しを造つて道路を開削していった。この道路は、明治14年に明治天皇が北海道巡幸を行う際の本市内での経路となつた。登別小学校側から室蘭方向に向けて坂を上りはじめた際、急な坂に馬車が登つていくことができず、近隣のアイヌ民族が馬車を後ろから押して登り切ることができたとの逸話が残っている。発破によって傾斜を緩やかにしても、その角度の

急さが想像できるう。

坂を登り切った明治天皇は、現在の富浦墓地付近に臨時で設けられた小休所で休憩をとられ、坂下から汲んだ湧き水で喉を潤わされた。小休所の側には、このときのご巡幸を記念した「駐蹕之碑」が建立されている。同碑は、当初木製であったが、明治44年に皇太子・嘉仁親王（のちの大正天皇）が行啓されたことを記念して石碑に作り替えられ、のちに日本製鋼所の会長になる山内万寿治が揮毫した。また、喉を潤わされた湧き水は「御膳水」と命名されて、令和2年の現在も尽きることなく水が湧き出ている。

巡幸の翌年、斎藤吉蔵が蘭法華坂下の住居脇に小休所を建て、管理人となった。明治16年3月には、讃岐国（現香川県）から山下茂市がモセウシ（ランボツケから幌別寄り）に入り、漁場を開くかたわら農業にも従事した。これから後、近井悦次など10余戸が移住をした。翌17年には松浦寿太郎が同郷の井上寅吉、吉原新七を呼ぶなど、四国方面の人々が次々と入植することとなり、現在の富浦地区の基礎が固まっていく。

明治24年1月、北海道炭礦鉄道が進めてきた岩見沢室蘭間の鉄道敷設の一環として、蘭法華トンネルが完成した。同トンネル工事前には、岩盤をくり抜く必要がある難工事と考えられたが、実際には蘭法華岬の内側は堅くなく、予定よりも早く貫通することができた。このときのトンネルは、現行のトンネルよりも海側に位置し、昭和55年7月に室蘭本線が電化するまで使用された。

明治33年6月、富浦地区の守り神として富浦神社が創建された。同社には当初、豊穰の神とされる「保食神」が祭られ、その後に「金比羅大神」が合祀された。

明治期に富浦地区に住む児童は、七曲りの坂を登る。または、潮が引いているときに蘭法華岬の先端を回ることで、登別地区に出て通学することが多かった。しかし、どちらも危険な道であったことから、富浦地区の保護者の間では、同地区に学校を設置することが熱望された。これを受けて、明治44年2月に蘭法華特別教授所が設けられた。念願の学校であったが、通学する児童が少なかったこともあり、2年後の大正2年2月には同特別教授所が廃止され、登別尋常小学校に統合された。同地区への特別教授所の設置については、大正12年2月に議論されたが、設置には至らなかった。

### 大正・昭和期

大正期の富浦地区は、漁業に従事する若者による青年団活動が盛んであった。地区対抗の陸上競技会開催の折りには集落をあげた応援合戦がなされ、常に賑わっていた。

昭和6年、札幌本道と同じ経路をたどっていた国道28号が、富浦地区の入り口から海側を通る経路へ切り替え工事が始められた。同路線は、東京市と第七師団司令部所在地を結ぶ軍用道路として位置づけられており、それまでの経路よりも高低差が少ない海側への切り替えが計画されたものであった。しかし、海側に切り替えることにより、富浦地区の漁業者が船揚場として利用してきた海岸が道路に転用されることとなり、同地区の漁業者からは当初反対の声が上がったが、改めて船揚場が建造される予定であるとの説明があり、反対していた漁業者も同意して工事が進められた。同年7月には氏家義五郎（夕張市）の請負により、蘭法華隧道（現蘭法華トンネル）の工事が開始された。着工後約1か月で導坑が貫通し、その後も工事が進められて、昭和7年3月に完成した。

昭和9年、幌別郡内の字名地番改正が行われ、「蘭法華」は「漁業の豊かな入り江」になることを願って、「富浦」と命名された。この改正によって、字富浦の区域は現在の富浦町の区域に、サトオカシベツ川以東の区域も編入された。

昭和7年、蘭法華漁業組合が設立され、富浦海岸で投石事業やホッキ稚貝の養殖などを実施した。4年後に同組合は鶯別・幌別の漁業組合と統合し、幌別漁業協同組合となった。漁港整備も行われ、昭和9年には南防波堤が完成したが、その後の漁港整備は戦時中ということもあり中断された。

終戦間近にはアメリカ軍との本土決戦も噂され、富浦地区にも蘭法華岬などに多くの防空壕が掘られた。鈴木梅治（登別本町）の聞き取り調査によると、「父と一緒に掘った」「空襲で壕に家族と逃げ込んだ」という話もあった。また、日本製鉄（株）



富浦神社横に立つ魚霊碑・海難殉職者慰霊碑

の資材の待避場所としての壕も掘られた。戦争の影響は戦後も続き、昭和22年6月、富浦沖合に出漁した漁船が残存していた機雷に触れ、5名が死亡する事故があった。昭和25年にもサケ・マス流し網漁に出た漁業者が、浮遊機雷に触れて4人死亡する事故が発生した。

昭和27年に富浦漁港が第1種漁港の指定を受け、戦時中から長く中止となっていた漁港整備が再開

され、昭和31年に完成した。また、昭和28年12月には、駅員無配置ではあるが、地域住民待望の富浦簡易停車場が設置された。

こうしてまちの基盤整備が進められ、順調に発展していくことが期待されたが、地域の主要産業である水産業に大きな影響を与える出来事が起こった。

主として沿岸漁業に従事していた本市の漁業者であったが、昭和20年代中葉から不振が続くようになっていった。特に昭和24年頃から水揚げの約8割を占めていたイワシやサケの定置網漁が、回遊する魚種の減少で不振となった。これに暴風雨によって漁網などへの被害も発生し、幌別漁業協同組合は経営不振に陥ることとなった。

そのため、組合員は一丸となって経営再建に取り組むこととなり、昭和28年には幌別漁業協同組合が第1、第2、第3幌別丸を建造し、沖合漁業に転換することとなった。

昭和40年から「のぼりべつ丸」に変わり、昭和46年には岩手県大船渡市で建造した「第2のぼりべつ丸」が進水し、北洋のサケ・マス漁、西太平洋のカッコ・マグロ漁で活躍した。昭和37年には富浦漁港内に共同荷捌き場が建設され、この頃には、それまで人力や馬で巻き上げていた船を動力に切り替えて、生業である漁業での収入増加を目指した。

日常生活面については、家計においても、日々のやりくりから捻出したお金を積み立てる「日掛貯金」を実践して、経済的な面での安定化を図った。そのような苦しい状況の中で、昭和34年7月に住民一丸となつたまちづくりを進めることを目的に富浦町内会を結成し、その婦人会が町内の美化に積極的に取り組んだことも評価されて、昭和35年に富浦婦人会が胆振支庁長から表彰を受けている。また、戦前から続く封建的な



しきたりや冠婚葬祭における贈答習慣などを見直すことを目的に、鳩山一郎総理大臣が提唱していた「新生活運動」に町内会を中心に積極的に取り組み、昭和38年には北海道からモデル地区の指定を受けた。昭和40年には「富浦婦人消防クラブ」が結成され、火事のない安全で暮らしやすい地区を作り上げていった。

これにあわせて行政もまちづくりの充実に努め、昭和37年には富浦へき地保育所を開設し、昭和43年には開町百年記念事業の一環として、神社横に富浦生活館を開設。44年には、富浦墓地に新区画を造成した。その翌年の昭和55年には、桜木町にあった「北海道胆振家畜保健衛生所」が富浦町に移設された。昭和56年には、「富浦児童館」も開設した。

まちづくりが進められる中で、水産業が主であった富浦地区に新たな産業が起きた。明治14年の明治天皇御巡幸において、同地区の湧き水を休憩されている明治天皇に差し上げたのは前述のとおりであるが、その湧き水を利用した「ミネラルウォーター」の製造が昭和46年8月に開始された。同製品は、カルシウムやマグネシウムの成分が少ない軟水として人気を博し、北海道内や東京方面などにも出荷された。しかし、その後は製造販売などを行っていた北海道ココロ・ボトリング（株）が、環境問題への消費者意識の高揚に対応して薄型ペットボトルを製造できる札幌の子会社に生産を集約するために、北海道飲料（株）を解散することとなり、これに伴って平成20年12月末で製造が中止された。令和2年現在、工場施設は撤去されたが、御膳水の碑や工場設立の記念碑、「恋泉大明神」の碑といった湧き水を記念した石碑類は現存し、水も湧き続いている。

富浦地区の地形は、倶多楽火山由来の火山堆積物による比較的もろい

岩盤によって多くを形成されていることもあり、集中豪雨によって土砂崩れが起きやすい土地柄でもあった。昭和33年の集中豪雨による崖崩れでは、小学校1年生の男子児童が犠牲になっており、昭和55年、56年の大雨では、国道36号やその上の崖が崩れた。多数の床上浸水も発生した。昭和55年の大雨による災害を受けて、災害復旧工事では崖崩れを防ぐために、札内台地から流れてくる水を円滑に海へと流す排水溝の設置などが進められた。しかし、この工事が完成する前の昭和56年に再度大雨が降り、床上浸水に見舞われることとなった。そのため、地域住民は憤慨し、被害状況の確認のために同地区を訪れた市職員に対して、激しく抗議する一幕もあった。同排水路は同年10月に完成し、崖自体も北海道による治山工事が進められて、大規模な崖崩れ発生の危険は減少した。また、蘭法華岬が風よけとなり、遠浅が続く富浦の海は、格好の海水浴場として親しまれ、登別小学校のほかに幌別小学校の児童なども海水浴を楽しんでいた。しかし、昭和30年代になると自動車の普及によって国道の交通量が増加すると、海水浴帰りの子ども達が交通事故に遭うことが増え、死亡事故も発生するに至った。交通事故の遺族は、2度とこのような悲劇を繰り返して欲しくないとの願いから、事故現場の付近に交通安全地蔵を建立した。蘭法華トネルの富浦町側には2基あったが、平成28年6月に崖崩れが発生して、地蔵像は土砂に埋まってしまった。そのため、遺族が移設することとなり、それぞれの墓所などに移設された。昭和53年以降、石油輸出機構が段階的に原油価格の値上げを実施したことに加え、イラン革命（昭和54年）、イラン・イラク戦争（昭和55年）などの影響により、原油価格が大幅に高騰し、第2次オイルショックが発生した。このような世界的な情勢による燃料価格の高騰は、本市の漁

業にも大きな影響を与え、戦後間もない頃から取り組んできた遠洋漁業からの撤退ということとなった。昭和57年8月、登別漁業協同組合は、「第二のぼりべつ丸」を売却し、マグロ漁からの撤退を決定した。また、同じ頃に韓国籍と見られる漁船による漁具破損被害が相次いだこともあり、比較的沿岸に近い地域での漁業に回帰していった。このような本市漁業の転換期において、昭和59年、60年と相次いで漁業従事者の海難事故が発生した。そのため、登別漁業協同組合では、殉職者の慰霊と今後が無事故を祈願して、漁港の船揚場付近に「海難殉職者慰霊碑」を建立した。漁獲した水産物も慰霊する「魚霊碑」(昭和41年建立)と並んで立っていたが、平成24年7月に漁港周辺の工事などの関係から、富浦神社境内に移設された。

昭和30年12月、アイヌ文化について調査を重ねていた知里真志保と山田秀三が、真志保の父・高吉の案内で蘭法華岬の付け根付近にある「アフルパル」を調査した。「アフルパル」とされる場所は、海岸沿いなどにある洞穴のようなものが多く、富浦町にある縦穴状のものは珍しいものであった。国道36号を整備する際に、約4分の1が削り取られてしまったが、国道を通過する際に見上げると、その断面を確認することができ、また、市教育委員会によって案内標識が立てられている。

### 平成・令和期

富浦地区には老人憩の家や漁業会館など、集会可能な施設があったものの、いずれも老朽化が著しかつた。そのため、これらを統合して地域住民の集会や学習、各種サークル活動の主要複合施設として、また、地域の文化福祉、コミュニティの交流の場として「(仮称)富浦地区コミュニティセンター」を建設するこ

ととなった。そして、平成元年10月に「富浦会館」として供用が開始され、以後は町内会の会議などが開かれる場所として活用されている。しかし、老朽化したのは老人憩の家や漁業会館だけではなかった。へき地保育所として昭和37年に開設された「富浦保育所」は、幼保一元化事業として登別保育所に登別温泉保育所とともに統合されることとなり、平成17年3月末をもって廃止された。また、昭和43年11月に開設された富浦生活館は、主な利用者であった北海道ウタリ協会登別支部の活動の場が、昭和60年に開設された鉄南ふれあいセンターに移ったことから、平成18年3月末をもって廃止された。

平成15年度に、第2富浦墓地の供用が開始された。同墓地は、他の古くからある墓地とは異なり、最初から全区画が計画的に造成されたため、墓碑が整然と並んでいるのが特徴となっている。また、平成30年11月、同区画内には登別軟石を多用した共同墓が設置された。核家族の時代を経て、高齢夫婦のみによる世帯が増え、墓の祭祀を子や孫の世代に負担させたくないと考える市民が増えたことを受けての設置であった。また、老朽化した火葬場の立て替えが平成7年頃から市議会の場などでたびたび取り上げられてきたが、他の大型事業との競合から実施は先延ばしとなっていた。しかし、平成14年度にクリンクルセンターや市民プールの建設工事のめどがたつたことから建設工事が進められ、平成16年4月に供用を開始し、平成23年度からは指定管理者制度が導入された。

平成23年には、いぶり中央漁業協同組合の事務所が登別漁港内に新築され、白老町虎杖浜から登別港町に移転した。同組合では、これに伴って富浦町にあった同組合登別支所を本事務所に統合した。長く登別漁業協同組合の本所として、平成16年4月の3漁協統合以後は「登別支所」

として本市漁業の中心的な役割を果たしてきた建物から、事務所機能が撤収された。

平成27年7月、富浦町で本市の特産品の1つとなり得る畜産品が開発された。前年の26年にチーズ工房を開設した(株)のぼりべつ酪農館(札内町)で、チーズを生産する際に発生するホエーを畜産農家に供給し、それに飲ませて肥育することで食感や風味が良くなるものであった。この豚肉は「のぼりべつ豚」と名付けられて、飲食店やホテルなどで利用されているほか、登別閻魔やきそばの具材として使用されている。また生産量は多くはないが、今後が期待されるものである。

平成28年7月、富浦町内会は今後の役員のなり手不足などから、活動を休止することとなった。同町内会が指定管理者として管理してきた富浦会館は当面の間、本市が直接運営することとなった。現在、町内会活動の再開に向けて、地域住民の間で話し合いが行われている。

#### 参考文献

- ・登別町『登別町史』昭和42年
- ・登別市『市史ふるさと登別』昭和60年
- ・北海道庁『殖民公報 第41号』明治41年3月
- ・農商務省鉱山局『本邦重要鉱山要覧』大正3年
- ・金井抱二『金井抱二日記』
- ・北海タイムス社『北海タイムス』大正3年1月14日
- ・北海道新聞社『北海道新聞』各号
- ・室蘭民報社『室蘭民報』各号

## 第7節 温泉地区

### 1 カルルス温泉地区(カルルス町・上登別町)

#### 地 理

カルルス地区は、本市の最北部に位置し、大部分が山岳地のカルルス町と、比較的平坦な土地が広がっているが、登別川が刻む深い渓谷によって2分されている上登別町で形成されている。

オロフレ峠の「オロフレ・ペツ」は、アイヌ語地名「その中・赤い・川」を意味している。オロフレ峠よりもやや下った辺りでは、褐鉄鉱の鉱脈が広がり、大正期から戦後にかけて断続的に採鉱されていた。また、登別川にかかる寿橋から上流を見ると、その川底はアイヌ語地名を彷彿とさせる赤みを帯びている。山には、登別川の上流と考えられた登別岳(アイヌ語地名ヌブル・ペツ・エトコ)、来馬岳山頂付近に雲がかかると雨が降ると伝わる「加車山(アイヌ語地名サマツキ・ヌプリ)などがそびえている。登別川を下ると、カルルス・サン・スポーツランド裏付近には、錦の滝(「蘇志茂利の滝」とも呼ばれた)がある。この辺りは、約3万4千年前にカルルス温泉街を中心に南北約3<sup>キロメートル</sup>、東西約2<sup>キロメートル</sup>の範囲の「せき止め湖」があったとされ、湖沼性堆積物が発見されている。この堆積物を分析して、当時の気候を探る研究も行われている。

#### カルルス町

登別温泉もカルルス温泉も地元の人々は古くからその存在を知っていたと思われるが、カルルス温

泉の良質な温泉に着目したのは、明治の中期以降のことだった。

明治19（1886）年、当時室蘭郡役所の書記を務めていた日野愛憲が屯田兵用地測量のために測量技士などを案内して登別川上流を調査する中でカルルス温泉を発見した。しかし、当時の日野愛憲は幌別郡全体の開発にとりかかり、多くの案件を抱えていたことから、温泉地を開発する余裕がなく、しばらくそのままとなっていた。それから3年後の明治22年、愛憲の息子日野久橋が自営の木材業に関連して樹種調査を行った際にこの地を訪れ、カルルス温泉を知る。久橋はかつて父が発見したものと知らず、日記には「字ペンケネセにおいて温泉を発見する」と記し、登別川上流を千歳川と命名した。そして、鉱泉を自らも飲料し、持病の胃カタルを治したことから、本格的に温泉としての開発を考えた。この発見の際に野宿をした寿橋横の岩穴には、カルルス温泉創業を記念した「野宿之碑」が建てられている。

温泉の発見後、日野久橋は、カルルス温泉開業の申請を行うも、地理的な問題などを理由に開業の許可がなかなか下りなかった。同じ頃、室蘭市輪西で薬局と運送業を営むかたわら、鉱山の探索などにも興味を持って市田重太郎も鉱山の探索中にカルルス温泉を発見した。市田は、明治31年5月に幌別村字ロクスト（現陸上自衛隊来馬演習場）から登別村字ベンケネセまでの区間の道路を開削する許可を得た。すでに幌別地区から字ロクストまでの道路は開削されていたため、この区間を開削すると幌別地区からカルルス温泉までの道路が開通することになるのである。また、同年11月には、同地と縁の深い日野久橋と共同経営する契約を結び、株式形式によって本格的に開発することとした。そして、明治32年5月15日、北海道庁は両名に対して温泉経営に関して免許し、

同年8月6日にカルルス温泉開業式が行われた。

日野は、明治32年から幌別地区とカルルス温泉、あるいは登別温泉とカルルス温泉を結ぶ路線の開削を自費で行い、カルルス温泉までの交通の便の向上に尽力した。

また、日野と市田の両名は、開業式までに「寿館」（5部屋、現在の鈴木旅館）を建築するとともに現在、オロフレ荘が建つ場所に浴場を建設し、その敷地内に土地の守り神として薬師神社を創建した。そして温泉の泉質が世界的に有名なチエコ温泉地カルロヴィ・ヴァリ（ドイツ語で「カルルス・バード（「カールの風呂」という意味）」と同質で、ラジウムが豊富な単純泉であったことから、「ペンケネセ」から「カルルス」に改称した。カルロヴィ・ヴァリは、浴用もさることながら、飲用泉として著名であったことが、カルルス温泉の鉱泉を服用して自身の疾病を治癒するに至った自身の経験を反映させたのかもしれない。

開業当初は、市田がカルルス温泉で直接経営にあたり、日野久橋は幌別地区で木材業を主力として行っていた。しかし、明治37年に日野久橋は、カルルス温泉の更なる発展を期して2軒目となる洗心館を建て、その経営を松田精一（日野愛憲の義兄）に任せた。

明治37年2月8日、日露戦争が勃発すると、多数の傷病兵の収容



カルルス温泉の入り口

難が発生した。そのため傷病兵の転地療養所が国内各地に設けられた。終戦に近い明治38年に登別温泉も第7師団の療養所に指定され、その一部がカルルス温泉でも療養することとなった。療養する傷病兵を見舞う家族等が多数訪れるようになり、登別温泉とともに賑わったという。

明治41年9月、市田はカルルス温泉の経営権の全てを日野久橋に譲って室蘭に戻っていった。また、この年、湯治に来ていた岩井仁太がカルルス温泉で3軒目となる千歳館（現深山の庵いらい）を開業した。翌年には日野久橋が登別温泉との間の道路を馬車道に改良したことで、逐次交通の便が良くなっていった。

明治42年8月、カルルス温泉街から歩いて2キロメートルほどにある湖「パスイヤント」（箸が・そこに・より上る・沼）に、韓国皇太子送迎のために登別に訪れていた通信大臣・後藤新平が「橋湖」と命名した。この「橋」はカルルス温泉の開発に尽力する日野久橋をたたえて命名したものであった。この湖には、昔からよく箸やへらが浮かび上がり、それを拾って使うと縁起が良いとの伝説があった。

大正5（1916）年頃のカルルス温泉には80人ほどの人が住み、寿館、洗心館及び千歳館の3軒が営業していた。大正7年には電話が開通し、大正10年には、勝岡の滝発電所から電力が送電され、カルルス町にも電灯が灯るようになった。そして、大正11年に登別温泉とカルルス温泉を結ぶ道路が準地方費道となり北海道庁によつて改良が行われることとなった。

このようにまちとしての基盤が整備されていった中で、大正12年1月20日に有志5名の連名による「教育所設置の儀願」が村長宛に提出された。道路事情は良くなりつつあるものの、登別温泉や幌別地区に通学す

るのは困難であるため簡易教育所を設置してほしいとの趣旨であった。これを受けて同年2月6日に開かれた学務委員の会議で、カルルス温泉への特別教授場の設置の可否が協議され、次いで2月18日開催の村会での協議がなされて、同年4月に登別温泉尋常小学校カルルス特別教授場が開校、4月8日に開校式を挙行した。このときの校舎は木造平屋建て、総建坪が13・5坪という規模であった。

昭和2（1927）年、カルルス温泉自動車合資会社がカルルス温泉と登別温泉の間に乗合小型自動車を走らせた。また、昭和7年に標高が高い地域の特性を生かして山スキーを楽しむコースが設定された。登別温泉からばかりでなく、大滝、洞爺湖方面との交通道路整備も進み、昭和9年にはオロフレ山にヒュッテが開設され、昭和10年「胆振アルプス縦貫道（オロフレ道路）」が開通した。翌昭和11年には登別温泉、カル



カルルス温泉開業式

ルス温泉、川又温泉の3つの温泉地で宿泊客数が初めて20万人を超えた。療養に効果がある温泉と保養によい自然環境が特徴のカルルス温泉は、開湯以来の「俗化されることなく静かな温泉づくり」を進めたことで農閑期の農業者など、長期の湯治客をつかんでいった。これらの湯治客は、秋の刈り入れ後に家族で鍋釜布団一式を持参して1か月ほど泊まり込んでいったという。

昭和13年4月1日、カルルス温泉郵便局が開設された。これは、戦火が世界中で拡大していったことから財政強化のため、貯蓄を奨励する国の施策の一環でもあった。観光の町カルルス温泉もいよいよ有事優先となり、カルルスの町は静かに耐える日々が続いていった。

この頃、カルルス温泉から登別川沿いに約2・8キロ上った「カルルス鉱山」で褐鉄鉱が採掘された。同鉱山は、大正5年に佐々木市蔵が発見し、大正7年に木村久次郎と共同して採掘したが採掘に至らず、休鉱山となっていた。昭和16年になって北海鉄山(株)によって採鉱が開始されたが、アジア・太平洋戦争の終結によって、ほとんど採掘することなく再度「休鉱山」となった。昭和25年からは藤木定が再開し、昭和27年には1万トンを採掘したという。採掘した鉱石はトラックで登別駅まで輸送していた。現在は採鉱されておらず、この坑道跡で真冬の一時、3メートルを超える高さの水の柱を見ることが出来るという。誰もが訪れることの出来るような所ではないことから、熟知する人の道案内がなければ行くことは難しいが、自然が作り出す3メートル以上の水筈は見応え十分であるといわれている。

昭和20年8月の終戦は、しばし人々に混乱を呼んだが、新時代の到来を次々に示した。昭和24年に支笏洞爺国立公園の指定を受けると、3年後の昭和27年にはバスの運行が再開された。そして昭和32年、カルルス温泉は北海道内で第1号、全国でも12番目の国民保養温泉地に指定された。昭和34年に町営国民宿舎「オロフレ荘」がオープンし、2年後の昭和36年には改めてオロフレ道路の工事が完了した。長く不通だったオロフレ道路が復旧したことで、「札幌市街―定山溪―洞爺湖―カルルス温泉―登別温泉―支笏湖」という、道央、道南を結ぶ観光道路が完成した。

交通アクセスの改善と時期を同じくして、新たにボーリングした成果で利用できる湯量が確保できるようになった。そこで各旅館ともに内湯を設けられるようになり、更なる来客の増加が見込まれた。

そのため、各旅館では交通アクセスの改善を機に、送迎用のバスを用意し、道内各地区から老人クラブなどを積極的に招き入れるようになった。また、国民温泉保養地としての役割を果たすためにも投資が行われ、昭和35年にはカルルス温泉小学校の新校舎が完成、昭和36年6月にはオロフレ荘裏に町営温水プールが完成した。このプールは同年10月に発生した集中豪雨によって大きな被害を受けた。そのため、昭和38年に千歳の川に拡幅と護岸工事が行われ、寿橋も木橋から永久橋への架け替えなどの復旧工事が行われた。また、冬場の誘客対策として同年に町営カルルス温泉スキー場がオープンし、翌年にはリフトも完成した。

昭和47年に札幌冬季五輪が開催されると70級級ジャンプ競技で日本人3選手(笠谷幸生、金野昭次、青地清二)が表彰台を独占するという快挙を成し遂げ、日本全国は大いに沸き立った。カルルス温泉では、将来のオリンピック選手を養成するために、カルルス温泉スキー場西側の斜面に、翌年30メートル級のジャンプ台が作られた。しかし、その後のスキージャンプ技術の向上などによってランディングバーンの距離が不足するようになって廃止された。

昭和50年に旅館「山静館」が開業し、カルルス町には、旧来からの旅館と合わせて6館での営業となり、収容人員約650人の温泉場となった。

昭和52年の有珠山噴火では、道道洞爺湖登別線が洞爺湖方面からの避難経路として活用された。また、有珠山からの距離が比較的短いことも

あり、風評被害によって観光客が減ることもあったが、その後まもなくして入込客数は持ち直し、2年後の昭和54年には変わらぬ風情を残す奥座敷の温泉郷として温泉開湯80周年の記念式典が開催された。このとき、市内の高齢者を対象に、温泉1日湯治が実施された。

カルルス温泉小学校は、児童数が減少したため、昭和57年3月31日、59年の歴史を閉ざすこととなった。閉校後の跡地には、昭和61年に登別市カルルス・サン・スポーツランドが開業し、テニスコートやゲートボール場などの施設が整備された。同施設は、老朽化したことや利用者数が減少したことなどによって、現在は休止中である。

昭和61年の新登別大橋の開通、高速道路の延伸、オロフレトンネルの開通などによって幌別方面や壮瞥町方面などからの交通アクセスが向上した。更には、昭和62年に(株)ツムラが「日本の名湯シリーズ」に「ごり湯 登別カルルス」という温泉入浴剤を販売、鐘紡(現クラシエ)も旅の宿シリーズの1つとして「登別」という名の温泉入浴剤の販売を開始した。ツムラでは、テレビコマーシャルに映画監督の伊丹十三を起用し、湯船につかりながら「日本の名湯、登別カルルス」と言ったことから、一躍全国区の知名度を得ることとなった。

経済が順調で観光業はますます需要を増やすものと期待されたが、全国、北海道と波及する不況の影響によって、5年たつても経済は改善せず、それからの10年、15年と観光業は厳しい経営状況にさらされることとなった。カルルス温泉は、その間、日帰り客の開拓や湯治客の掘り起こし、敬老会や近隣市町村の文化サークルの研修会などを招いて努力を重ね、現在も4つの旅館(鈴木旅館、オロフレ荘、深山の庵いわい、山静館)がそれぞれの個性を特色として営業努力を続けている。

カルルス温泉は日野久橋の教えを守り、効能豊かな湯をたたえ、奥深くの山峡で豊かな自然に守られ、「俗界を離れた静かな温泉地」という特色を生かして来泉客を待っている。

カルルス温泉の特性の1つとして地熱賦存量が大きいことが上げられる。昭和57年12月から行われた調査では271度の地熱が確認されたが、その後の経済情勢などから開発に取り組む企業がなく、また、温泉資源への影響を懸念する声があったことから、その後の技術開発を待つことになった。平成29(2017)年度には、国による全国的な地熱調査がカルルス温泉上空で行われた。

### 上登別町

上登別町は、クスリサンベツ川が登別川と合流する地点からカルルス町までの地域で、登別川がその中心を流れている。この地区は、両岸ともに比較的平坦な土地が広がっており、古くから有望な入植地として期待された。

上登別町の開発は、その直下の陸上自衛隊米馬演習場の辺りが屯田兵の入植地に指定され、測量などが行われたことに始まった。この調査の中で日野愛憲が登別川上流にカルルス温泉を発見したことは既述のとおりである。登別川右岸の土地は、その真ん中を幌別地区とカルルス温泉を結ぶ市道カルルス路線が走っている。明治32(1899)年のカルルス温泉開業式では、幌別駅前からの来客が馬車や騎乗によってこの道路を通った。このカルルス路線と登別川にはさまれた土地に昭和60(1985)年、登別カントリー倶楽部がオープンした。このゴルフ場は、登別温泉のホテルなどが共同出資して設立した登別リゾート開発(株)が運営した。開設当初は多数の客が訪れたが、景気の低迷などにより利

用者数が減少し、平成22(2010)年に経営が行き詰まり、「民事再生法」の適用を申請するに至った。同社の再建は、恵庭市でゴルフ場などを運営する恵庭開発(株)の手にゆだねられることとなった。登別リゾート開発は恵庭開発(株)の子会社となり、同ゴルフ場は平成23年4月に再出発した。平成28年9月には、多数の人気選手が出場する日本女子プロゴルフ選手権大会コニカミノルタ杯が開催された。開催期間の4日間には累計で約7千人の観客が来場した。

登別川の左岸には、平成31年4月末時点で21世帯37人が住む地区がある。

この上登別町の土地は、かつては、「北海道国有未開地処分法」において、森廣が払い下げを受け、その後、栗山町で菓子製造業を営んでいた谷田可思三が所有した。この土地は、戦後の農地改革における買収対象となったが、谷田の申し出が認容され、買収対象から除外となった。それから約10年後に、この土地が脚光を浴びることとなった。

昭和35(1960)年、山形県選出で国土開発審議会委員などを歴任した鹿野彦吉が、上登別町の雑木林約330鈔を谷田から購入した。翌36年に、上登別地区に「登別温泉」「カルルス温泉」「川又温泉」に次ぐ4つめの「温泉郷」を作る計画が、鹿野などが設立した「登別観光開発(株)」によって立案され、同社が短期間で整地して分譲を開始した。

計画の概要は、「新登別温泉」と命名した新たな温泉郷を作り、ホテル・商店街・ゴルフ場・公園・別荘などを設け、一大温泉郷が完成するといふものであった。そして、温泉は登別温泉町の大湯沼を水源とする給湯装置によって供給することとし、昭和38年に給湯管などが設置され、温泉付きの住宅地として分譲した。ところが、2年後の昭和40年に同社は

資金繰りの悪化によって倒産し、一大リゾート地建設計画はとん挫した。同社の倒産後、この地区の住民からの要請を受け、温泉給湯事業は本市が引き継ぐこととなり、現在に至っている。

昭和50年9月15日、土地の守り神とするために上登別神社を創建した。これは開発業者であるサンキ(株)の発案によるものであった。

ご神体は、住民代表の古田茂が伊勢神宮から貰い受け、千歳空港から自動車10台を運んで運んだという。このときの神事は、夜更けに輪西神社の上村宮司が執り行った。現在も毎年9月15日に例祭を行っており、神職は輪西神社から招いている。また、当時営業していた滝本別館を会場に直会なども行われていた。同社の祭神は当初、天照皇大神と伏見稲荷の2神であったが、神職からの助言などもあり、天照皇大神のみを祭ることとなった。

昭和58年1月2日には、上登別町やオロフレ峠で撮影されたテレビドラマ「西部警察PARTII第29話 燃える原野!オロフレ大戦争」が放送された。このときの出演者との交流は、今尚住民の心に残っているという。

昭和61年に新登別大橋が開通すると、橋の登別側には中国庭園「天華園」が平成4(1992)年4月29日に開業した。同施設は、中国の清朝時代の庭園をイメージしたもので、中国から専門の職人を呼び寄せて製作した瓦などを用いて建築された本格的なものであった。そのためテレビドラマの撮影なども行われたほか、庭園内で中国の少数民族による公演などが行われた。来日した少数民族の歌劇団などは、北海道ウタリ協会登別支部(現・登別アイヌ協会)の会員などとの交流も行った。本格的な中華料理のレストランもオープンして中高年の世代の人気を集め



たが、子ども向けの遊具などが少なかったこともあり、子育て世代のリーダー獲得とはならず、徐々に入場者数が減少した。そのため、平成9年に運営会社の新登別プラザは運営から撤退し、以後、本市が無償で借り受けて委託による運営を続けるとともに、同園の引受先を探してきが見つけられなかったため、平成11年9月に閉園した。跡地は、複数の事業者によって再活用の路を採ったが、平成28年から太陽光発電設備の建設が進められ、令和元（2019）年11月から発電を開始した。

平成27（2015）年12月、それまで中登別町で温泉排水熱を利用したアスパラガスの栽培実験を規模を拡大し、上登別町で本格実施することとなった。この実験は、市内事業者や登別商工会議所、本市で構成する「登別新産業創造育成研究会」によって進められた。

#### 参考文献

- ・登別町『登別町史』昭和42年
- ・登別市『市史ふるさと登別』昭和60年
- ・農林水産省ウェブサイト『海岸事業』
- ・北海道新聞社『北海道新聞』各号
- ・室蘭民報社『室蘭民報』各号

## 2 登別温泉地区（登別温泉町・中登別町）

### 地理

登別温泉地区は、鉄道から約7<sup>キロメートル</sup>上方、本市の北東部に位置し、白老町に隣接している。爆裂火口跡にできた登別地獄谷や大湯沼、奥の湯など登別温泉の源泉が多くある地域で、

これらの温泉水を利用した温泉街として発展してきた。また、硫黄の採掘地としても利用されてきた。地史としての登別温泉については、多くの論文が発表されており、そちらを参照いただきたい。

また、登別温泉地区は、植生として希少性があり、大正13（1924）年12月9日に、同地区内の「登別原始林」が内務省から天然記念物の指定を受けた。昭和63（1988）年11月には登別原始林内の一部区域にあたる「ミズナラを主体とする広葉樹（遺伝資源の保護を目的とする個体群）」が「登別植物群落保護林」として設定を受け、平成30（2018）年4月1日の保護林再編において「登別ミズナラ希少個体群保護林」として改めて設定された。

### 登別温泉町

本市「登別」の由来は、アイヌ語で「ヌプルベツ」（色の濃い川）であり、登別温泉地区から流れ込む白濁した温泉水が登別川の水を青白く濁らせていた様子を表しているという。そのため、アイヌ民族にとつて、登別川の上流部分に何かがあると探索し、わき出る温泉を見つけたであろうことは想像に難くない。しかし、当時のアイヌ民族は、文字としての記録を残していないことから、それがいつの頃かを判別することは難しく、和人の手による記録から探ることとなる。

和人が関与する登別温泉についての一番古い記録は、『登別町史』にもある寛文6（1666）年に松前藩士・兼広某が蝦夷地検分の途中病にかかり、登別温泉に浴したとの記載である。残念ながらこの故事についても出典が不明なため、真偽を確認する方法がない。明確な記録としては、天明5（1785）年から6年にかけて蝦夷地を調査し、その

間に本市を通り過ぎた最上徳内が『蝦夷草紙』（寛政2（1790）年）の中で「ノボリベツという小川有り、この川上に温泉湧き出て、流れ来るため白粉と紺青をかき立てるが如し、一日も水底の見ゆることなし」として登別温泉を紹介したのが最も古い記録となろう。

この温泉が本格的に開発され、利用されるようになったのは安政年間からである。弘化2（1845）年に松浦武四郎が登別を訪れた際には、道路も満足に整備されておらず、登別温泉での入浴も温泉水が流れる河中に「むしろ」を敷いて入浴したという。安政5（1858）年に再訪すると、ホロベツ場所の場所請負人である岡田半兵衛が建設した止宿所が出来ており、むしろを敷いて入浴した場所にも屋根掛けがされていたと記している。

同じ頃の登別温泉は、登別地獄谷や大湯沼などで結晶化した硫黄を採掘していた。登別地獄谷の明ばん泉がわき出ている付近には、文久元（1861）年4月8日の日付や「薬師如来」の仏号、「硫黄山栃内氏差配人善四郎外職人中」などと記された石碑が祭られている。伝承によると硫黄採掘の職人が眼病を患い、明ばん泉で目を洗うと回復したことから祭ったものという。この職人たちは、同年3月16日に室蘭に到着し、翌17日に登別温泉に向かったということから、到着後の約1か月後に目を痛めたのであろうか。

登別温泉には、南部藩の関係者や松浦武四郎のほかにも、箱館奉行の村垣淡路守範正や堀織部正、エトモ詰の箱館奉行支配調役・石場齋宮、仙台藩士・玉虫佐太夫、佐賀藩士で後に開拓使判官となる島義勇などが訪れて、それぞれが登別温泉の様子を記録した。

明治6（1873）年には、新時代の産業振興を目指し、アメリカか

ら来た技師ライマンとモンローなどが大湯沼周辺の硫黄の鉱脈、埋蔵量を調査した。明治29年には日和山での硫黄採取のために数10人の鉱山労働者が来たという。その3年後の明治32年には、横浜の実業家・押野常松が登別地獄谷及び大湯沼の全鉱区を所有するに至った。同氏は、大正12（1923）年8月に、この鉱区を「登別硫黄鉱山」と命名し、押野一族が経営する合資会社常盤鉱業所の経営に移して、硫黄の量産を行った。しかし、大湯沼及び登別地獄谷は昭和24（1949）年に国立公園に指定されて以降、景観を損傷するものとして登別地獄谷での採掘は禁止となり、大湯沼も許可制限が厳しくなったために硫黄の採掘は行われなくなった。

明治6（1873）年頃から、妻・佐多の皮膚病を治した温泉に着目していた滝本金蔵が温泉地の開拓に取り組みはじめた。明治14年、滝本金蔵は私財を投じて旧登別神社の横を通り、紅葉谷を通って登別温泉に至る道を開削し、21年には宿を2階建てに改築した。そして明治24年に温泉道路の改修が一段落すると、円太郎馬車を走らせ旅行客の送迎を行った。この年、それまで登別川下流でのサケ漁への影響を懸念して禁止されていた冬期間の温泉利用が可能（可能となった経緯は不明）となり、金蔵は初めて登別温泉で越冬した。温泉が冬期間も利用可能になったことが、その後の湯治という基盤を整えていったのである。明治34年には急勾配だった温泉道路の改良工事が終わり、現在につながる観光道路となっていた。

明治28年には香川県から登別村ランボック（現・富浦町）に移住してきた岩倉浜治が、登別温泉に転居して旅館「さぬき屋」を開業した。その他にも「丸い旅館」、「丸こ旅館」、「丸一旅館」などが相次いで開業し

た。同じく28年には満岡寺（室蘭市）の住職飯島覚道が、登別温泉街に湯の瀧説教所を開き、登別温泉における教育の先駆けとなる寺子屋教育が始められた。

明治38年、日露戦争の終戦が近い頃、陸軍は傷病兵の収容のため、登別温泉が陸軍の転地療養所の指定を受けた。戦地から引き揚げてきた傷病兵や、それを見舞う家族などで登別温泉は一気に活況を呈するようになっていった。宿泊所も不足し、一般商店から宿泊所に切り替えるところが出るほどであった。また、雑貨店や土産店も増え、北海道でも屈指の湯治場へと成長していった。

しかし、不況に見舞われた大正期になると、登別温泉を象徴する旅館である第一滝本館、第二滝本館が厳しい経営環境にさらされた（明治36年に丸一旅館と岡本旅館を買収し、本館を「第一滝本館」、買収した2館を「第二滝本館」と呼ぶようになった）。2代目金蔵を亡くした後には、第一滝本館と第二滝本館の両館を取り仕切っていた滝本濱<sup>はま</sup>の窮状を見かねた兄の木下成太郎は、大正2（1913）年、両館の再建を栗林五朔に要請した。同じ北海道議会議員で盟友であった彼はその申し入れを受諾し、両館を買収した。栗林は、まずは登別・登別温泉間の交通アクセスの改善を目指し、大正4年、馬車鉄道を開通させ、さらには大正7年により多くの観光客を送迎することができるよう蒸気機関車による軽便鉄道に転換した。大正5年に3万5千571人だった乗降客は大正7年には5万7千573人と61・8%に増加した。

しかし、蒸気機関車がはき出す火の粉によって沿線の山火事が頻発したことから、大正14年には、登別駅と登別温泉駅を35分で繋ぐ電車の転換された。電車の電力には、カルルス町に新設した「カルルス発

電所」の電力を主力電源とし、それに大正5年に勝園の滝発電所と、現在の登別温泉町18番地付近に設けた小型の火力発電設備（重油）で発電した電力を予備電力として運行したという。大正15年の乗降客は8万1千257人で大正7年と比べると41%増、大正5年から比べると2倍以上に増えていた。

大正14年には、クスリサンベツ川のほとりで温室を設け、温泉熱を利用した野菜の促成栽培が行われた。冬季に温泉旅館などに野菜を供給するためのもので、ガラス張り温室（約60坪）でトマト、三つ葉、うど、茄子、キュウリなどを栽培したという。栽培成績は良好であったが、その後には発生した河川の氾濫で温室が倒壊し、再建されなかったという。

昭和期に入ってからでも続く観光客の増加は、施設の整備や拡充、一層の近代化が求められた。しかし、第1次世界大戦終了後から続く不景気の中で、中小の温泉経営者が木造の旅館を近代的な建築物に改造するという大規模な設備投資は難しくなっていた。

その中であつて、登別温泉軌道（株）の3代目社長・栗林徳一は、厳しい経営環境にもかかわらず、あえて積極的な投資策を実行した。登別グランドホテル横にベビーゴルフ場を開園させ、「子供の国遊園地」の計画を進めた。大正15年、南外吉もまた栗林徳一と同じく、第一滝本館の経営を引き受けると直ちに500坪という大浴場を設ける計画を発表し、宿泊棟も増築した。また、南外吉の弟清吉が登別温泉に乗り込んでくると言う話が伝わると、彼が定山溪で旅館経営の支援をするなどして名をあげた経験豊富な人材であるという噂もあり、中小旅館の経営者達は一層のおびえを感じ取っていた。昭和7（1932）年7月9日付けの『室蘭毎日新聞』は「抗争の真因―大資本と小資本の衝突」とい

う見出しでまちを二分する抗争を伝えた。大資本とは、大浴場を目玉として登別温泉に来る観光客を独占しようとするかのような勢いを持った第一滝本館と、中小旅館、商店などから地代、電灯料、湯銭等の値上げを行っている登別温泉軌道（株）の2社のことであった。第一滝本館と登別温泉軌道（株）が協力してリゾート型の近代化を助長し、中小旅館の顧客を奪い取り、登別温泉での商売の独占を謀っているという思いから団体交渉の場が設定され、警察官立ち会いの下、大企業に対して15条からなる要求書が手渡された。

この騒動は昭和9年頃まで続き、南外吉は計画通り500坪の大浴場を開設させた。登別温泉（株）（昭和8年5月30日に社名変更）は、中小旅館の懸念を解消するため、3年後の昭和12年に250坪の「登別温泉大浴場」を作り、中小旅館に宿泊する顧客のために無料の大型浴場を開設した。電車を利用する観光客数は増加したことで電車の動力不足が生じるようになり、発電設備の増強が必要となった。また、不況下の経済状況にあつて経費節減を図る必要から車両整備が行き届かなくなりつつあった。これらを改善するためには、思い切った投資が必要となるが、その経費を捻出することは困難となつていたため、バスに転換することとした。こうして昭和8年に登別・登別温泉間を電車からバスへと転換された。登別温泉側の終着点となる登別温泉停留所の建物は、日本人として初めて英国の王立建築家協会の建築士となつた桜井小太郎が設計したという。

昭和13年6月には、登別温泉に第一級の近代ホテルを建てるべく「登別グランドホテル」を建てて開業した。戦雲険しい中でも登別温泉は堅実に宿泊客を伸ばしていったのである。そして、医療を提供するとも

に「温泉を活用した医療を研究」するため、昭和11年2月には北海道大学附属病院登別分院が開設した（最初に設置されたのは現「登別温泉交番」付近）。昭和15年6月には陸軍の傷痍軍人登別温泉療養所が旧国立病院跡地に開設された。昭和18年には、現在の登別グランドホテル西側高台に大湊海軍病院登別分院が開設された。北海道大学附属病院登別分院で看護師として勤務していた方の話では、「けが人などが多数出た際には各病院が協力して対処した。そのときには手伝いにいった病院で給食が出たが、軍隊の病院は比較的食事が良く、手伝いに行くことが楽しみであった」という。

戦争中も不況知らずで観光客を迎えていた登別温泉であるが、さすがに戦火が厳しくなつた昭和18年頃から物資が減り始め、交通網の要だつたバスも燃料の調達に苦心するようになり、観光客が一気に減り始め、昭和19年、20年は観光地としての体裁をなくしていった。昭和20年6月から8月にかけては、登別温泉にも合計6回の空襲警報が発令された。

昭和20年11月、登別グランドホテルが進駐軍（主体はアメリカ軍）に接収された。接収したアメリカ軍は威圧的な占領を避けるための配慮から、夜にはパーティなどを開いて地元の人々を招待していたという。当時少年少女だつた温泉の人々の話を聞くと、登別グランドホテルに行つてアメリカ兵から缶詰やらガムなどをもらつていたという。その後、昭和25年6月に朝鮮戦争が勃発すると、朝鮮半島に向けて移動するアメリカ軍の一部が一時登別グランドホテルにも立ち寄つた。昭和20年12月には登別グランドホテル横の大湊海軍病院が廃止されて、改めて国立登別病院が開設された。同病院は、21年4月に旧傷痍軍人登別温泉療養所を併合し、37年5月に登別温泉町6番地付近（旧傷痍軍人登別温泉療養

所跡地)に移転した。

昭和21年、戦中からくすぶっていた登別温泉の分村化独立問題が戦後民主主義の始まりを告げるかのように大きな政治的課題としてわき起こった。

古くから登別、登別温泉地区の人々は、自分たちこそが幌別村の中心であるとの自負に燃えていた。東は白老、虎杖浜も登別の行政区で、倶多楽湖も登別温泉の水源地として登別の所有とするという考えが強かった。特に登別村の主要産業である観光業を牽引する登別温泉関係者の鼻息は荒く、幌別地区ではなく、登別温泉もしくは登別地区に役場を置き、行政は観光産業の振興を第一に考えるべきであるとの意見も強かった。昭和21年12月29日に開かれた村議会での議論を経て、分村について採決した結果、1票差で分村することが可決された。しかし、戦後の混乱が収まっていないこと、反対意見も多く、圧倒的多数による独立志向ではないことから、時期尚早として結論は先送りされた。

戦後の混乱は、その後も2年ほど続き、人々は食糧不足の中、窮乏を強いられていた。しかし、次第に「平和」が浸透しはじめ、娯楽を楽しむという雰囲気が高まり、観光客も増え始めていった。『登別観光史Ⅱ』によると、「昭和21年5月28、29日と2日続いた休日は、勤労者らの家族づれがどつと押しかけ旅館はどこも超満員で定員4人の客室に倍も詰め込まれるという盛況ぶりであった。街には物資欠乏の時代とあつて土産物はありませんが、毛ガニが3杯20円で飛ぶように売れた。限られた新円生活の中で札束が乱れ飛んでいる情景は、何とも不思議で奇怪な現象であつた」と書かれている(当時の20円は映画館入場料、駅弁1つので代金と同じである)。

昭和24年、先の分村化の問題を一時棚上げし村全体で一体感を持つて取り組んだ結果、登別温泉は「支笏洞爺国立公園」の指定を受けることが出来た。名称に「登別」が入らないという不満は今も残っているが湯煙たなびく田舎の湯治場から世界に名だたる国際観光都市を目指すための第1歩を踏み出した。

昭和27年には登別グランドホテルの進駐軍による接收が解除され、翌28年4月1日から営業が再開された。幌別村から幌別町へと町制に移行した幌別町は機構改革を実施し、昭和25年に「産業課観光係」を昭和28年7月に「観光室観光係」とした。

昭和29年7月1日には登別・登別温泉間の町道が道道に昇格し、完全舗装となった。同年の8月9日には昭和天皇ご夫妻が来泉され、登別グランドホテルに宿泊された。この頃から団体旅行がブームとなり登別温泉は北海道でも指折りの近代的な観光地へと成長を果たした。昭和30年の町長選挙では温泉で国鉄職員のための「洗心寮」を経営していた岩倉誠一が深瀬寅次の後継として立候補して当選し、3期12年を勤めた。

登別温泉(株)は、来泉客の一層の増加を目指し、昭和32年6月登別温泉バスターミナルの隣接地で「温泉科学館」を開館した。北海道大学教授・太田実が設計した建物は、クスリサンベツ川をまたぐ橋のようなつくりで、川の右岸側は子供の国の目の前であつた。そして、館内には、登別地獄谷の地質的特性や自然景観に優れた登別温泉を紹介した。昭和33年には登別温泉市街の空中にケーブルカーが走り、終着駅である四方嶺の頂上に行くと、愛嬌のある熊が手を叩いて餌を欲しがるとのぼりべつクマ牧場が出来たのである。温泉観光地として豊富なお湯を楽しむばかりでなく、温泉観光地に付加価値の高い新たな名所ができた。

昭和30年代、観光客は増加を続け、昭和36年にはついに100万人を突破した。マイカーブームにも後押しされ、町営登別国際観光会館という現在の健康ランド的レジャー施設の開館も顧客を呼び、昭和41年には200万人も超える盛況ぶりだった。短い期間ではあったが、大湯沼に熱帯植物園がオープンし、ここではワニも飼育されていた。当時、全国から登別温泉を訪れた多くの観光客は、登別地獄谷を観光した帰りには極楽通りで買い物を楽しみ、そこで「熊の木彫り」、「ひょうたん飴」などの代表的な土産品を買い求めて郷里や職場へと帰っていった。この頃の極楽通りでは、店の軒先で木彫りのクマを製作する光景が広がっていたという。登別温泉の人口はこの頃から昭和40年代がピークで男女総数で3千970人と約4千人が常住する地区であった。

ところが一見順調に見える温泉の観光景気に冷水を浴びせるように昭和37年、大手新聞が「地獄谷にあぐらをかいている眠れる獅子である」と登別温泉に対して批判的な報道を行った。「雪まつり」で冬の観光客を呼び込む札幌市の努力や、「湖水まつり」を開いて観光客の集客に努力している洞爺湖温泉から比べると登別温泉には何の努力の跡も見えないというのである。マスコミに突き動かされるばかりでなく、登別温泉の有志の間にも今後とも観光客が200万人を超えて増えていくのであれば、今以上に温泉に加えて何らかの付加価値を目指して将来の取組を強化すべきであるとの声が起こり、「登別地獄まつり」が企画された。このときから、登別は地獄谷で鬼の住む館であるとのイメージが強調され、後の「鬼サミット」や「閻魔大王からくり山車」などへとつながっていった。

登別温泉の人々は「登別地獄まつり」で観光客も一緒に楽しめる「鬼

おどり」を創作し、極楽通りの装飾は仙台の七夕祭りに匹敵するような華やかなものを目指すこととした。また、本市に新しい伝統芸能を生み出そうとする試みは、太鼓の練習生の1人に選ばれた大場一刀のやる気を激しく刺激した。彼は一心不乱に太鼓に打ち込み、極めて勇壮な「北海太鼓」を生み出した。北海道を代表する和太鼓奏者となった彼の薫陶を受けた弟子達は、やがてそれぞれに独立をしていった。陸上自衛隊幌別駐屯地に伝わる「北海自衛太鼓」なども彼の教えから生まれたものである。

登別温泉は、年間の観光客人込客数が200万人、300万人超えを目標とする頃から箱根、草津、別府とも十分に肩を並べていける国際観光都市への転換を目指していった。昭和40年代は年間の観光客もコンスタントに200万人以上を数え、宿泊客も100万人を超えていった。しかし一方で平和と繁栄はマイカー時代とも重なり、様々なアミューズメントパーク施設を生み出し、観光客は旅行先を選び放題となり、他のライバル観光地との熾烈な競争の始まりともなっていた。日本国内ばかりではなく、ハワイやグアムなどの観光地も極めて強力なライバル地となっていた。

昭和45年に市制を施行すると、登別商工会は「登別商工会議所」（以下「商工会議所」）へと変わり、登別観光協会の在り方も変わっていくことが求められていった。昭和47年、登別観光協会は社団法人となることによって社会的信頼を得る独立経済団体となり、新時代の流れを意識した観光振興に取り組んでいくことを明確な目標に据えた。協会再出発の仕事として最初に取り組まれたのは、登別温泉と草津温泉の姉妹温泉の締結である。地形、地勢が類似し高い医事薬効を誇る両温泉が連携し、

観光客の一層の増加につなげていくべきものと握手を交わした。

登別観光協会は、商工会議所を介して本市から2千万円の助成を受けて「登別商工観光会館」を新築し、そこで様々な業務を執り行い、昭和49年には「登別観光開発基本構想」をまとめ、次世代の観光地作りの青写真を示した。

・マイカー時代の到来により、単なる通過点としての観光地にならぬよう様々な楽しみを提供できる滞留時間の長い観光地を目指していく

・洞爺、白老など周辺とも連携し、そのどちらからも中核中心基地となる観光地を目指していく

・季節型の観光地から通年型の観光地を目指していく  
ことなどが最終方針とされた。

同時に、登別観光協会は、今後の登別温泉の発展のためには行政による公共資本整備が欠かせないものとして、主要幹線道路の整備、高速道路の早期開通、登別地獄谷など観光スポットの渋滞緩和のための駐車場完備などを求め本市、北海道、国への陳情を欠かさなかった。また、地域でなすべきことは率先して地域住民の結束で実行することとし、5月のゴールデンウィークに咲き誇る桜の維持管理については、「花のトンネル」に伐採などの手術を加え、随時植え替えを実施して環境美化にも努めていった。まちの新たな伝統芸能づくりに関しても、観光協会が積極的に音頭を取り、昭和48年2月に開催された「湯まつり」で初めて「湯鬼神かぐら」を披露した。昭和56年には熊と、その熊に遭遇した猟師との軽妙な掛け合いを踊りにした「熊舞」も加えられた。これらの芸能文化の担い手となる人材は、土産店や食堂の2代目、ホテル従業員の若手

で、全員手弁当で引き受け、「地元力」の強さを発揮していった。また、そうした地元力は、地域の小学校、中学校にも引き継がれ、地域学習の一貫として、地元の先輩が講師となつて子ども達と練習を重ね、途切れることなく継承されている。また、「登別地獄まつり」のオープニングを飾る登別温泉小学校の子ども達の鼓笛隊の活躍は有名で、昭和36年に約100名の生徒で結成された。編成当初は交通安全パレード、湯澤神社のお祭りで演奏を披露していたが、「登別地獄まつり」に出演すると、かわいらしいユニフォームと演奏が好評で、欠かすことの出来ないオープニングセレモニーの1つとなつていった。昭和63年にはその活躍を称えて「オニッコマーチングバンド後援会」が発足、登別グランドホテルで定期演奏会も開催された。平成19(2007)年3月、登別温泉小学校が登別小学校に統合された後は、登別小学校に「オニッコマーチングバンド」は引き継がれている。

昭和50年代の登別温泉は、高層のホテルが林立する近代的な街並みへと相貌を変え、観光客もコンスタントに年間300万人を超えるようになっていった。昭和52(1977)年に有珠山が噴火し、一時的に北海道全体の客足が遠のいたが、翌年からはまた300万人を確保した。登別温泉の関係者達は、もう一段高い目標を設定し、400万人を超える観光地、1泊2日の短期通過型ではなく、連泊型のツアー客の増加を目指すし、交通網の整備などの陳情を行った。

昭和53年4月に市立登別温泉幼稚園が開園し、8月には、登別地獄まつりに向けて登別地獄谷の入り口付近に設置が進められていた「鬼祠」と両脇を固める赤鬼と青鬼の像が完成した。12月には登別温泉中学校が現カントレラの場所に完成し、旧登別温泉小学校横から移転した。完成

した新校舎への移転作業は、教諭、生徒、PTAや市職員などによって行われ、この作業に従事した方からは、大変だったものの懐かしい記憶として残っているという。昭和54年6月、電話の登別温泉局管轄の地区と登別局管轄の地区の間での通話が市内通話になり、それまで必要であった市外局番が不要になった。55年10月からはホテルや飲食店から出されるゴミの収集が早朝に行われるようになった。このように昭和50年代の登別温泉町は、観光地として、あるいは住宅地としての取組が進められた。

昭和58年には白老インターチェンジ経由で、60年に登別東インターチェンジが開通すると、同インターチェンジ経由で登別温泉と札幌市を結ぶ都市間高速バスの運行が開始した。61年3月から4月にかけては、極楽通りの歩道がカラーブロックで舗装されて、各所に鬼を模した石像などが配置された。

平成5（1993）年9月には登別観光協会が極楽通りに閻魔堂を建設した。翌年からは、登別地獄まつりの時期に合わせて閻魔堂前で結婚式や金婚式などが行われた。8年4月には夢元さざり湯が現在地に移転し、8月には湯かけ鬼像がさざり湯の出入口横に設置された。

平成期に入ると、極楽通りを歩行する観光客などの安全を確保するために温泉バイパスの建設工事が進められた。登別温泉街の入り口から登別ランドホテル下までの第1期工事は、平成13年に弥生橋が供用を開始して完了した。次いで湯澤神社下までの第2期工事が始まった。第2期工事にもなつて、平成15年に登別温泉パラダイスが閉館し、毎年2月の登別温泉湯まつりの際に同館玄関前で行われてきた「子宝もちつき舞い」が一時中断した。しかし、地元の若者が中心となつて復活に向け

た機運が盛り上がり、平成21年の元日に復活して現在に至っている。また、第2期工事の完成後、登別パラダイス敷地内にあった間欠泉は、平成20年に泉源公園として整備されて、定期的に吹き出す間欠泉は、観光客の目を楽しませている。

温泉バイパスの整備が進められた平成期の前半、登別温泉のホテル・旅館も入れ替わりが起こっていた。

バブル景気崩壊の影響が道内に波及してきた平成6年、「ちび玉」の大衆演劇で好評を博していたホテルロイヤルヤコウが閉鎖となった。この建物は、平成8年に「ホテルゆもと登別」として営業を再開し、平成14年からは札幌の会社が運営を再開し堅実な営業を続けている。平成15年には玉川旅館大入屋が「滝乃家別館玉乃湯」となった。平成15年にはJR保養所（旧国鉄）であった登別青嵐荘をカラカミリゾートが買い取り「温泉オーベルジュゆふらん」として改装オープンさせたが、平成20年、施設の老朽化などにより閉鎖した。平成13年に「秋吉ホテル」、同15年には「登別パラダイス」が温泉バイパスの工事のため閉鎖した。

登別温泉のホテルは、厳しい経済状況の中、粘り強い営業努力を積み重ね、客室内に豪華な風呂を持ち料理も贅を尽くした高級志向の路線を開拓し、由緒ある旅館の名称に更なるブランド力を高める旅館も登場してきた。激動の時代を乗り越え、経済変動の荒波に負けることなく現在に至るまで営業を続けているホテル、旅館は、それぞれの個性と特徴を競うことでより良き共存を果たし、登別温泉全体の観光客を現状維持から増加へつなげる努力を重ねている。

また、商店街も後継者がなくシャッターを閉ざした店舗も2、3あるが、その多くが営業を続けているほか、外国人客に評判の高いドラック



ストアやコンビニエンスストアの進出が目立っている。それに加え、昨今は、他地域の温泉街では土産物店等がめっきり少なくなってしまう中で、夜も煌々と明かりが灯った極楽通りで散策や買い物を楽しめる登別温泉は北海道の観光地の中でも貴重な存在と言われている。

ただ、登別温泉地区の人口の推移を見ると、昭和50（1975）年の国勢調査で3千人を下回り、10年後の昭和60年には2千人を切り、平成22（2010）年には1千人を切った。様々な減少要因が考えられるが、一番大きい変化はマイカーの普及、道路網の整備のほか、客室の布団の上げ下げや清掃をホテルや旅館で直接雇用される従業員が行っていたが、近代的なホテルになったことや、このような業務を外部委託し、受託業者は送迎バスなどを運行したことなどから、従事する者が登別温泉町に住む必要性が低下し、日常生活において、より利便性の高い登別地区や幌別地区に転居していったことで職住分離が浸透していった。人口の減少に伴って、小中学校に通学する児童・生徒数も減少し、通学区域が再編されることとなり、平成16年3月に登別温泉中学校が、平成19年3月に登別温泉小学校がそれぞれ登別中学校と登別小学校に統合されることとなった。また、平成17年3月に市立登別温泉幼稚園が閉園し、隣接する登別温泉保育所も登別保育所と統合した。

このように登別温泉町は常住人口を激減させたが、極楽通りを行き交う観光客の数は変化なく推移し、次第に増えていった。なおかつ、闊歩する人々は観光地を歩いていることから笑顔が多く、どこにでもある観光街であった。

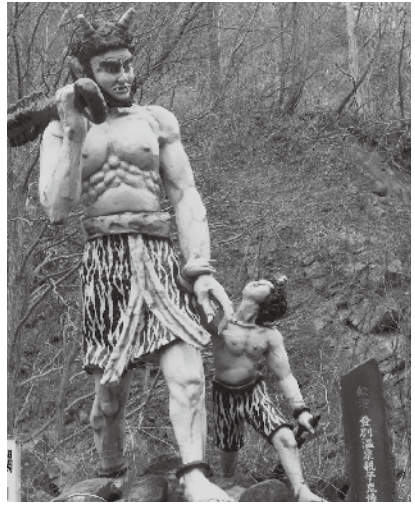
だが、まちの風景は確実に変わっていた。最も大きな変化は、言語である。日本語をしゃべらない観光客が極楽通りを闊歩し、英語、台湾語、

韓国語、中国語と様々な外国語が飛び交う国際通りに変わったことである。

平成8年の訪日外国人観光客は1万人に届かず7千95人であったが、粘り強く行っていた台湾などへの営業活動の効果が表れはじめた。平成10年には台湾、香港からの観光客を中心に5倍の3万6千374人（うち台湾1万8千515人、香港1万1千810人）を記録し、急激な変化が生まれはじめたのである。翌年の平成11年には台湾、香港、韓国がさらに増加して、5万3千111人と5万人を超えた。これは経済成長を果たし富裕層がレジャーに本格参入してきたこともあり、自然景観にも優れ、治安が良く、販売している化粧品や薬など商品の質も高いことから日本を旅行先を選んでいるものと推測された。特に雪を知らない台湾の人々は「白い冬」を求めて北海道を訪れていた。

そして人口10億人を超える中国本土の人々が日本、北海道を旅行先に指名をしたのは平成20年以降のことである。22年7月に中国人個人への観光ビザの発給要件を国が緩和して多くの中国人観光客が来日するようになる。本市にも来訪するようになった。さらには、平成20年に洞爺湖畔のホテルを会場に開催された北海道洞爺湖サミットで胡锦涛国家主席が「望楼NOGUCHI」に1泊し、登別温泉に初めて海外の首脳が宿泊をしたということから、大いにネームバリューが上がった。平成20年には8千471人だった中国本土からの来客客が翌年1万4千28人と1万人を超え、平成22年も1万9千563人と増加を続けた。平成26年には中国本土だけで5万1千25人と5万人を超えた。

中国本土からの観光客はその後も順調に増え、平成28年には8万6千227人となり、10万人超えも時間の問題ともいえる状況であ



登別温泉親子鬼像

る。これに韓国や台湾、香港、シンガポール、マレーシア、欧米など外国人全体で47万9千891人と50万人に限りなく近づいている。世界のいたるところからやすらぎと癒しを求めて登別温泉に来て、

ここでリフレッシュするという「国際観光レクリエーション都市」として認知されたと言える。昭和61(1986)年から平成期の30年間をかけた登別温泉は「国際観光都市」としての地位を確立させていったのである。全市観光というメインテーマを象徴すべく、昭和39(1964)年に始まった「登別地獄まつり」のクライマックスは最後の「鬼踊り大群舞」であり、温泉地区の旅館従業員や住民ばかりでなく、観光客も巻き込み、一大群舞を繰り広げるのであるが、平成25(2013)年の50回記念では、今の登別温泉の反映を予想させるかのように、鶯別、幌別、登別市内全域から市民が集まり、全市観光を象徴する大群舞となり、これに姉妹都市である白石市、海老名市の市民も加わっていたという。また、「おどろおどろしい」太鼓で登場する「地獄の谷の鬼火花」も今や登別温泉では欠かすことの出来ないイベントとなっている。手に持った火花の筒から熱く華やかな火花が飛び散っているが、主役は鬼火を持った鬼たちだけではなく、見物に訪れた観光客を安全に誘導している場内整理

員を含めた多くの地元の若者たちの故郷を想う強い志という財産によって、登別温泉は支えられている。そのような点などが評価されて、令和2(2020)年2月の第24回ふるさとイベント大賞で地域活性化に向けたイベントの1つとして内閣総理大臣賞を受賞した。

### 中登別町

中登別町は、登別川、道央自動車道、四方嶺、白老町との境界に囲まれた地区である。

「中登別」との地名は、昭和9(1934)年の字界地番改正の際に誕生し、昭和49年の町名改正においても引き継がれて現在に至っている。昭和9年以前の字名では、カモイワツカ、ルトラシコ、キムタイ、サツナイ、ボンアヨロなどアイヌ語地名に由来する字名が多数あった。この頃は、沢筋を道として登別温泉方面に向かっていたようで、「ルトラシコ」は、登別地区から登別温泉に向かう旧道があった沢の1つであった。その他に登別温泉に向かう道(沢)は、東から「ルオコツ」、「チャラシナイ」、登別川沿いに上る道があったといわれている。「チャラシナイ」は現在の市道本町花園通りの延長線上にあった沢、左手の高台には旧登別神社があった。この神社を囲むように登別川に至るまで複数の石切場が設けられ、それに平行して切り出した石を運ぶ馬車鉄道が敷設されていた(「登別地区」参照)。

古い地名に詳しい方であれば、中登別といえは「カモイワツカ」をすぐに思い浮かべるであろう。

「カモイワツカ」は、道道洞爺湖登別線沿いにある湧き水で、現在もコンコンとわき出る様子を見ることができる。この湧き水は、江戸期には旅人の喉を潤し、登別駅と登別温泉駅の間を馬車が走るようになる



カムイワッカ

馬も水を飲んで一息入れる場所であった。蒸気機関に転換されると「神威若」という停留所が設けられて、蒸気機関車への給水地点にもなった。明治37（1904）年に小林商店がカムイワッカ横に店を出した。「中之茶屋」と呼ばれ、お菓子やお茶も販売されていたという。湧き水のそばには「水神」が祭られ、その近くには「地神柱」も祭られている。この地神柱は、元々道道を挟んだ向かい側の高台にあり、「中登別神社」と通称され、例祭で行われる子ども相撲には知里真志保も出場していたという。

明治25年に山梨県人の飯島太市が移住してきており、32年には住吉フジがカモイワッカの近くに移住してきた。また、大正7（1918）年には道道の白老町側の高台に小野寺平吉が乳牛30頭を導入して酪農業を営み、登別温泉に牛乳を供給したという。小野寺は、昭和4（1929）

年にブラジル開拓団の一員として渡伯した。その後、小野寺が牧場を営んでいた土地の近くでは、軍隊の防寒着の材料として毛皮を供給する牧場が設けられていたが、その詳細を伝える資料は見つかっていない。

昭和9年5月、前年12月に東宮殿下が誕生されたことを記念して、登別温泉老友会が中心となって「東宮殿下御生誕植樹会」（会長栗林徳一）を結成し、地域住民の奉仕で

現在の道道沿いに桜を植樹した。桜の植樹は、翌年にも継続して行われ、満開時期には「桜のトンネル」として高い評価を得た。

昭和15年には、現在、白老ファーム登別分場の場所に軍用保護馬普通鍛錬指導員を養成する馬事訓練所が設置された。同訓練所では、各市町村に人員の割り当てがあつて、順次入所して訓練を受けたという。昭和18年5月の米国潜水艦ステイルヘッドによる艦砲射撃の一発が、この訓練所の門柱に命中したと伝わる。馬事訓練所は、戦後廃止されて、その跡地に昭和24年7月に農林省の家畜衛生試験場北海道支場が設置された。同試験場は、昭和41年に月寒（札幌市豊平区）に移転し、昭和44年に土地所有者である栗林運輸がユートピア牧場を開設して、競走馬の育成を図った。同牧場では、栗林育子が詠んだごとく「疾走の馬 青嶺の魂」となつて菊花賞1回、天皇賞2回制覇した伝説のGI馬「ライスシャワー」が誕生したところでもある。名馬を偲んで牧場の中に石碑が建てられていたが、今は上鶯別町の旧ユートピア牧場跡（現・篠田牧場）敷地内に移設された。

馬事訓練所敷地を道道倶多楽湖公園線を挟んだ向かい側、四方嶺の麓の土地は、戦後の農地改革で払い下げられて農地となり、そこで生産された大根は、登別温泉のホテル、旅館に納品されたという。この土地には、昭和36年に登別ゴルフ場が、同年の冬にはスキー場がオープンした。ゴルフ場は9ホールと小ぶりであつたが、登別温泉などを訪れた観光客にも人気であつたという。また、スキー場には、高松宮を初めとする皇族もスキーを楽しまれた。

昭和45年には紅葉橋が開通した。それまで、登別駅前から洞爺湖方面に向かうには、登別温泉の市街地を通過する必要があり、増加する観

光客の安全の確保を図るために、市街地を通過しない経路が求められていた。しかし、なかなか道道昇格が決定しなかったことから、登別町が昭和42年度に先んじて着工し、それと平行して道道昇格を求めていくこととした。44年度には念願の道道に昇格した。

中登別町は、本市観光のメインストリートが通過する地区であると同時に、医療機関や福祉施設も並ぶ地区でもあった。

昭和40年、道央自動車道の山手側に111床を有する三愛病院が開院した。三愛病院は平成30（2018）年現在534床を有するまでに拡大された。また、昭和58（1983）年には、道道倶多楽湖公園線沿いに本市初の特別養護老人ホーム「緑風園」が開設され、平成6（1994）年には介護老人保健施設グリーンコート三愛が開設されている。その後も高齢者グループホームが開設されるなど、本市内でも最大の規模を誇る一大医療、福祉ゾーンとなった。

中登別町の住宅は、小林商店の周辺や道道倶多楽湖公園線の東側に古くから点在していたが、人口が徐々に増加していくのは、昭和50（1975）年代に入ってからである。そのため、市営住宅紅葉谷団地が昭和42年に建設された頃は、周囲には住宅を見ることができず、高台に滝泉寺（昭和39年に登別温泉町から移転）がある程度であった。昭和51年に禅林寺が登別温泉町から移転してきた頃には、数軒ずつ住宅が増えていき、平成期に入るとほぼ現在と同様の軒数での住宅街となった。

中登別地区は登別、登別温泉地区の中間地区ということで、温泉に向かう観光客、温泉から帰る客のための休息所としてカムイワッカ下のごころに、昭和55年、登別温泉を訪れた文人、画家等の色紙を展示する「登別温泉美術館」がオープンしたが、程なく閉鎖し、それらの色紙は、現

在は登別温泉ふれあいセンター「遊鬼」内で一部が展示されている。平成4（1992）年には「登別伊達時代村」がオープンし、登別駅前から登別温泉に向かう道路も、拡幅された。平成8年には、「登別伊達時代村」の近くに半円形の金色に輝く「ロッコウゴールドパーク」という砂金取りをメインイベントとするテーマパークもオープンした。残念ながら、この施設も2年後には室蘭市へと移設していった。

昭和60（1985）年10月に道央自動車道登別東インターチェンジが開通し、翌11月には登別東インターチェンジ前に歓迎鬼像（高さ18メートル、重さ18トン）が設置された。

平成8（1996）年5月、桜のトンネル横に「桜ざか駐車公園」が完成した。同公園は、駐車場のほかにトイレも整備されており、桜の時期には桜のトンネルを見る観光客が訪れている。また、登別まちづくり促進期成会が中心となって、5月の連休中に「桜坂ウォーク」のイベント会場としても活用されている。

令和2（2020）年10月には、道道洞爺湖登別線と道道倶多楽湖公園線が分岐する交差点に市消防署東支署が供用を開始した。

中登別地区は、登別地区と登別温泉地区の中間地点であると同時に、隣町の白老とも接している。このため、かつては白老町との行政界が曖昧で、どこをもって境界とするかで意見を異にすることもあった。飯島太市が子どもたちを小学校へ通わそうとした時のことである。自宅の行政区域を白老とされた場合、子ども達は、およそ12キロ先の敷生小学校まで通わなければならなかった。これがもし、登別の小学校であれば、8分の1の1.5キロメートルに縮まるのである。彼は、滝本金之助（2代目金蔵）の助けを借りてアヨロの代表者たちと協議を重ね、明治30（1897）

年、いわゆる無所属部落と呼ばれていた地を登別村へと変えることに成功し、子ども達を登別小学校へ通わせることができた。

滝本金之助は、無所属部落の問題もあつたが、もう一つ、倶多楽湖についても、登別へと行政区域を変えようと考えていた。その当時、登別温泉の人々は、透明で美しい「倶多楽湖」の水こそ登別温泉の水源と考えていたようである（実際は流入、流出のない閉塞湖で湧水や降雨時の豪雨で水位は上昇、浸透しやすい地質の所からアヨロ川に漏水して水位を保っている）。

明治42年、美しい湖にヒメマスの養殖を目指し、「倶多楽湖」に入植をした夫婦がいた。夫中尾節蔵は鳥取県出身で札幌農学校卒業、妻トメは青山学院卒業で英語、ドイツ語に堪能であるとともに馬術、長刀なども達者であつた。明治42年、43年にそれぞれ100万粒（十和田湖）、44年には支笏湖からも100万粒を取り寄せ、湖に放流して生育を願つた。実験の結果は、多くのヒメマスが育ち成功したかに見えたのであつたが、残念なことに魚体は一定の大きさまでしか育たなかつた。なおかつ、捕獲したヒメマスをこのようなへんぴな場所からどうやって運搬するのかという問題に突き当たり、これを解決できぬ間に密漁者たちが早々と温泉旅館へ売り捌きはじめた。節蔵は販路を開拓できず仕舞いで、商売にならない事態に陥つていった。妻のトメは湖畔に残つて養殖を続けることを希望するが、節蔵は事業に見切りを付けて大正2（1913）年、北大の講師となつて札幌へと去つて行った。

それからトメは亡くなる昭和17（1942）年まで、「倶多楽湖」で独り暮らしを続けた。大正12（1923）年、起死回生を試みるため札幌から戻つた節蔵は、再び倶多楽湖の水を利用して発電所を建設する計

画を立てるが、これが登別温泉の人々を刺激し「温泉の水源を枯渇させる悪巧み」と反対され、計画は頓挫し、トメは一層孤立感を深めることとなつた。トメはこれを機会に、ヒメマスの養殖をあきらめ、造材、炭焼きに着手した。登別温泉の人々は、一人の中年女性があつた時代洋装で馬にまたがり、炭を販売するため、町を闊歩するのを見て、不思議な感覚にとらわれたのではないかと思われる。倶多楽湖が有効な観光資源としてクローズアップされたとき、この地には昔、華麗に馬を乗りこなす貴婦人が住んでいたという伝説として蘇ることとなつた。漁業権は白老町が管理しながらも観光資源としての営業権は登別にあるものの如何せん交通アクセスが悪く、誰も彼もが行くことの出来ない秘境の地ともいふべき倶多楽湖が、昭和26（1951）年、登別温泉と地獄谷と大湯沼と日台山と倶多楽湖に至る約7<sup>キロメートル</sup>を町道としての整備工事が行われた。4年後には開通して、更にその3年後の昭和33年には道道へと昇格し、北海道の整備により、道路状況が格段に改善され、観光客も湖畔までバスで行くことが可能になつたのである。また、登別温泉ケーブル（株）の当初の計画では、第2期工事で、四方嶺から倶多楽湖までをケーブルカーで繋ぐなど一大観光地としての青図も描かれていた。

支笏湖や洞爺湖のように「湖」を景観の1つに加えて登別温泉をより広く売り出そうと、町道が開通した昭和30年の8月20日に第1回湖水祭りが開催された。滝本金蔵とともに中尾トメ、水没者の慰霊祭、灯籠流し、花火大会、ボートレース等が盛大に開催されることで、登別温泉の観光資源としての位置づけが具体的なものとなつた。湖水遊覧のための「白鳥丸」も昭和35年頃まで走つていたようである。昭和33年5月には町営「倶多楽湖青少年宿舎」も開設された（昭和54年3月廃止）。

昭和33年3月号の「新潮」に室蘭出身の芥川賞作家八木義徳が『倶多楽湖』という短編小説を発表した。

高倉富美子と名付けられた女性主人公は明らかに「トメ」をモデルにしており、生涯を「倶多楽湖」とともに暮らしたと綴られている。そして、元氣だった頃、彼女は洋装で颯爽と馬にまたがり、険しい山道を華麗な手綱裁きで上り下りしていたという。

昭和40年頃までは、倶多楽湖には灯籠なども浮かび、幻想的な湖として観光スポットの一つであつたが、倶多楽湖の湖水祭りも「登別地獄まつり」に押されて次第に精彩を欠き、倶多楽湖は再び訪れる人の少ない静かな湖へと変わっていった。

#### 参考文献

- ・登別町 『登別町史』昭和42年
- ・登別市 『市史ふるさと登別』昭和60年
- ・登別市 『広報のぼりべつ』各号
- ・登別温泉国民学校 『沿革誌』
- ・登別温泉(株) 『70年の小録』昭和60年
- ・岩原秀夫 『登別観光史』平成10年
- ・猪俣二郎 『登別観光史Ⅱ』平成10年